木次町文化財調査報告書　第4集

平　田　遺　跡

2004年10月

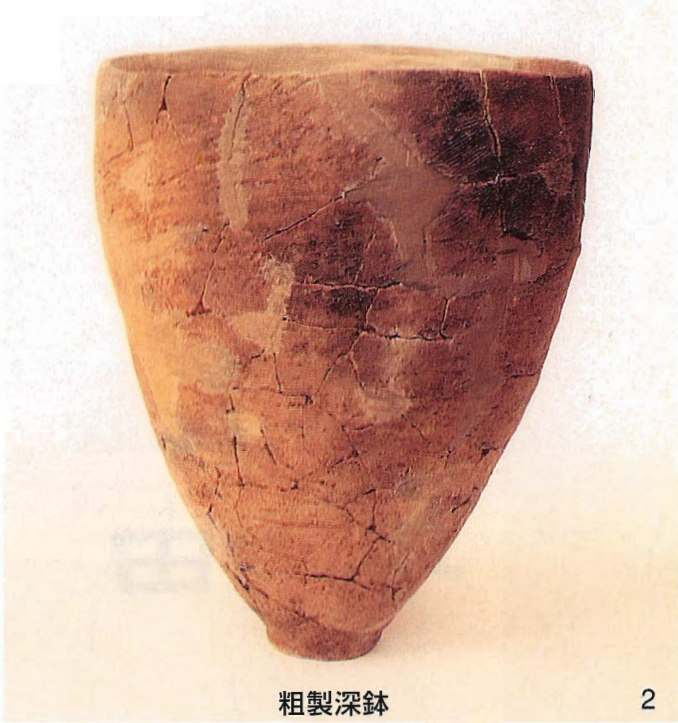
島　　根　　県
木次町教育委員会

平　田　遺　跡

2004年10月

島　　根　　県
木次町教育委員会

精製有文深鉢 1


粗製深鉢 2

精製無文浅鉢 3

粗製深鉢 4

粗製有文
小形鉢
高 8cm 5

粗製浅鉢 6

平田遺跡出土縄文土器（1）

7

8

9

10

11

口絵1	対照挿図	第12図ー1
2	〃	第19図ー2
3	〃	第18図ー3
4	〃	第19図ー1
5	〃	第19図ー4
6	〃	第18図ー2

口絵7	第Ⅰ調査区出土	浅鉢	第14図ー61
8	〃	浅鉢	第14図ー50
9	〃	浅鉢	第14図ー51
10	〃	粗製深鉢（倒立で出土）	第7図
11	第Ⅱ調査区E-7土壙内出土	浅鉢	第39図-1

平田遺跡出土縄文土器（2）

序　　文

本書は、木次町教育委員会が文部省の国庫補助事業として平成7･8年度に行った木次町立温泉小学校屋内運動場建設工事及び温泉幼稚園建設工事に伴う平田遺跡の発掘調査報告書であります。

平田遺跡は昭和27年、旧温泉中学校校庭（現温泉小学校校庭）整備工事の際に縄文時代中期の撚糸文地土器が出土し、周知された遺跡です。この度の発掘調査でも縄文時代の石器製作跡や土壙が検出され、現在の温泉小学校付近には広範囲にわたる縄文遺跡が存在することが確認されました。

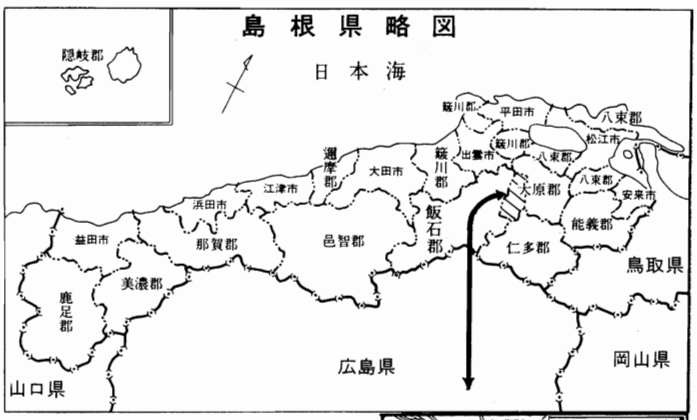
出土遺物では縄文時代後期の精製土器については、島根県埋蔵文化財調査センターのご指導により復元することができました。ここに改めてお礼申し上げます。

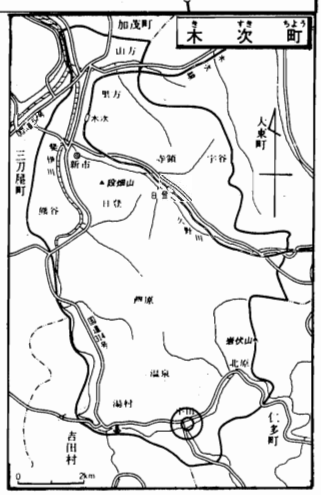
地域開発によって遺跡が姿を消していくことはまことに残念ではありますがこの調査報告が斐伊川水系、ひいては山陰地方の縄文文化の解明に少しでも役立てば幸いに存じます。

本調査にあたりご懇切なご指導、ご援助を賜りました島根県教育庁文化財課をはじめとする多くの先生方、及び厳しい気象条件のもとで調査作業に当たっていただいた方々に対し衷心より厚くお礼申し上げます。

平 成 9 年 3 月

島根県大原郡木次町教育委員会
教育長　橋　本　敏　雄





おおはらぐんきすきちょう
大原郡木次町位置図
(二重円は平田遺跡の位置)

例　　言

1. 本書は、木次町教育委員会が平成7・8年度に行った木次町立温泉小学校屋内運動場建設工事及び木次町立温泉幼稚園建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本報告書は平成9年度に既刊となっていたが一部に誤記が判明したため、改訂版として再刊するものである。
2. 本書に記載した遺跡は、下記のとおりである。
   島根県大原郡木次町大字平田５０８－８外　平田遺跡
3. 調査組織は次のとおりである。
   調査主体者　木次町教育委員会教育長　　橋本敏雄
   調査指導　　島根県教育庁文化財課
   調査担当者　坂本諭司（木次町教育委員会）
   調査員　　蓮岡法暲（島根県文化財保護指導委員）
   発掘作業　　加藤陽一（兼調査補助員）、勝部光江（同）、団野良雄（同）、荒砂久男
   川本勝雄、古澤正男、亀山英夫、佐藤憲正、坂本　昭、鳥谷邦祥、難波　隆
   堀江清美、坂本広由　（協力）木次町シルバー人材センター
   遺物整理　　川隅美代子、鳥谷みゆき、佐藤ひとみ
   事務局　　石田興義（木次町教育委員会教育次長）
   坂本武男（　　同　　社会教育係長）平成7年度
   周藤靖之（　　同　　社会教育係長）平成8年度
4. 次の方々に有益な助言、協力をいただいた。記して謝意を表する。（略敬称、順不同）
   遺物、土壌分析　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）、若月利之（島根大学生物資源科学部教授）、三浦　清（株式会社エイト・コンサルタント顧問）、川本令一、中村唯史（島根大学理学部地質学科在学）
   調査協力、助言　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）、足立克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）、板垣　旭（三刀屋町教育委員会）、吾郷和宏（加茂町教育委員会）、山崎　修（頓原町教育委員会）藤原友子、㈲荒砂土建、㈲川本工務店
5. 図中の方位は磁北を示す。
6. 遺物の実測は、蓮岡、杉原、坂本が行い、浄書（トレースなど）は主に蓮岡、佐藤が行った。また口絵復元土器の写真撮影には島根県埋蔵文化財調査センター錦田剛志氏の協力を得た。その他の写真撮影は坂本が行った。
7. 本書の編集は、杉原、藤原の協力を得て、坂本、蓮岡が行った。
8. 本書の執筆は、1, 2 章を蓮岡、3, 4 章を坂本が担当した。（3、4章3節（有文土器）の執筆については柳浦俊一氏の協力を得た。）
9. 出土遺物、実測図及び写真類は木次町教育委員会で保管している。

目　　次

第1章　調査に至った経緯……1

第2章　地理的、歴史的環境 …… 1

第3章　第Ⅰ調査区 …… 5
　第1節　調査区の経過と概要 …… 5
　第2節　遺　構 …… 5
　第3節　遺　物 ……14
　第4節　小　結 ……34

第4章　第Ⅱ調査区 ……37
　第1節　調査の経過と概要 ……37
　第2節　遺構 ……37
　第3節　遺物 ……47
　第4節　小結・まとめ ……70

分析報告書
　平田遺跡出土人骨……74
　平田遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壌分析結果報告書……76
　木次町平田遺跡堆積層中のアカホヤ火山灰層降灰層準の推定……80

挿　図　目　次

第1図 奥出雲における　頁
斐伊川水系の縄文・弥生遺跡分布図……3
第2図　調査区全体地形図 ……6
第3図　第Ⅰ調査区全体図 ……7
第4図　第Ⅰ調査区Eライン土層図 ……9
第5図　第Ⅰ調査区土器出土状況実測図(1) ……10
第6図　〃　(2) ……11
第7図　第Ⅰ調査区出土倒立土器実測図……12
第8図　第Ⅰ調査区土器出土状況実測図(3) ……12
第9図　〃　(4) ……13
第10図　第Ⅰ調査区焼土周辺実測図 ……14
第11図　焼土周辺出土遺物実測図 ……14
第12図　第Ⅰ調査区出土縄文土器実測図(1) ……16
第13図　〃　(2) ……17
第14図　〃　(3) ……18
第15図　〃　(4) ……19
第16図　〃　(5) ……20
第17図　〃　(6) ……21
第18図　第Ⅰ調査区出土土器（浅鉢類）実測図 …22
第19図　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器実測図(1) …23
第20図　〃　(2) …24
第21図　〃　(3) …25
粗製縄文土器底部実測図 ……25
第22図　第Ⅰ調査区出土石錘実測図 ……33
第23図　第Ⅰ調査区出土石器実測図 ……35
第24図　第Ⅱ調査区全体図 ……38
第25図　第Ⅱ調査区Eライン土層図 ……39
第26図　A-2土壙土壌分析試料採取位置図 ……40
第27図　A-2土壙実測図 ……40
第28図　A-6土壙実測図 ……40
第29図　C･D-6土壙土層図 ……41
第30図　C･D-6土壙実測図 ……41
第31図　C･D-6土壙出土遺物実測図 ……41
第32図　D-5土壙実測図 ……42
第33図　D-5土壙出土遺物実測図 ……42
第34図　D-6土壙実測図 ……42
第35図　D-6土壙出土遺物実測図 ……43
第36図　E-4土壙実測図……43
第37図　E-4土壙出土遺物実測図……43
第38図　E-7土壙実測図……44
第39図　E-7土壙出土遺物実測図……44
第40図　F-5土壙実測図……44
第41図　G-5ピット実測図 ……45
第42図　第Ⅱ調査区出土縄文土器実測図(1) ……48
第43図　〃　(2) ……49
第44図　第Ⅱ調査区出土土器底部実測図 ……50
第45図　第Ⅱ調査区出土石鏃実測図(1) ……56
第46図　〃　(2) ……57
第47図　第Ⅱ調査区出土石斧実測図(1) ……58
第48図　〃　(2) ……59
第49図　第Ⅱ調査区出土石錘実測図 ……59
第50図　第Ⅱ調査区出土石器・土器実測図 ……60

表　目　次

頁
第1表　第Ⅰ調査区出土縄文土器観察表……26～30
第2表　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器観察表……31
第3表　第Ⅰ調査区出土精製粗製浅鉢観察表……32
第4表　第Ⅰ調査区出土粗製土器底部観察表……32
第5表　第Ⅰ調査区出土石錘一覧表……34
第6表　第Ⅰ調査区出土石器一覧表……36
第7表　第Ⅱ調査区遺構に伴う縄文土器観察表……46
第8表　第Ⅱ調査区出土土器底部観察表……50
第9表　第Ⅱ調査区出土縄文土器観察表……51
第10表　縄文土器底部調査区別比較表 ……53
第11表　第Ⅱ調査区出土石鏃一覧表 ……61～66
第12表　第Ⅱ調査区出土石斧一覧表 ……67.68
第13表　第Ⅱ調査区出土石錘一覧表 ……69
第14表　第Ⅱ調査区出土石器・土器一覧表 ……69.70
第15表　第Ⅰ調査区石錘出土分布表 ……71
第16表　第Ⅱ調査区出土遺物分布表 ……72
第17表　第Ⅱ調査区出土石鏃・石斧数
及び細石屑岩質表 ……73

図　版　目　次

図版第1　第Ⅰ調査区遺物出土状況等(1)
図版第2　〃　(2)
図版第3　〃　(3)
図版第4　第Ⅰ調査区出土磨消縄文土器(1)
図版第5　〃　(2)
図版第6　〃　(3)
図版第7　第Ⅰ調査区出土精製縄文土器（浅鉢）
第Ⅰ調査区焼土周辺と出土遺物
図版第8　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器
図版第9　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器（底部）
図版第10　第Ⅰ調査区出土石器
〃　石錘
図版第11　第Ⅱ調査区遺構・遺物出土状況等(1)
図版第12　〃　(2)
図版第13　〃　(3)
図版第14　第Ⅱ調査区出土縄文土器
図版第15　〃
図版第16　第Ⅱ調査区出土石鏃
図版第17　第Ⅱ調査区出土石斧
図版第18　第Ⅱ調査区出土石錘
その他石器、弥生土器
図版第19　第Ⅱ調査区土壙内出土遺物

参考とした文献

奈良国立文化財研究所史料　福田貝塚資料
宍道正年著　島根県の縄文式土器集成1
島根県教育委員会　志津見ダム建設予定地埋蔵文化財調査報告書2　森遺跡
〃　〃　3　門遺跡他
仁多郡教育委員会　下鴨倉遺跡（第2次発掘調査報告）
頓原町教育委員会　五明田遺跡
雄山閣　季刊考古学「縄文社会と土器」
鈴木道之助　石器入門事典
滋賀考古学研究会　拡張あるいは展開する縄文文化

第１章　調査に至った経緯

平田遺跡は、昭和27年に木次町立温泉中学校校舎（現在の温泉小学校校舎）建設に伴う校庭拡張工事に際し発見された遺跡で、旧遺跡名は温泉中学校校庭遺跡という。

工事の際校庭南東の現プールの付近で、水田下方の土層から縄文式土器が出土し遺跡の存在が確認されたものであるが、遺跡の範囲等や性格等は十分確認されていなかった（木次町誌や地元の人の説明による）。

この時出土した土器は撚糸文地に平行弧状沈線文を配するものや縁帯文、磨消縄文、粗面無文、磨研無文の土器など中期、後期型式のものである。このうち撚糸文地土器は山陽の中期型式の里木Ⅱ式と類似するものであり、本遺跡が山陽側に近いことで注意された（注1）。

その後、土器出土付近で発掘など行われることなく経過したが、近年になり尾原ダム建設に伴って平田地区において河川整備や県道出雲仁多線改良などの総合整備事業の工事が行われることになり、これらの工事が本遺跡周辺で行われることから島根県木次土木建築事務所長から木次町教育長に工事予定地での遺跡確認の依頼があった。また木次町においても町立温泉小学校の屋内運動場及び温泉幼稚園舎が県道を挟んで現校地の南西向かい側に建設されることになった。そこで木次町教育委員会では、両事業に関係して土木工事が予定されている斐伊川、阿井川沿いの水田や県道沿いの水田において平成7年9月に試掘を伴う詳細分布調査を実施した。その結果、20個所中7個所の試掘坑から縄文土器片や石器が出土し、平田遺跡が校庭の範囲にとどまらず広範囲に広がることが確認された。

このような結果をふまえて、建設が急がれていた学校関係部分については発掘調査を実施して実態を明らかにした上で遺跡の取扱いについて検討することになった。そこで屋内運動場建築関係部分316m²（第Ⅰ調査区）については、平成7年10月から12月にかけて調査を実施した。その結果、明確な遺構は検出されなかったものの複数個所の集石が見られ、遺物としては後期、晩期様式の縄文土器片多数のほか石錘などの石器が出土した。また園舎関係部分の308m²（第Ⅱ調査区）については平成8年3月から6月にかけて調査を実施したが、複数の土壙が検出され、遺物では石鏃や打製、半磨製の石斧、石錘など多数の石器の出土が注意された。

なお、この遺構の取扱については、種々協議がなされたが、結局建築工事が実施されることになり、発掘区域は埋め戻されて屋内運動場が建設され、園舎造成地も整備された。

※注1　山本　清「西山陰の縄文式文化」（『山陰文化研究所紀要第1号』島根大学、昭和36年）

第２章　地理的、歴史的環境

１．位置と地理的環境

平田遺跡は、南北に長い木次町の南端、斐伊川と支流の阿井川との合流点位置で、標高約130mの温泉小学校の校地及び周囲の水田部分、木次町大字平田507番地2、508番地8,516番地3

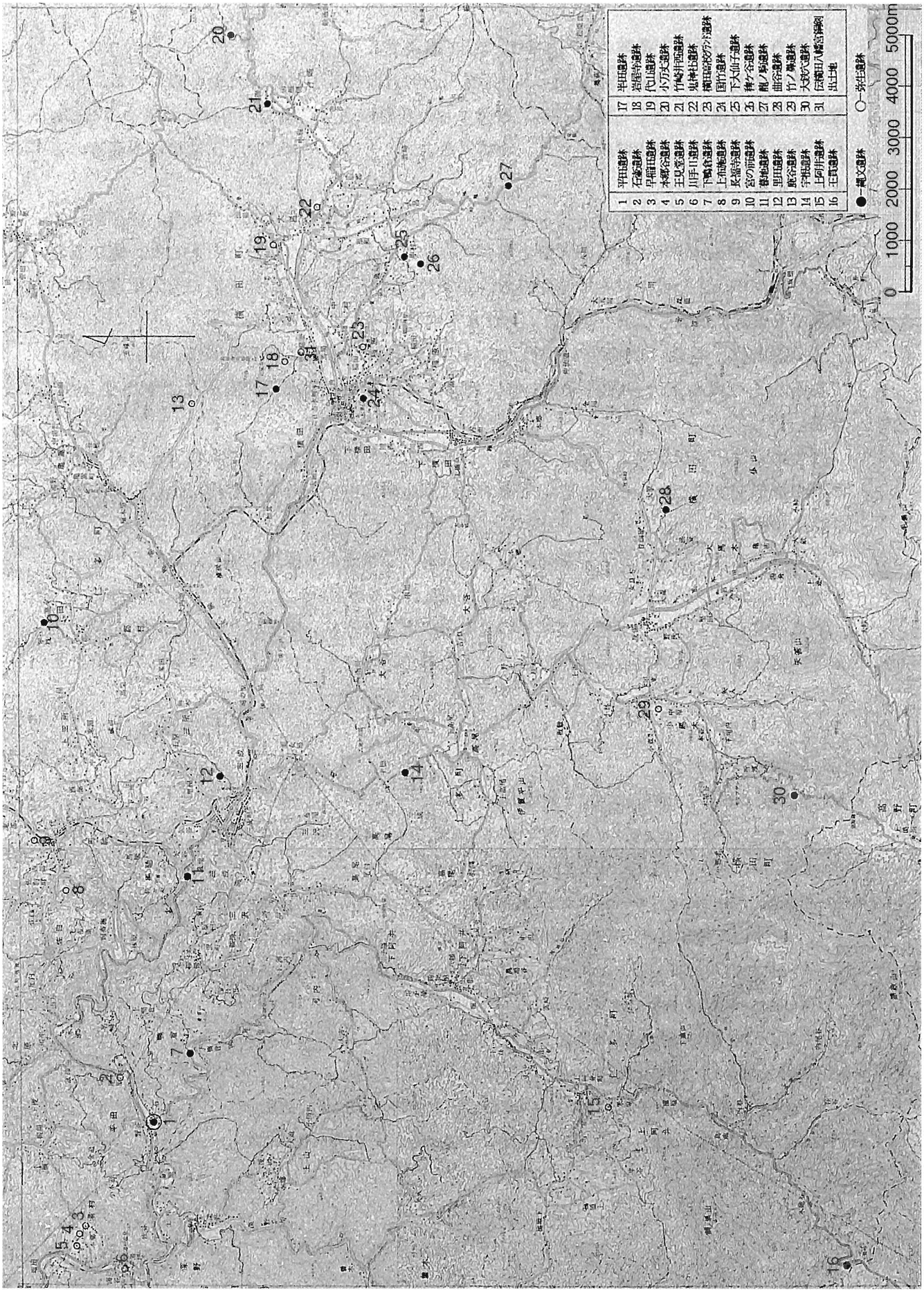
他に所在する。木次町周辺はいわゆる中国準平原で、そこを中国山地脊梁部の仁多郡横田町に源を発する斐伊川が北に流れる。斐伊川は、木次町でも南、西の縁を嵌入蛇行を繰り返しながら流れるが、本遺跡付近はその上流域にあたり（傾斜約120分の1）、浸食作用によって深い峡谷をなしており堆積平地は少ない（注1）。しかし本遺跡のあたりは阿井川との合流地点であり、やや広くなっていて幅約300mの堆積地形がみられる。斐伊川、阿井川とも現在は水田から数m低い位置を流れているが、河道が固定され下刻作用が進行する以前は両河川とももっと浅い位置を流れていたものと考えられる。現にこのあたりの水田下のかなり浅い位置からは川石が出土すると聞くし、この度の調査でも調査区内で大小の川石の堆積が発見され、遺跡の最下層からは礫を含んだ砂利層が検出されている。

本遺跡の成立に大きな関係をもつと考えられる斐伊川は、古代から流域の住民に大きな恵みを与えてきた（注2）。後述するとおり本遺跡周辺の出雲南部（雲南）の縄文、弥生時代の遺跡は、本遺跡をはじめとして斐伊川の本流、支流沿いに営まれているものが多い。また川にそって古くから自然発生的に道が形成され、その道は中国山地を越えて陰陽を連絡する道に通じていたものと考えられる（注3）が現在使用している陰陽連絡の主要道も古代から開通していたこれらの道筋を利用しているものがある。このような山越えのルートを通じて、雲南地方は古くから山陽側との交流が盛んであった。このような道沿いに営まれた遺跡もいくつか存在するし、前述したとおり本遺跡出土土器に山陽の里木Ⅱ式の影響が認められるのもこのような環境によると考えられる。

2．周辺の遺跡

前途したとおり平田遺跡周辺の雲南の縄文・弥生時代の遺跡は斐伊川の本流及び支流の流域に営まれたものが多い。本遺跡付近から上流地域の遺跡を挙げれば第1図のとおりである（注4）。

町村	番号	遺跡名	種別	出土遺物等	町村	番号	遺跡名	種別	出土遺物等
木次町	1	平田遺跡	散布地	縄文土器、石鏃、石斧など。土壙墓	横田町	17	半田遺跡	散布地	縄文土器
	2	石壺遺跡	〃	石斧		18	岩屋寺遺跡	〃	弥生土器、土師器、須恵器、石斧
	3	早稲田遺跡	〃	弥生土器、土師器		19	代山遺跡	〃	弥生土器　（消滅）
	4	本郷谷遺跡	〃	弥生土器、石斧		20	子万丈遺跡	〃	縄文土器
	5	王見堂遺跡	〃	石斧、石錘		21	竹崎井西遺跡	〃	縄文土器
吉田村	6	川手Ⅱ遺跡	〃	弥生土器、石匙		22	鬼神社遺跡	〃	弥生土器
仁多町	7	下鴨倉遺跡	〃	縄文土器、石鏃、石斧、石錘など		23	横田高校グランド遺跡	〃	弥生土器、石包丁　（消滅）
	8	上布施遺跡	〃	弥生土器		24	国竹遺跡	〃	縄文土器、弥生土器、鉄斧など。住居跡
	9	長福寺遺跡	〃	弥生土器		25	下大仙子遺跡	〃	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、住居跡（消滅）
	10	宮の前遺跡	〃	縄文土器、土師器、須恵器		26	稗ヶ谷遺跡	〃	縄文土器、土器師　（消滅）
	11	暮地遺跡	墓地	縄文土器、（埋甕2個）		27	龍ノ駒遺跡	〃	縄文土器、石器
	12	里田遺跡	散布地	縄文土器、弥生土器		28	曲谷遺跡	〃	縄文土器
	13	鹿谷遺跡	〃	弥生土器（櫛目文土器2個）		29	竹ノ鼻遺跡	〃	石剣
	14	宇根遺跡	〃	縄文土器、石斧		30	大鉄穴遺跡	〃	縄文土器　（消滅）
	15	上阿井遺跡	〃	弥生土器		31	伝横田八幡宮銅剣出土地	銅剣出土地	中細型銅剣
	16	王貫遺跡	〃	縄文土器					



第1図　　奥出雲における斐伊川水系の縄文・弥生遺跡分布図

これらの遺跡の中縄文遺跡のいくつかについて概説する。

7．下鴨倉遺跡は、本遺跡に近い阿井川上流1,5kmの河岸段丘上に営まれたものである。出土遺物は多数の縄文土器や石鏃、石斧、石錘などの石器があり、縄文土器は後期後半の彦崎KⅡ式系のものが最多で中期船元Ⅱ式、晩期黒土Ⅰ式のものがこれに次ぐ。環境は本遺跡によく似ている。(注5)

11．暮地遺跡は、斐伊川が山丘に接近する狭い段丘地形に設けられたものである。底部穿孔の高さ48cm、53cmの2個の粗製深鉢型土器が穴の中に倒立並置した状態で出土した。他に粗製土器片などが出土したが総じて晩期のものと考えられる。下流の同じ雲南の三刀屋町の宮田遺跡でも本例に類似した出土があり、いずれも埋葬施設と考えられる。

16．王貫遺跡は、国道432号線沿い島根・広島の県境に近い谷間にある遺跡で、道沿いの遺跡である。くろぼく土から磨消縄文土器、無文研摩土器や粗製土器、石斧などが出土した。(注6)

24．国竹遺跡は、横田盆地を一望する丘陵上に設けられたもので、雲南では数少ない縄文時代早期の押形文土器が出土した。また上層からは弥生時代中期から古墳時代にかけての土器や住居跡が検出された。

27．龍の駒遺跡は、船通山麓の県境に近い谷間にあり、横田から多里に通じる山越えの道沿いに位置する。戦後早く調査され、後期中津式に該当する磨消縄文土器が出土した。(注7)

いま縄文遺跡に限って斐伊川流域での分布の状況をみるに、中流域に当る木次町北部、大東町、加茂町では分布極めて希薄であり、上流域が当時の生活環境としては優れていたことがわかる。

※注1　木次町誌（昭和47年）

※注2　出雲国風土記には出雲郡の条に次のように記されている。

出雲大川。（中略）河口より河上の横田村に至るまでの間、五つの郡の百姓（たみ）、河に便（よ）りて居（す）めり。出雲・神門・仁多大原の郡
孟春（もつき）より起（はじ）めて季春（やよい）に至るまで材木（くれき）を校（かと）る船、河の中を沿泝（のぼりくだ）る

※注3　出雲国風土記には、道度の条に次のような幹線を記している。大原郡家（木次町里方所在）から南西道と東南道の二つに分かれ、南西道は飯石郡赤来町を経由して広島県三次市に通じる（国道54号線のルート）。東南道は仁多郡家（仁多町郡所在）に至り、さらに分かれて正東道と正南道の二つになる。正東道は鳥取県日野郡毘縁に越える道、正南道は広島県比婆郡油木へ越える道である。

※注4　島根県教育委員会『増補改定島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』（1993年）による。

※注5　仁多町教育委員会『下鴨倉遺跡』（1990年）

※注6　井上狷介・桜井　治「仁多郡阿井村に於ける縄文遺跡」（『島根考古学第2号』、昭和23年）

※注7　山本　清「西山陰の縄文式文化」（『山陰文化研究所紀要第1号』（島根大学）、昭和36年）

第3章　第Ⅰ調査区

第1節 調査区の経過と概要

平成7年8月に行った分布調査で屋内運動場建設予定地が河岸段丘上にあり、周囲も広範囲にわたって平坦面が続くことから立地状況を踏まえて翌9月に試掘調査を行った。

その結果トレンチ№1の黒色土上層から縄文粗製無文土器片が出土した。ここから西へ115mの地点では前述の撚糸文地土器が出土していることから、平田遺跡はこの位置まで拡がることがわかった。

発掘調査は10月から開始した。まずグリッドEからIラインについて調査を進めた。造成用埋土の下は黒色土で南から北へ傾斜しながら広がり、黒褐色土へと漸移しながら包含層を形成していた。

EからIライングリッドのうち、G-12、H-12からは特に土器が集中して出土し、4回にわたって実測、取上げを行った。AからDラインにかけては家屋を撤去した後12月より掘削を開始した。家屋の床土下層は黒褐色土の上に黄茶褐色の微細な砂土が堆積し、北になるほど厚くなっていた。包含層も北へ向って傾斜しており、かっての生活面が傾斜地であったことをうかがわせた。

出土した遺物のうち土器は、量が多く、精製土器も多数出土したことは特筆されるであろう。このうち島根県埋蔵文化財調査センターの指導、協力を得て精製の深鉢、浅鉢を各1個体、粗製無文深鉢4個体を復元することができた。

調査は12月に入って降雪が続いたため困難を極めたが、屋根を取り付けるなど対処し、12月29日現場調査を終了した。

第2節　遺　構

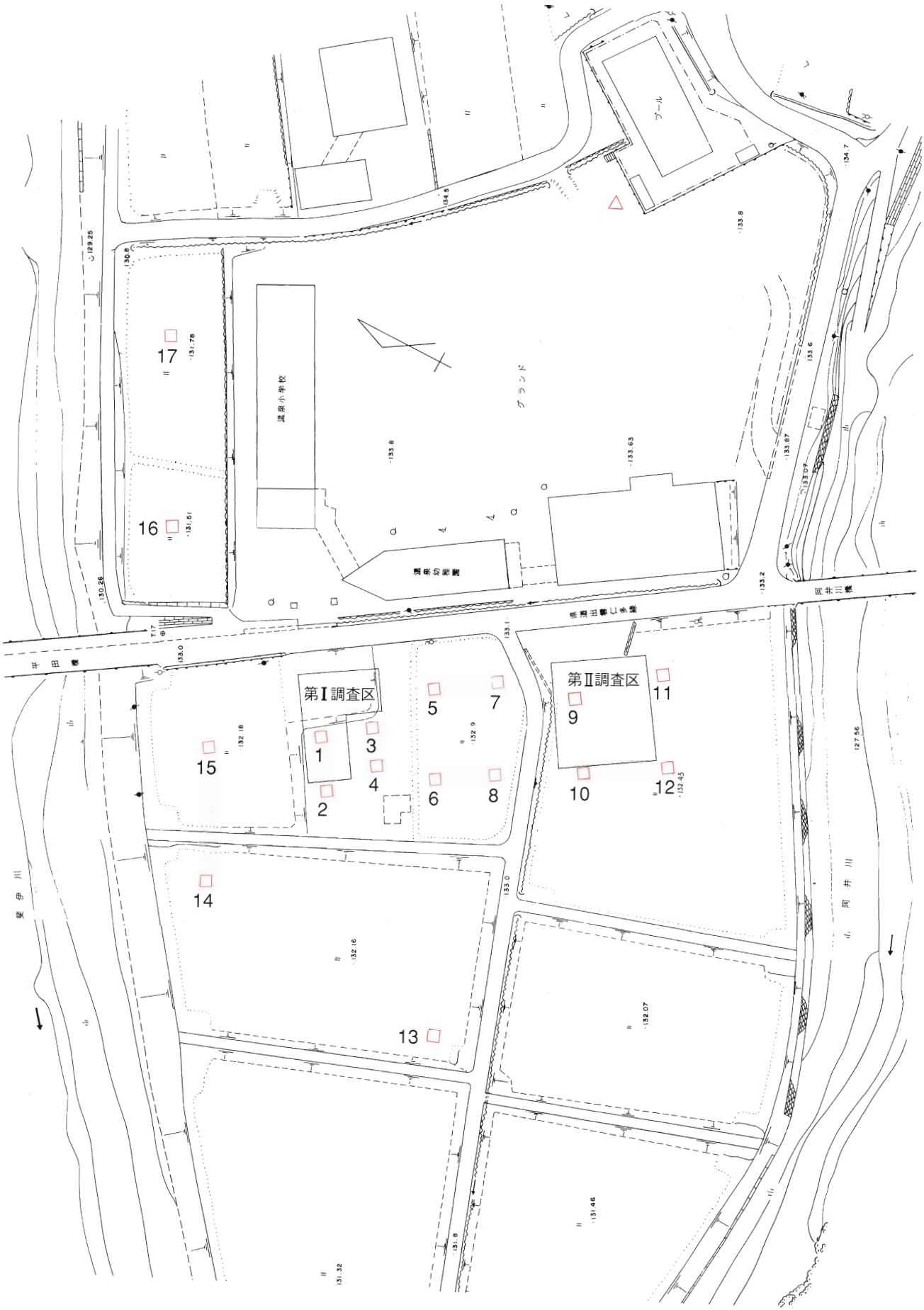
本調査区では包含層が黒色土壌化しており、明確に土層を識別、遺構面を検出することは残念ながらできなかった。従って本節では遺構とは判断しがたいが遺物の出土状況から特徴のある個所を選び、図化をしてみた。以下粗製土器底部と集石、精製土器出土状況、倒立土器と小石群、大石と周辺土器出土状況、焼土周辺状況について記す。

1）粗製土器底部と集石（第9図）

HラインとIラインとの交点付近から検出され、人頭大の河原石にはさまれて大形の粗製土器が出土した。この下半部及び周辺から出土した土器片をもとに復元した粗製深鉢（19図の2）は径43.4cm、器高61.8cmを測る。この器高は本調査区から出土した粗製土器の中でも特に高い。この土器の性格については不明であるが集石と合わせて考えると何らかの意図をもって置かれたことが考えられる。

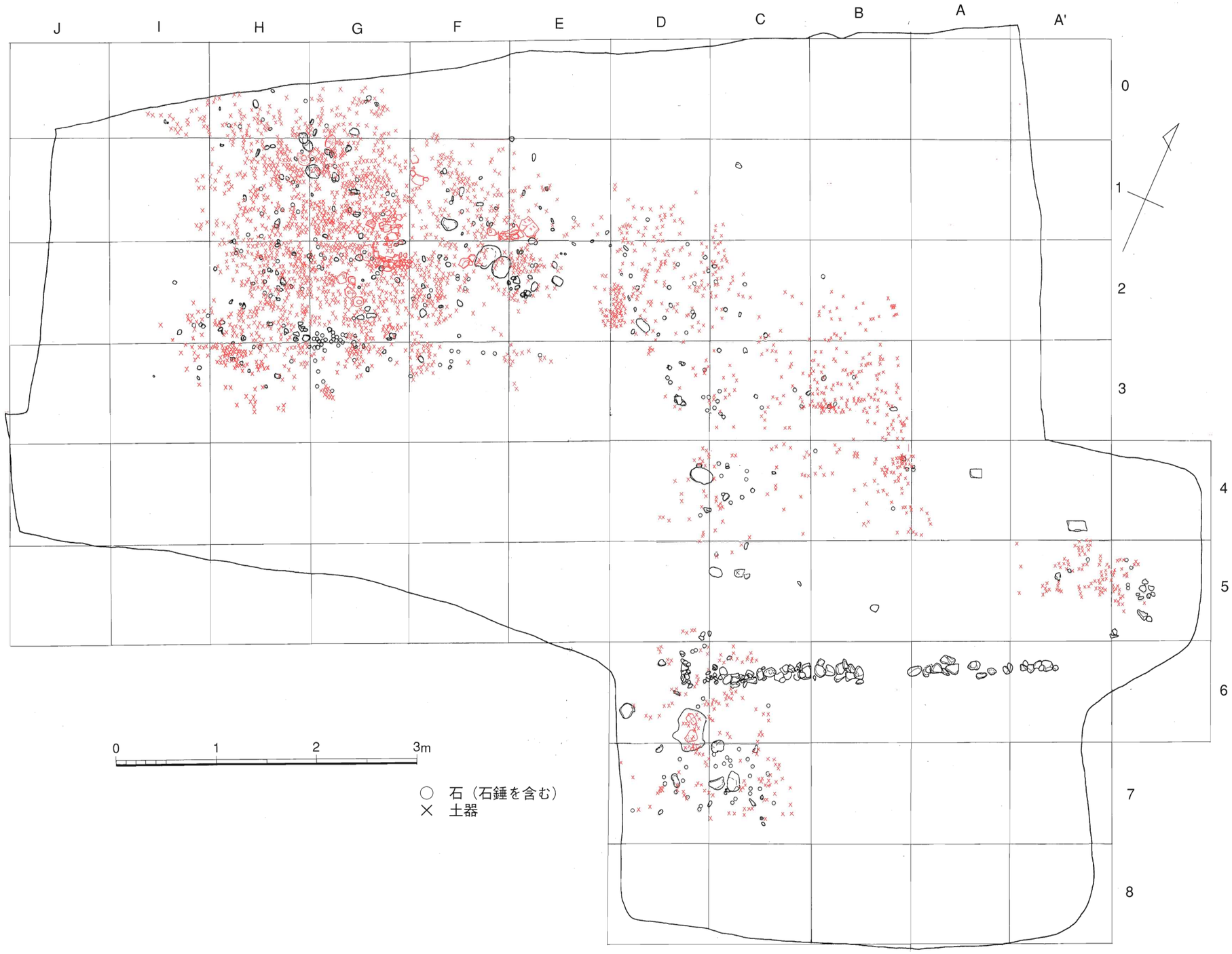
2）精製土器出土状況（第6図）

G-2グリットから出土した有文精製土器で波状口縁をもち、沈線文の幅はやや狭く、丁字文が連続して一周する。これらの特徴からみて福田KⅡ式の古段階にあたる土器である。（第12図1）。この土器が埋蔵された地点はちょうどGラインのベルト中にあってベルト除去

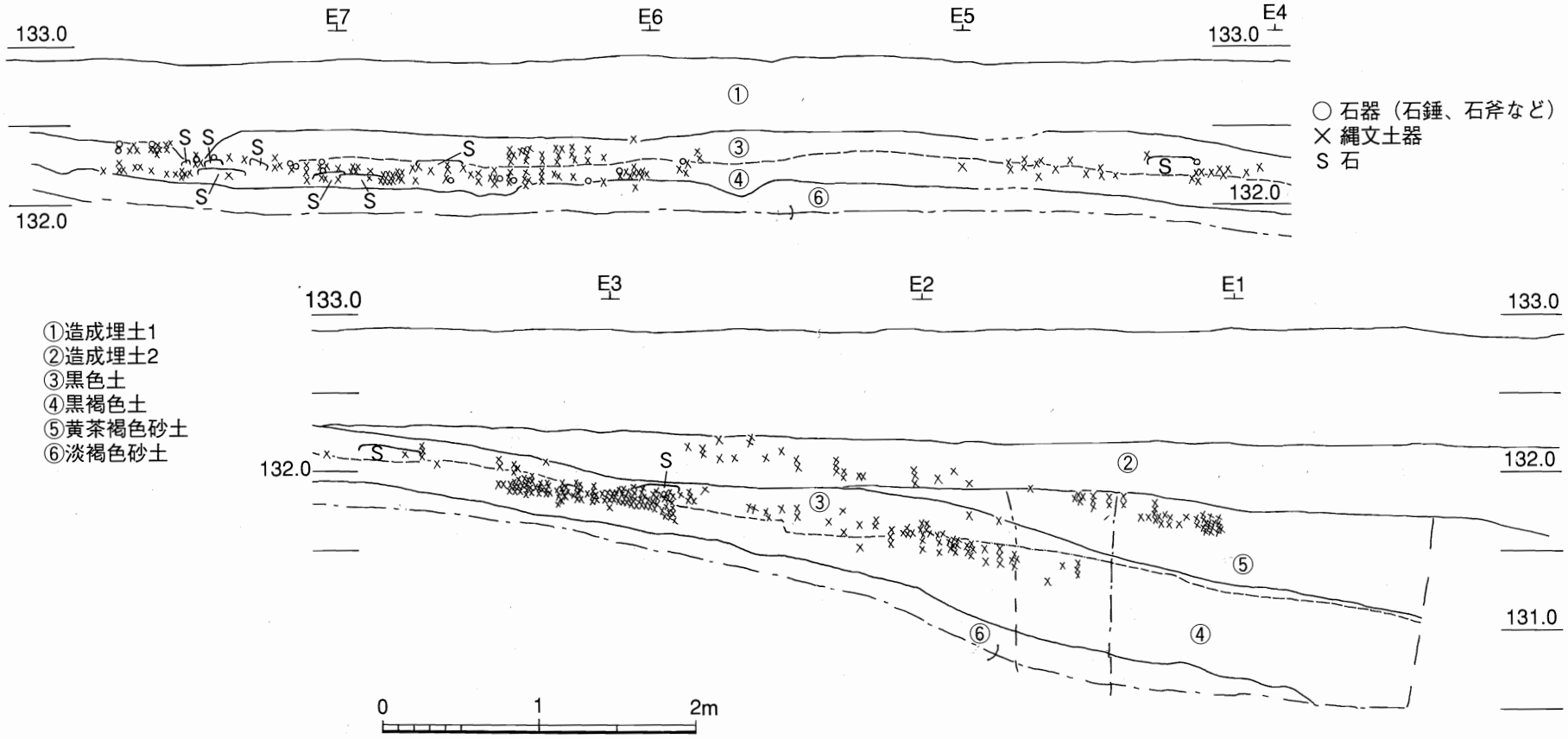


第2図　調査区全体地形図（s=1:1000）

△＝撚糸文地土器出土地点
番号はトレンチ番号を表す

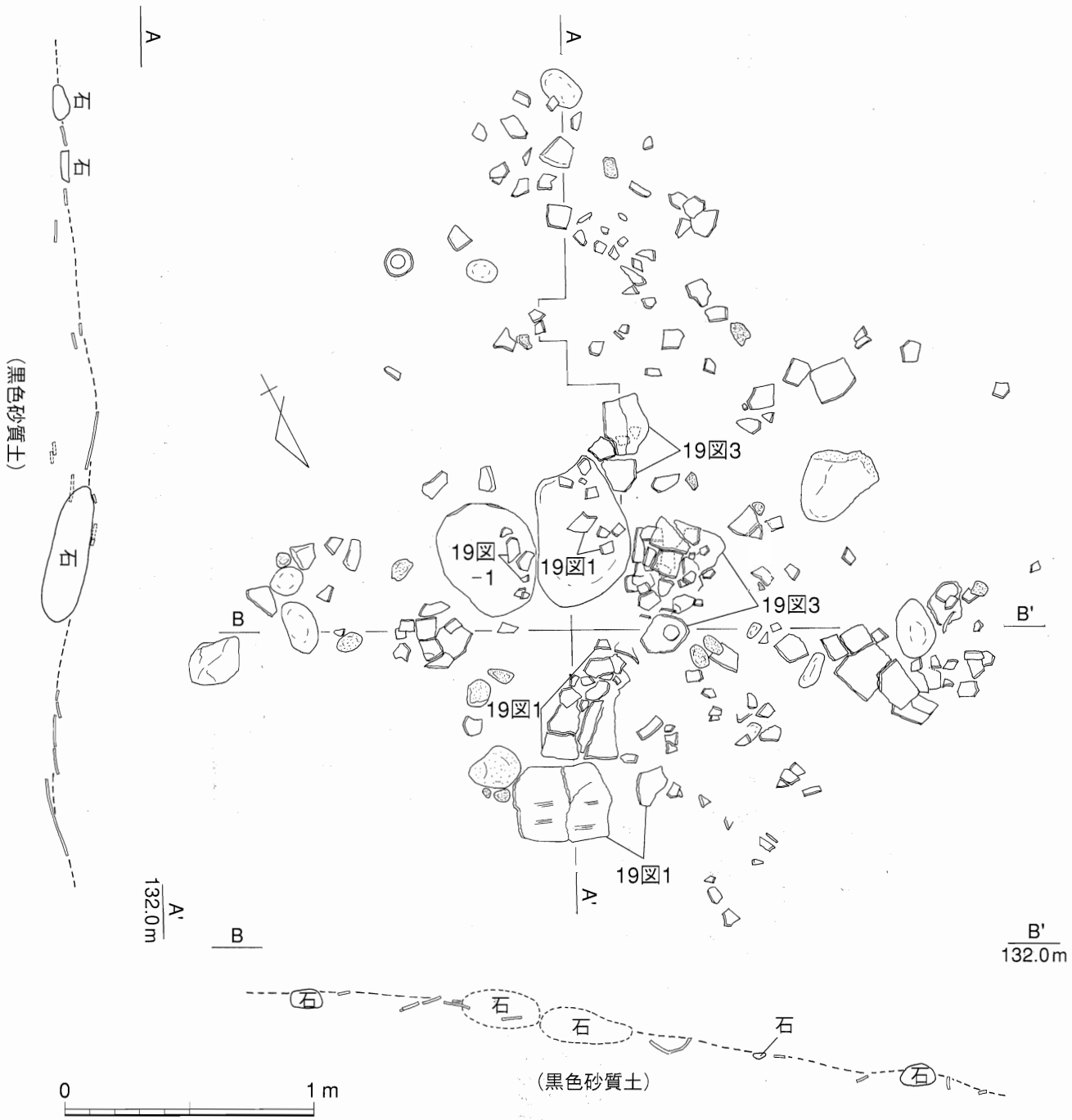


第3図　第Ⅰ調査区全体図



第4図　第Ⅰ調査区Eライン土層図

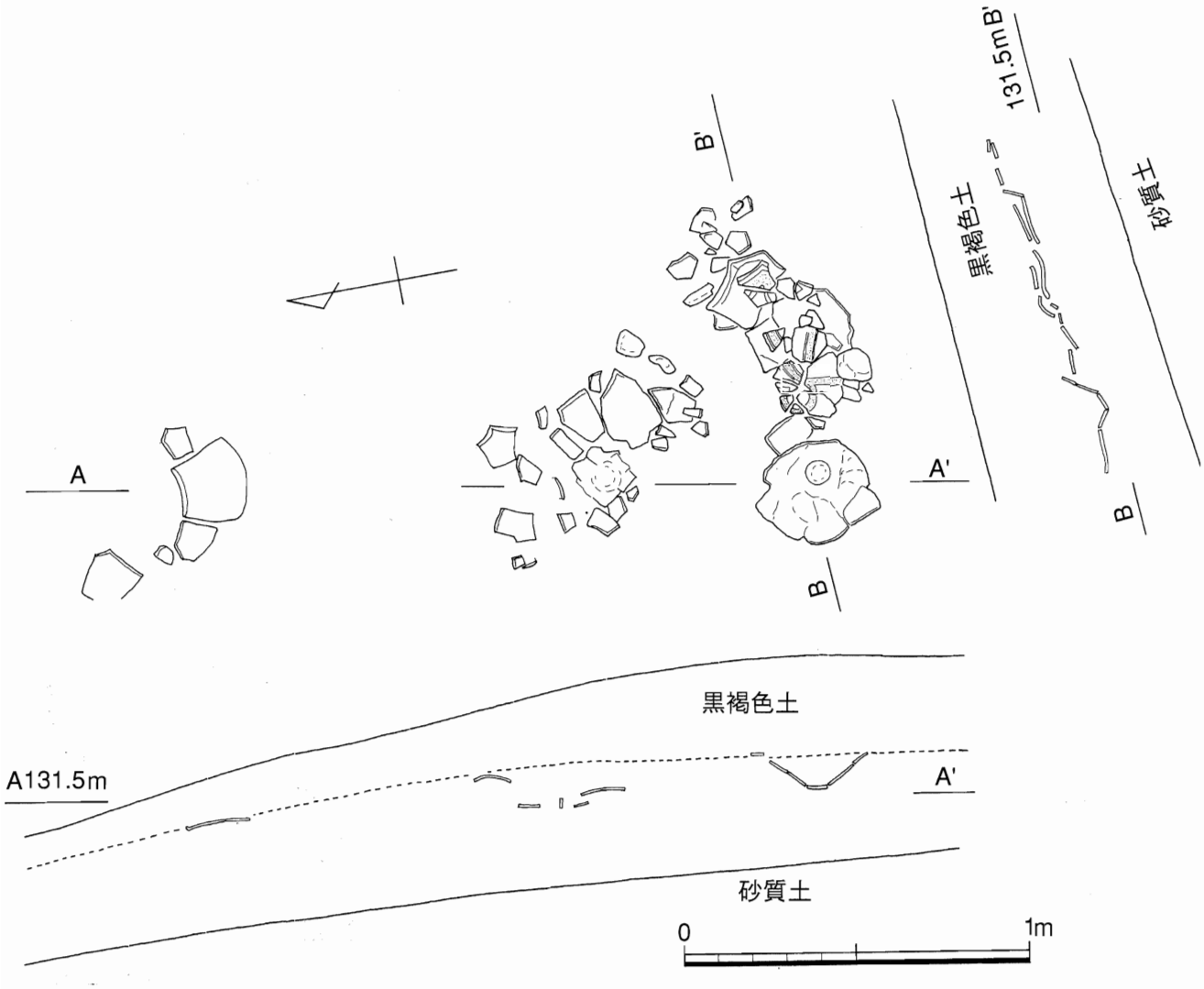
の段階で検出された。底部は上向きになっており、口縁、胴部はあまり散在せず底部周辺にまとまっていた。これは土器を廃棄したのではなく、この場所に置かれたことを示すものと思われる。これら土器片があまり撹乱を受けていないことを考えると周辺の土器も含め長期にわたってこの場所に遺存したものと考えられる。



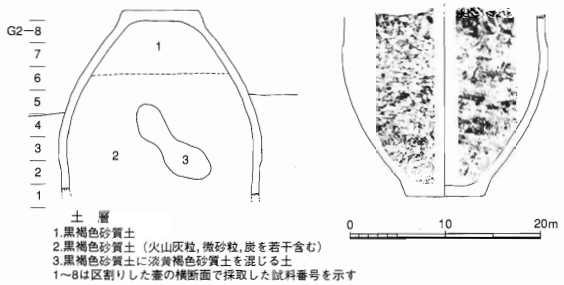
第5図　第Ⅰ調査区土器出土状況実測図（1）

3) 倒立土器と小石群（第8図）

前第2節の福田KⅡ式土器の出土位置から80cm南で、倒立した粗製の壺が出土し、その付近で5cm前後の小石の散布が認められた。層位的にみると小石、土器片の出土レベルに対し、壺の上端部はそれより深く、あきらかに掘り込んで置かれたものであると考えられる。壺の中には底部まで黒褐色の細粒砂土が堆積しており、明確な層序は識別できかねるが土器外の堆積とは異なった様相を呈していた。さらに土器内中央部には黒褐色細粒砂土に淡い黄褐色細粒砂土が混じり合った部分があった。この壺は残存口径19cm、残存高19.7cm、底径8cmを測り、頸部にゆるい段をもち、口縁部は全て欠落していた。島根県では埋甕として底部を欠いた粗製土器が報告されているが口縁を欠いた粗製土器が倒立して出土した例はないと思われる。しかし壺の付近で小石の散布が検出されており、埋葬に関連した遺構とも考えられることから、壺中の土壌を8分割して採取し、土壌分析を行った。分析報告は未葉に掲載した。



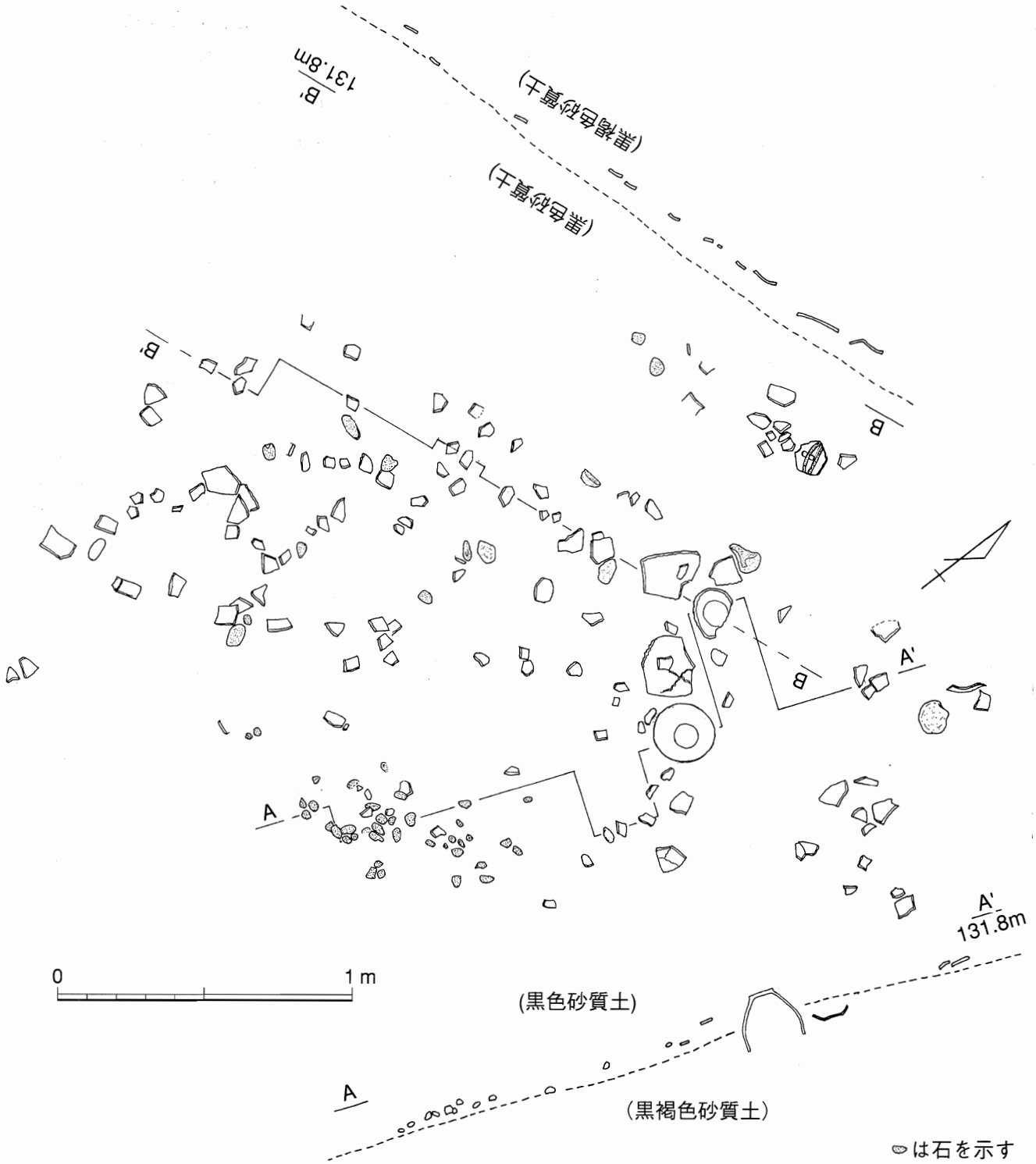
第6図　第Ⅰ調査区土器出土状況実測図（2）



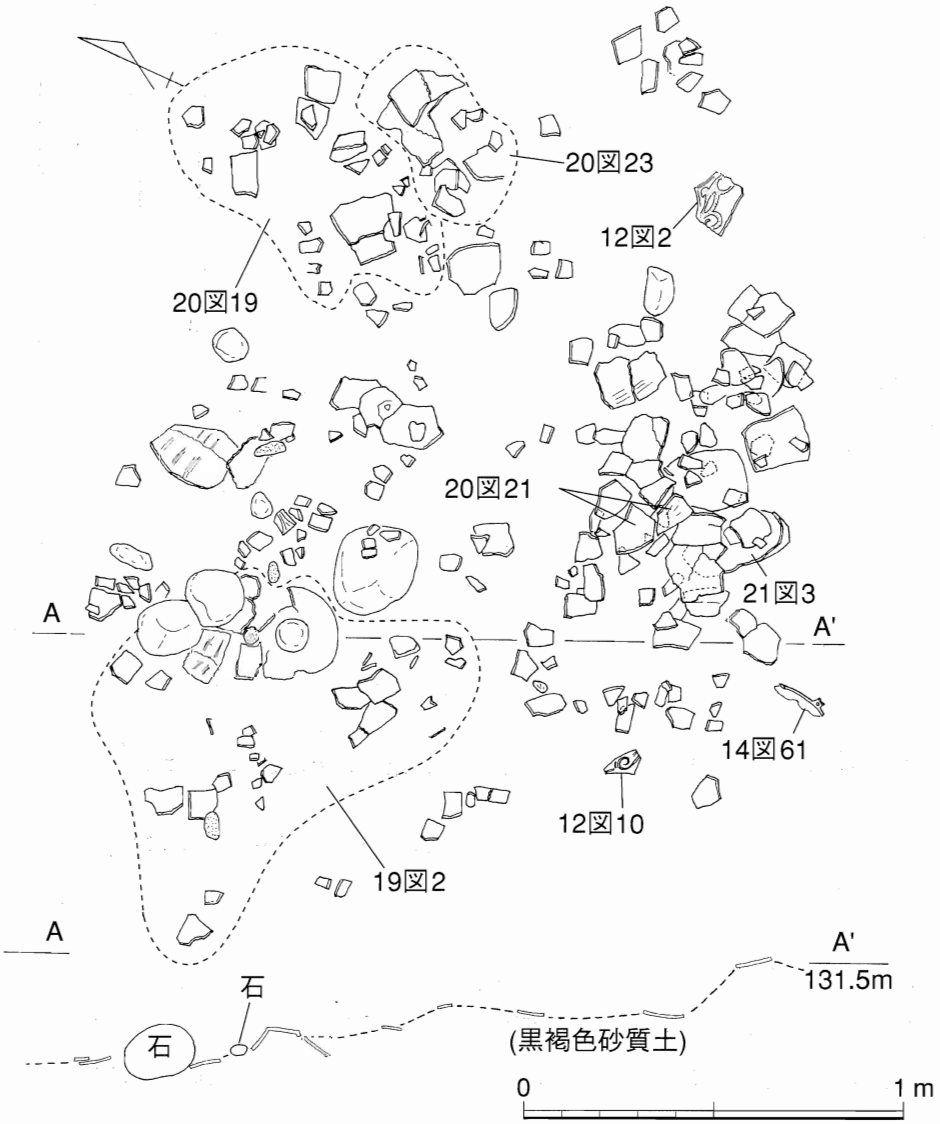
第7図　第Ⅰ調査区出土倒立土器実測図

4）大石と周辺土器出土状況（第5図）

F-2グリッドでは2個の大石と土器片多数が検出された。石は偏平な花崗閃緑岩で長さ58.4cm、幅36.6cm、重量は41.3kgを測る。もう一方は偏平ではあるが上部がやや丸味をおびた黒雲母花崗岩で長さ45.8cm、幅35.4cm、重量は35.0kgを測り、



第8図　第Ⅰ調査区土器出土状況実測図（3）



第9図　第Ⅰ調査区土器出土状況実測図（4）

並んだ状態で出土した。石の上には酸化鉄を含んだ水分の作用によると思われるが数個の土器片が固着していた。

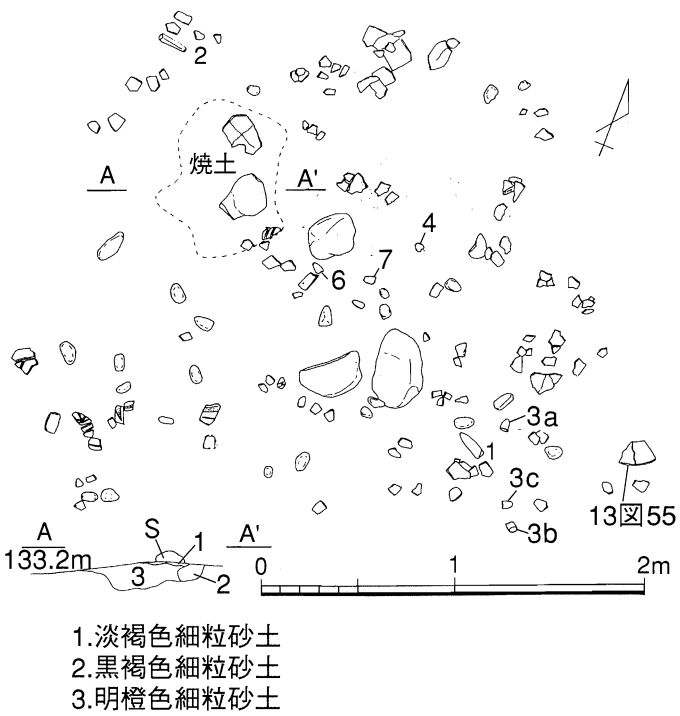
石の脇からは粗製土器の縦約30cm、横約35cmの大形深鉢のほぼ半分が内面を上にした状態で出土したのは注意される。この粗製深鉢も復元することができ、第19図1に実測図を示した。

本調査区は全体的に南から北へ向かって下降しており、Eラインから西側ではこの大石部分のレベルが最も高く他の遺物散布面は北西ないし西側に向かってゆるやかに下降していた。

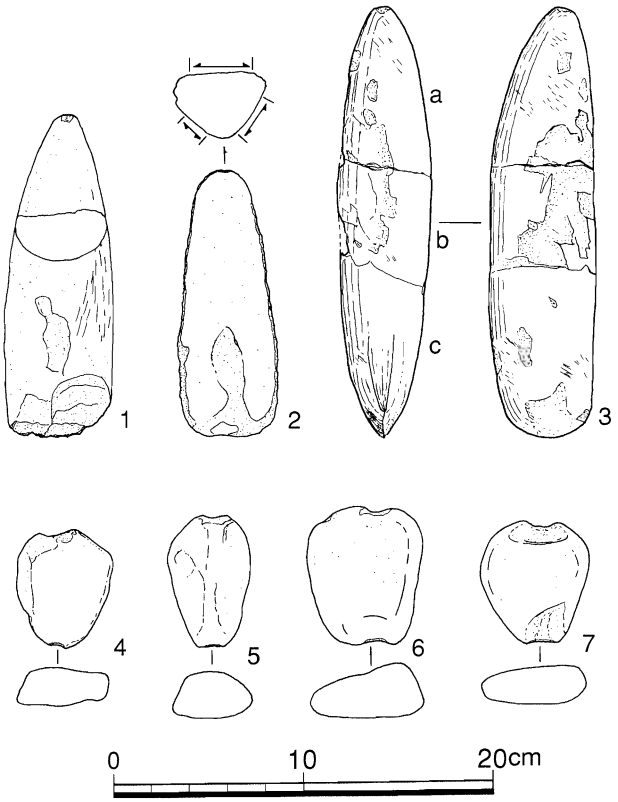
5）焼土周辺（第10図）

AからDラインにかけては当初家屋が建っていたためこれを撤去した後に調査を開始した。この調査区でも多くの縄文土器が出土し、また、調査区の南側からは焼土面を一基確認した。

焼土面は不整形で長軸80cm、短軸50cmを測る。土壌は淡褐色細粒砂土であったがこの部分は深さ約13cmにわたって明橙色を呈していた。焼土周辺から出土した遺物は土器を除くと第11図に示す石器があげられる。このうち磨製乳棒状石斧3にはススとベンガラが付着し、三つに分割して出土した。この場で破損された可能性があり、何らかの儀式に使用されたことも考えられる。なお焼土北寄の直近から東にのびた石列が16.5mにわたって確認されたが石の間にコンクリート塊が含まれており後世の構築物であることがわかった。石列の周辺に遺物の出土がみられないのは工事の際にとり除かれたことも考えられる。



第10図　第Ⅰ調査区焼土周辺実測図（1/40）



第11図　焼土周辺出土遺物実測図

第3節　遺　物

本調査区では総数約7,500に及ぶ土器片のほか、石錘、石匙、砥石等の石器が出土した。土器、石器とも分層が困難であったため遺構に伴わない遺物として一括報告することとし、石器のうち石錘については一部を記載し、他は石錘出土分布表で示し、実測図、写真は省略した。

1)縄文土器（有文土器）

本調査区から出土した土器は前述したとおり分層が困難であったため一括して取り上げた。ある範囲に集中して遺物が出土している部分もあり遺構の存在が推定されるところもある。

有文土器は土器成形特徴及び器種をもとにして以下のように分類を試みた。

第1類　福田KⅡ式並行の土器。

第1A類（第12図、第13図15～45、47～49、第14図50～53、第15図66～82、84～87、89～91、93～97、第16図111、113～121、第17図123～134、136～143）磨消縄文土器のうち2本沈線のもの。深鉢、浅鉢、双耳壺がある。深鉢は頸部がくびれ、口縁が大きく外反する器形がほとんどで、波状口縁のもの（1～3など）と平口縁のもの（4、109など）とがある。波状口縁の深鉢は確認できたものでは口縁端部を内湾させているものが多い。完形の第12図1をみると文様は頸部から口縁にかけて直線的なＪ字文、胴部上半には円形に近い渦状Ｊ字文が描かれ、頸部屈曲部で両者は連結している。これとは別に口縁部に渦状Ｊ字文が描かれ、直線的な縄文帯で連結しているものもある（2、11、14など)。両者とも、Ｊ字文

の先端が波頭部に対応するもの（1、9など）、波頭部の中間に位置するもの（2、8など）がある。

平口縁の深鉢は21や22のように縄文帯の幅が比較的広いものもあるが、総じて幅は狭いようである。また口縁端部は平坦に仕上げるものが多い。文様のモチーフは波状口縁の土器とほぼ同じだが、110、114は口縁端部の平坦面に沈線を一条入れ、端部屈曲点を中心に文様帯を構成している。110などは器形は福田貝塚出土土器とよく似た土器である。

波状口縁、平口縁ともに突起の位置に対抗孤文（16、17、100、103）を入れるものや、口縁端部に刻目を入れるものがある。

浅鉢は口縁部が大きく開く皿形のもの（50）、ボール形のもの（76、82など）、頸部が内側に屈曲するもの（61）などがある。皿形の浅鉢は内面に段がつくもの（50、55）がある。文様はほとんどが渦状丁字文を中心に直線的な縄文帯が連結している。縄文帯は全体に狭い。

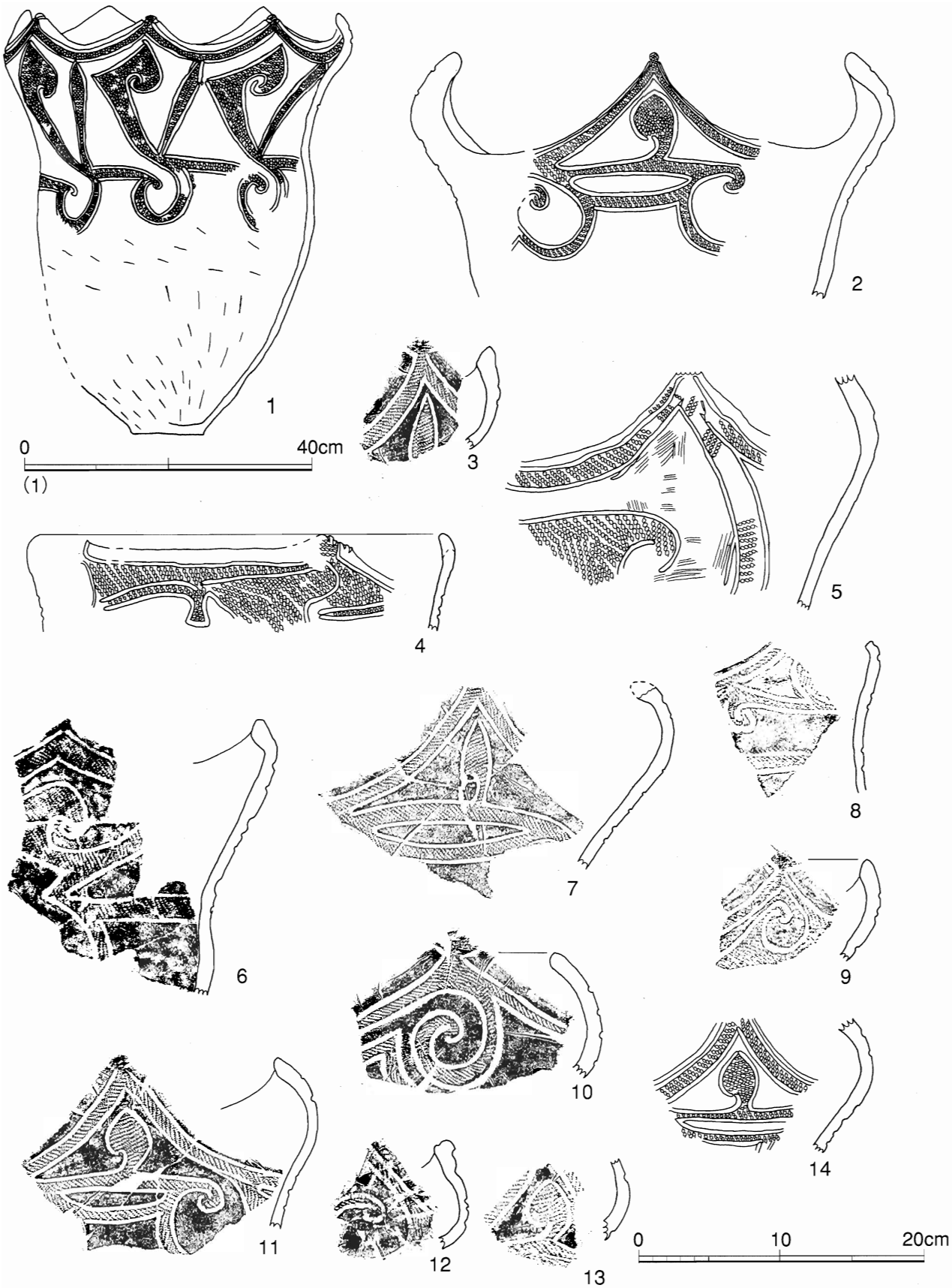
双耳壷は無頸で胴部が張る器形である（95）。突起部は渦状の浮文であるが、胴部は無文である。なお、81は突起部は出土していないが、双耳壷の可能性がある。

第1B類（第13図46、第14図55～64、第15図88、90、92　第16図122）　沈線2条で区画された縄文帯に、さらに沈線を加えたもの、いゆる3本沈線である。器種は浅鉢がほとんどで、明確に深鉢とわかるものはない。口縁端部は内湾するもの（55、63）がある。文様は1A類の浅鉢と同様であるが、64はＪ字文のモチーフがかなり崩れたものと思われる。

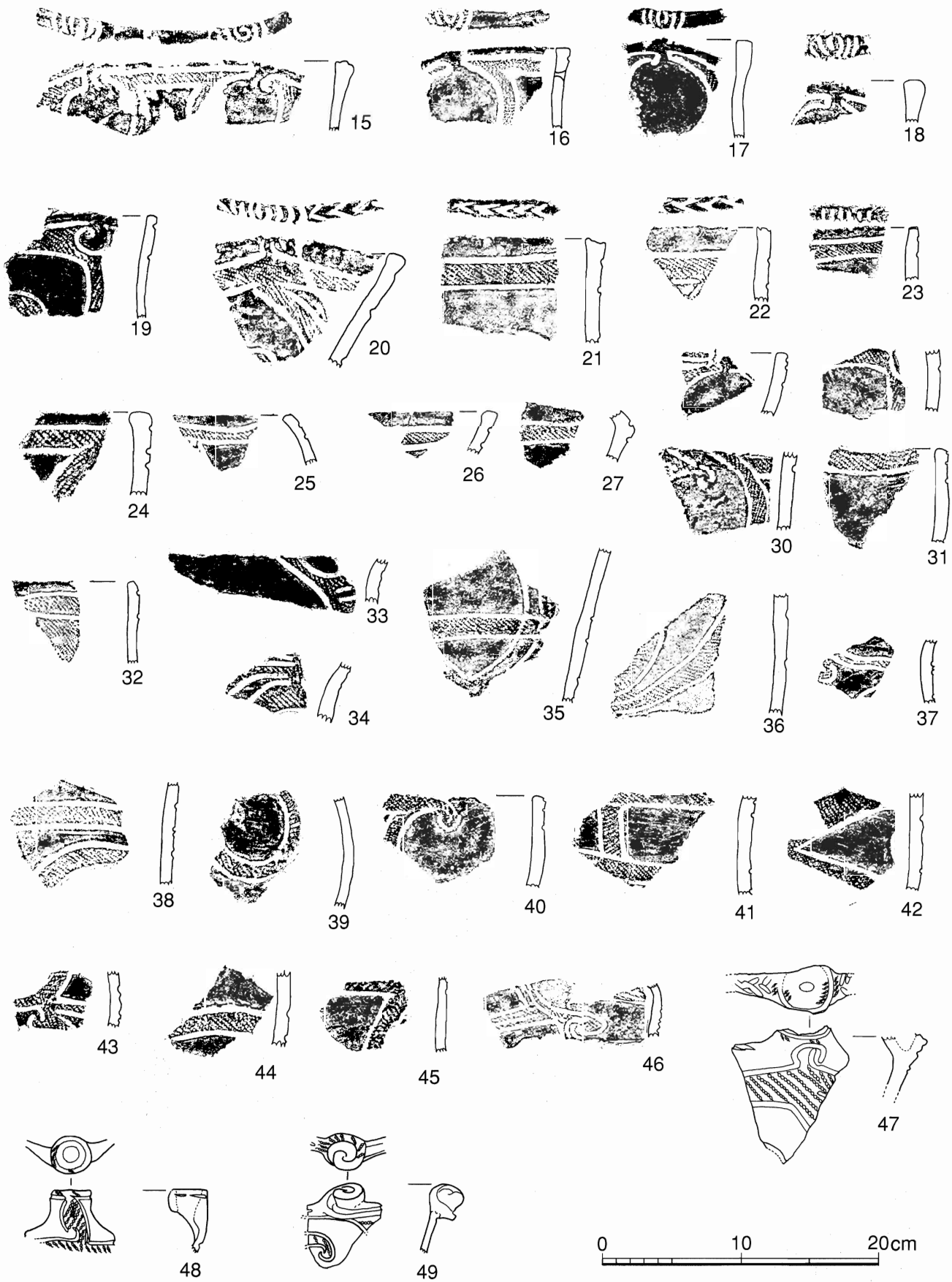
第2類（第16図、111、112、114、第17図127）　狭い縄文帯が横走して連結した文様をもつ。器形は胴部が強く張り、頸部がわずかに外反するもの（112）や無頸のもの（111）がある。口縁端部は肥厚し、沈線を1条入れる。これらの土器は北東部九州地方の鐘ヶ崎式土器に似た土器である。胎土も他の土器と違いきめ細やかな胎土であるので、搬入土器の可能性もある。

第3類（第15図83）　口縁部が玉縁状に肥厚し、頸部と肩部の境に段をもつ土器である。文様は頸部中程に沈線が1条みえるが、全体のモチーフは不明である。内外面ともていねいにミガキ調整が施されている。この土器は一見彦崎KⅠ式の鉢形土器にみえるが、口縁部、胴部に縄文が施されていないこと、全面ていねいにミガキ調整が施されることなどから、彦崎KⅠ式とは考えにくい。積極的な根拠はないが、福田KⅡ式の中で捉えたい。

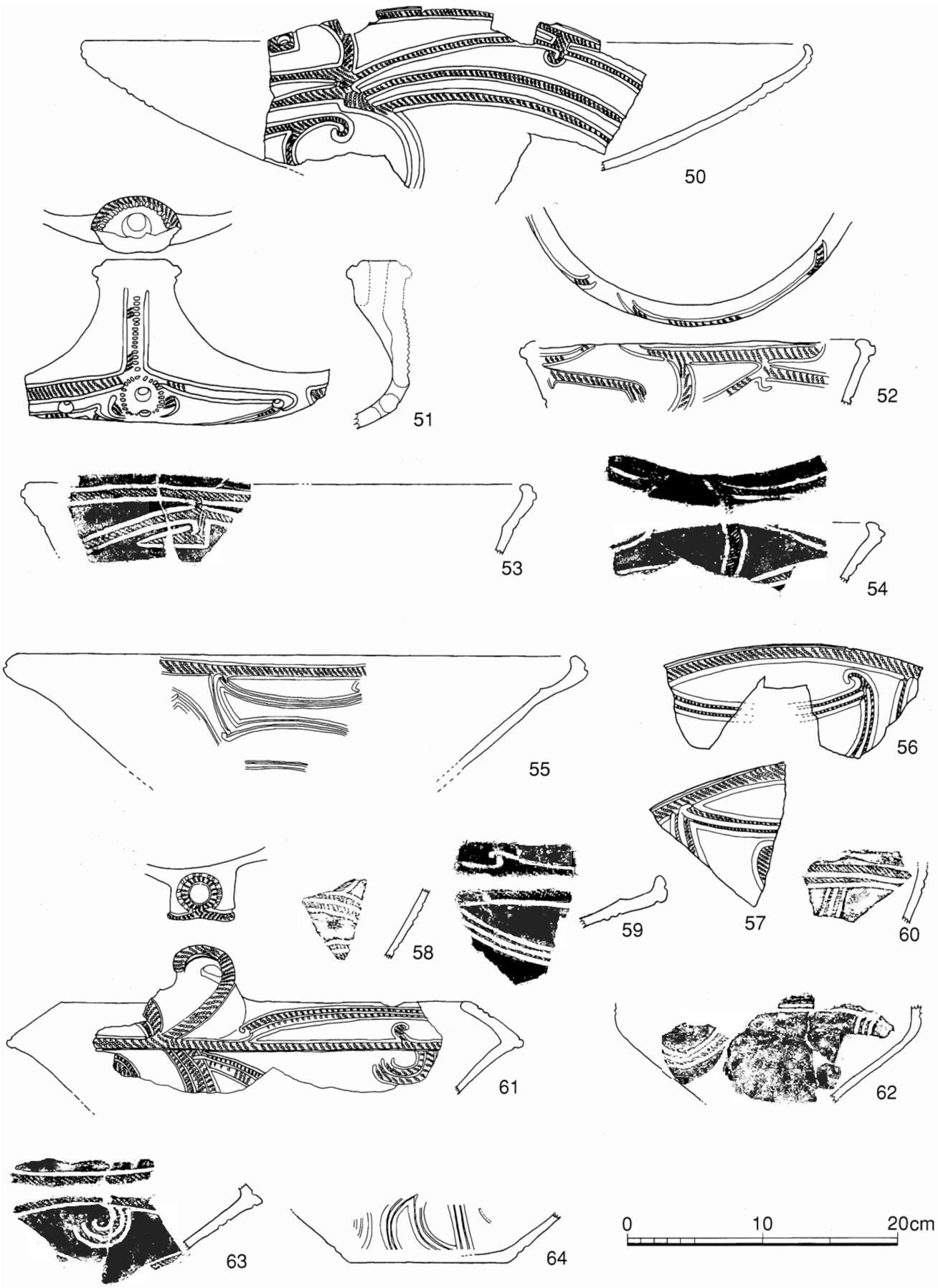
第4類（第17図132）　いわゆる縁帯文土器である。1点のみ出土した。頸部は外反し、口縁端は肥厚して広い文様帯を作る。文様は口縁部のみに施文され、波頸部に渦文が施される。津雲A式と考えられる。



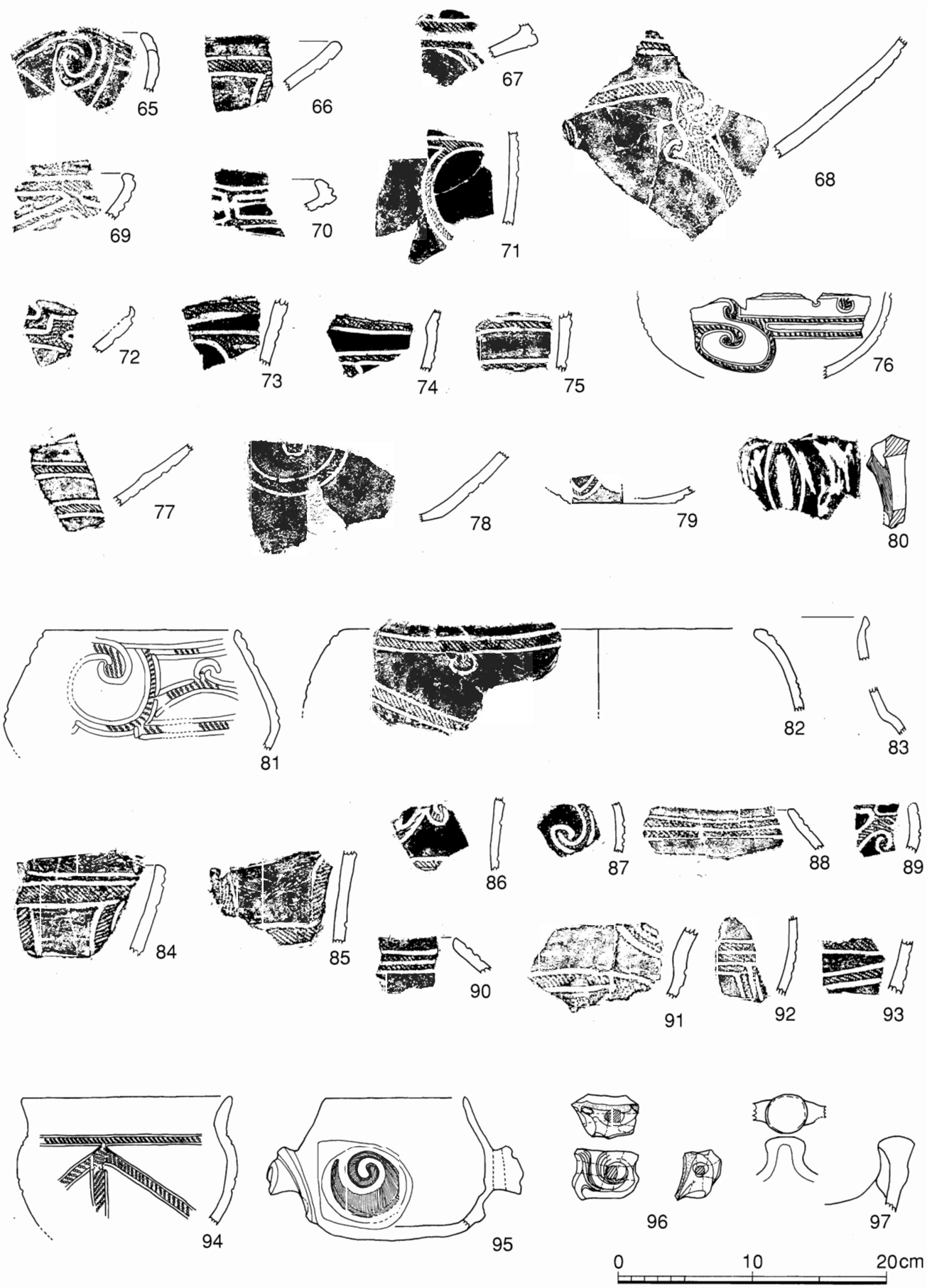
第12図　第Ⅰ調査区出土縄文土器実測図（1）　（1は1/8）



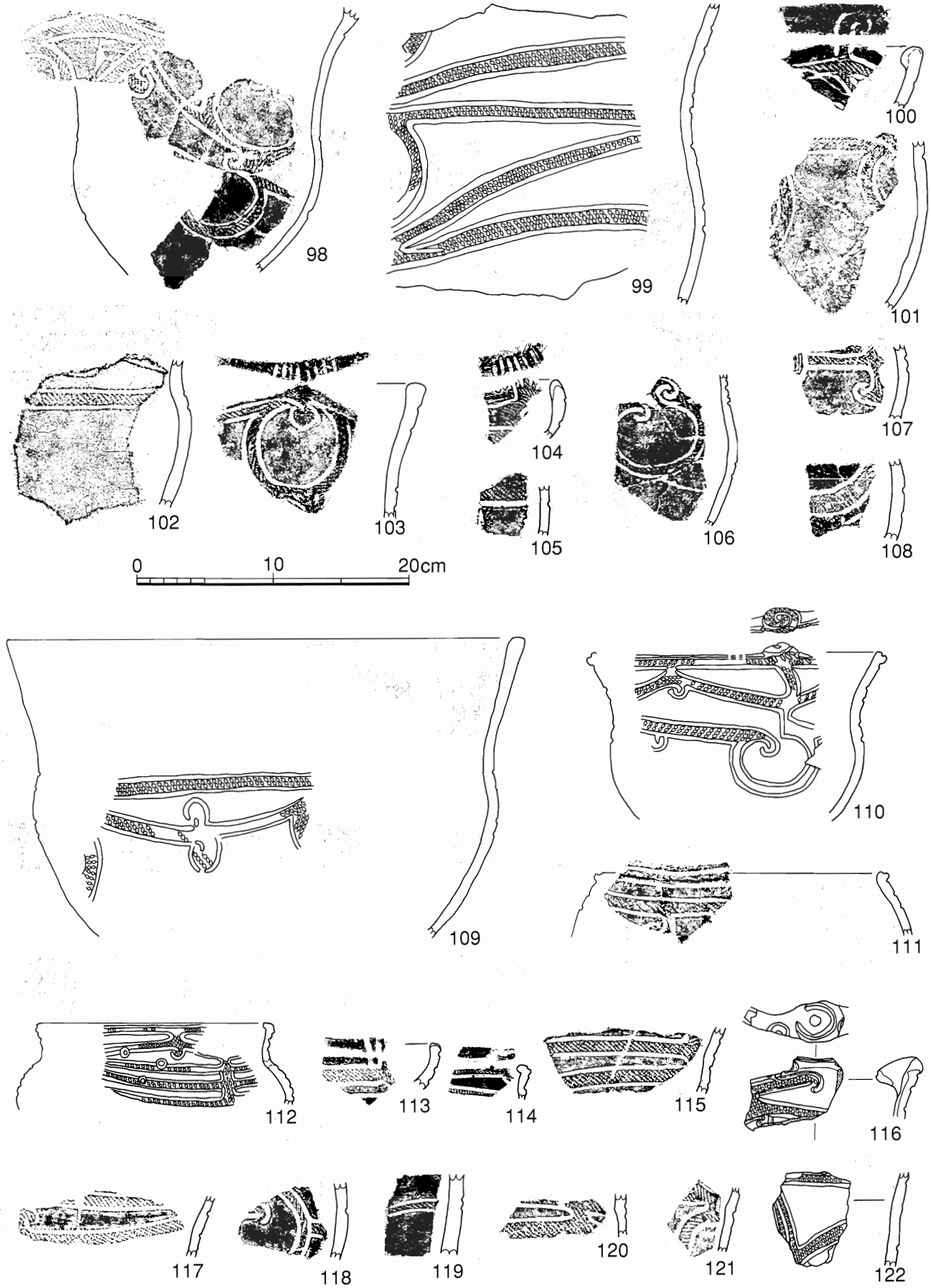
第13図　　第Ⅰ調査区出土土器実測図（2）



第14図　第Ⅰ調査区出土縄文土器実測図（3）



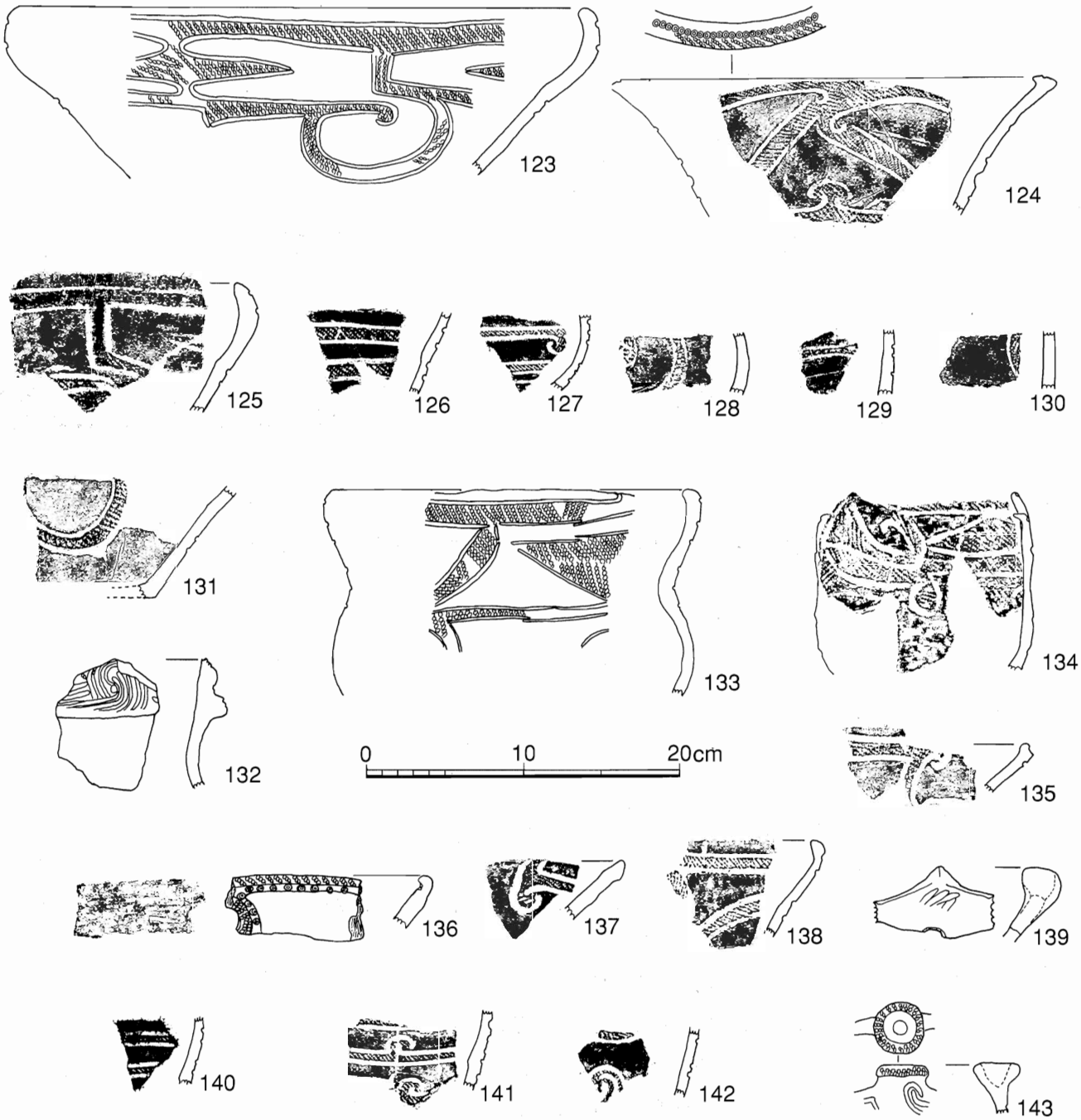
第15図　第Ⅰ調査区出土縄文土器実測図（4）



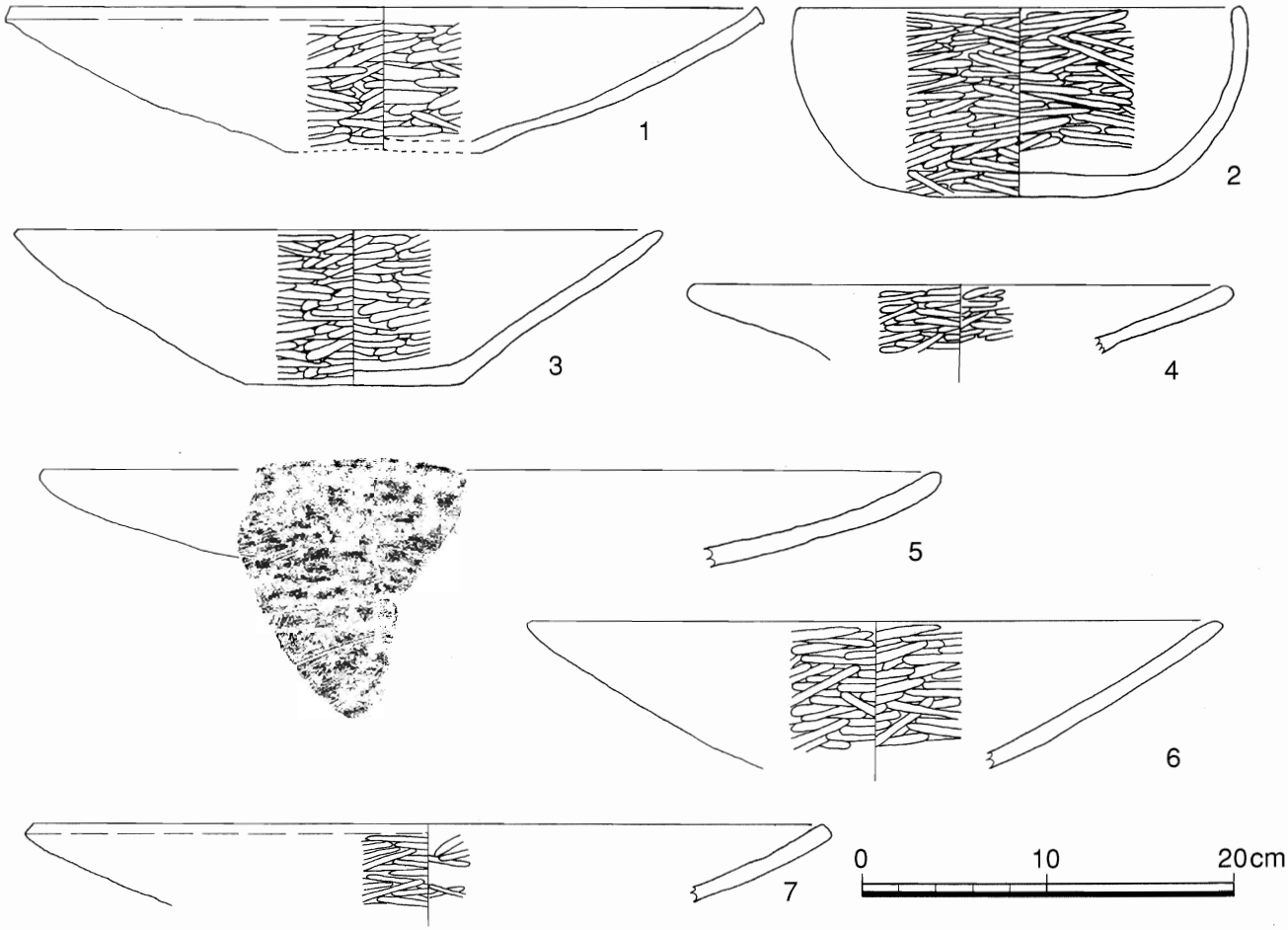
第16図　第Ⅰ調査区出土縄文土器実測図（5）

2)精製無文、精製浅鉢

本調査区から出土した無文浅鉢は有文浅鉢に対し出土数も少なかった。第18図1は黒褐色の精製浅鉢で口径30cm、底径10.3cm（推定）を測る。口縁端部は平滑に調整され、口縁下端がわずかに盛り上がるものである。3は乳白色を呈する精製浅鉢で皿形の浅鉢としては最も底が深い。2はボール形の鉢とも考えられるが形態上浅鉢とした。外面は粗いミガキによるが内面は一部に二枚貝条痕がみられる。浅鉢の口径は概ね30cmから40cmの間が多いと思われる。



第17図　第Ⅰ調査区出土縄文土器実測図(6)



第18図　第Ⅰ調査区出土土器（浅鉢類）実測図　（1/4）

3)粗製無文土器（第19～21図）

本調査区では5個体を復元し、胴部と底部が一致するものも3個体を確認することができた。

粗製土器は概ね深鉢と小型の鉢に大別できるようである。分類法としては口縁端部の形状にもとづいて以下のように分類してみた。

Ⅰ類－口縁端部を平坦にするもの（3、4、5～11）

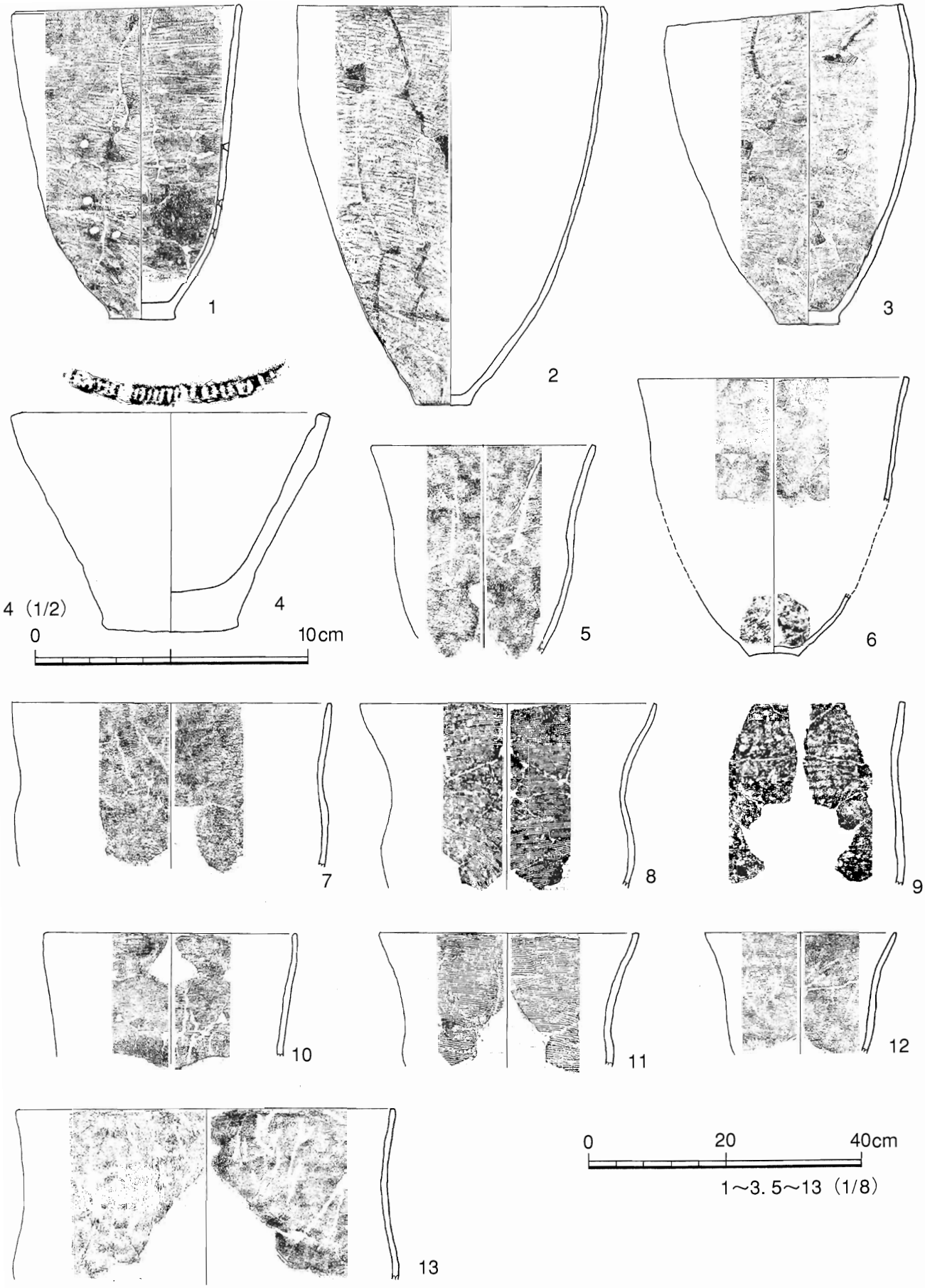
3は復元された粗製土器で内外面とも二枚貝条痕が施され、不整形の内彎深鉢である。4はコップ型の小型鉢で口縁に刻目を入れる有文土器であるが分類上このグループに入れた。

Ⅱ類－口縁上端は平坦であるが端部外側をわずかに面取りするもの（2、12～21）

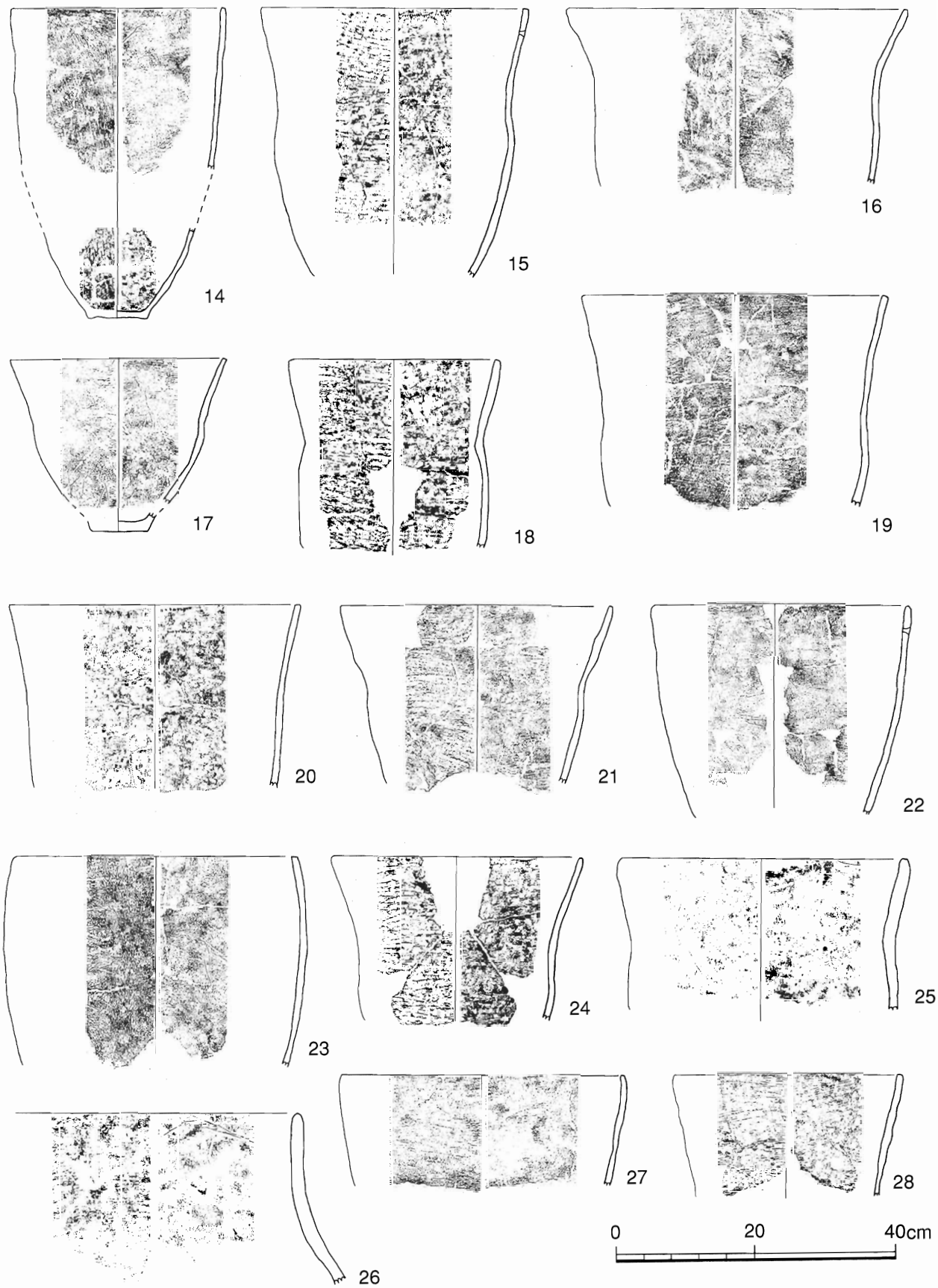
本調査区の精製土器ではこのⅡ類が最も多かった、2は遺構1)で記した粗製深鉢である。

Ⅲ類－口縁端部外面を斜めにナデるもの（22、23、27）

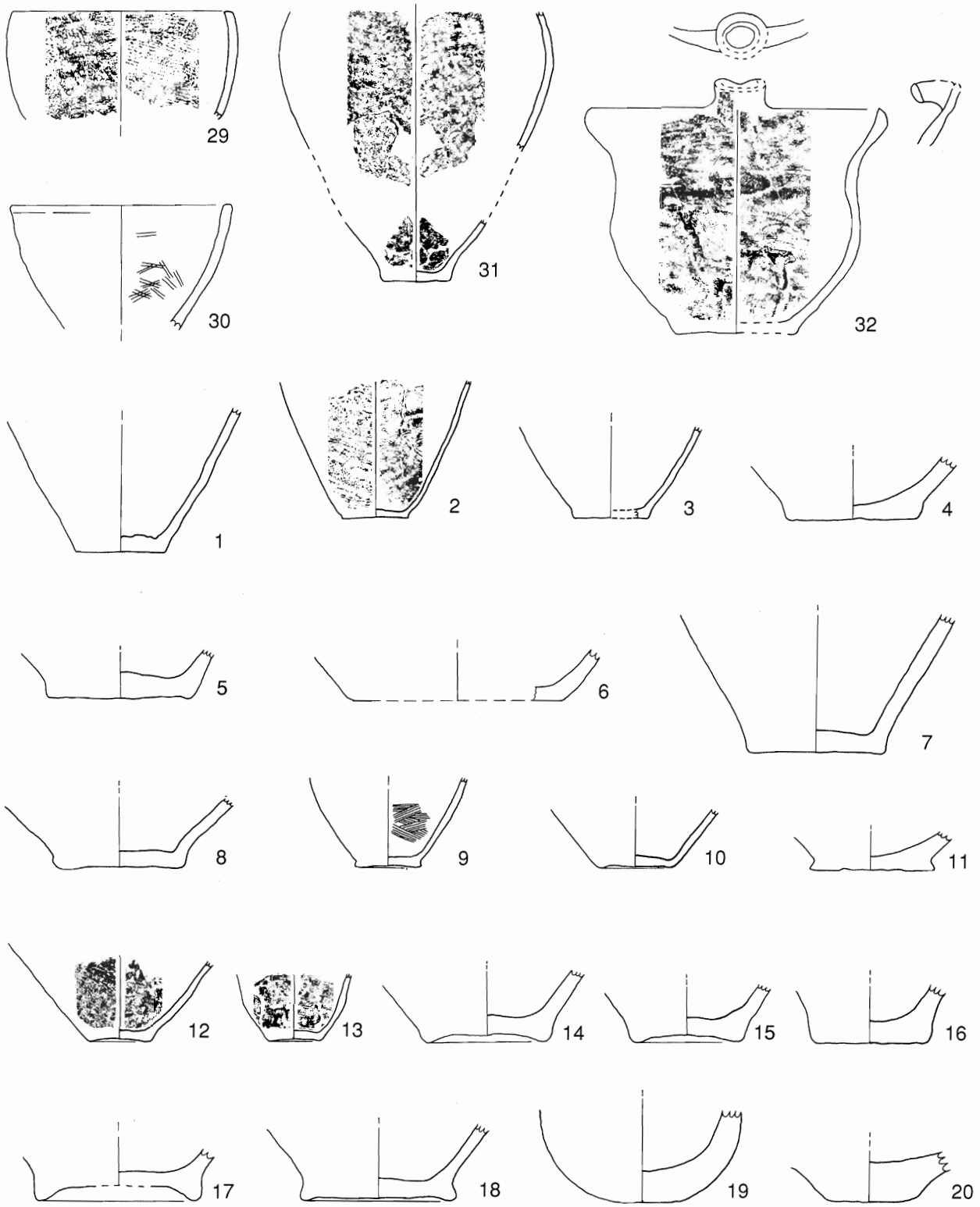
23は口縁を斜降させて上面を平坦にしたものでこの類は他にはみられなかった。



第19図　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器実測図(1)



第20図　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器実測図（2）



16.19.20(1/2)　31.32.3(1/5)

29.30.4～8.11.
14.15.17.18
0　10　20cm

1.2.3.
9.10.12.13
0　20　40cm

第21図　第Ⅰ調査区出土
粗製縄文土器実測図（3）
粗製縄文土器底部実測図

挿図番号	図版番号	出土地点 層位	器種	文様	撚り	調整 外面	調整 内面	沈線幅 (mm)	文様幅 (cm)	赤色番号	色調	光沢 外面 内面	形態の特徴
12－1	口絵1	H－1	深鉢	磨消縄文	RL	ナデ+ケズリ	ナデ	6	1.6		にぶい黄橙		波状口縁 充填縄文？
2	4	G—2	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	3	0.7	10R6/8	灰褐色	あり	文様帯に朱 波状口縁
3	〃	D—7	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.0	〃	黄褐色	〃	波状口縁 文様帯、沈線内に朱
4	〃	G—1 H—1	〃	〃	〃	〃	〃	3～4	1.2～1.6		橙色		口縁にゆるい派頂部をもつ
5	〃	H—1	〃	〃	〃	〃	ナデ	4	1.4～1.9		明黄褐色		充填縄文
6	〃	D—5	〃	〃	〃	ナデ	丁寧なナデ	3	2.2		にぶい橙色		波状口縁
7	〃	D—7	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	3	0.9	10R5/8	褐色	あり	波状口縁 文様帯に朱
8	〃	C—2	〃	〃	〃	ナデ	条痕後ナデ	4	1.3		にぶい橙色		波状口縁
9	〃	G—2	〃	〃	〃	ミガキ+ハケ目	ナデ後条痕	3	1.2～1.3		赤褐色		
10	〃	H—1	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	4	0.5～0.8	10R4/8	褐色	あり	文様帯に朱
11	〃	E—1 D—4	〃	〃	〃	〃	〃	3	0.9	10R6/8	灰褐色	〃	波状口縁 文様帯に朱
12	〃	G—2	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	1.2	10R5/8	褐色	〃	〃
13	〃	G—1	〃	〃	〃	〃	〃	3	—		灰褐色	〃	波状口縁
14	〃	E—1	〃	〃	〃	〃	〃	3～3.5	1.6	10R6/8	濃褐色	〃	波状口縁 文様帯に朱
13－15	〃	G—2	〃	〃	〃	ナデ	二枚貝条痕	3.5	1.5		橙色		口唇部、うずまき文
16	〃	H—3	〃	〃	〃	〃	条痕後ナデ	4.5	1.8		赤褐色		〃
17	〃	F—2	〃	〃	〃	〃	ケズリ	4	1.1		〃		口唇部、うずまき文 18と同一
18	〃	H—3	〃	〃	〃	〃	〃	4	1.1		〃		口唇部、うずまき文
19	〃	F—2	〃	〃	〃	〃	ナデ	3			〃		
20	〃	G—1	〃	〃	〃	〃	〃	4	2.4		灰黄褐色		口唇部、連続横V字文
21	〃	E—2	〃	〃	〃	ミガキ	〃	4	2.3		黄灰色		平口縁
22	〃	H—0	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	2.3		〃		平口縁
23	〃	E—2	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	4	0.9		にぶい橙色		口唇部刻目
24	〃	G—2	〃	〃	〃	〃	〃	4	1.3		灰白色		
25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4	0.6		にぶい赤褐色		
26		〃	〃	〃	〃	ミガキ	ナデ条痕	3.5	0.9		暗褐色		
27	4	D—2	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	3	1.1		にぶい橙色		
28	〃	F—1	〃	〃	〃	〃	〃	3			〃		
29	〃	G—1	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	3			黄灰色		
30	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	3	0.7～1.0		にぶい黄橙色		
31	〃	D—7	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	4.5	1.3		にぶい橙色		No.30,No.40と同一
32	〃	G—2	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.3		〃		No.4と同一

第1表　第Ⅰ調査区出土縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地点層位	器種	文様	撚り	調整 外面	調整 内面	沈線幅(mm)	文様幅(cm)	赤色番号	色調	光沢 外面 内面	形態の特徴
13－33	4	G—3	深鉢	磨消縄文	RL	ナデ	ナデ 条痕	4.5			橙色		No.34と同一
34	〃	H—2	〃	〃	〃	〃	ナデ	4			〃		No.33と同一
35	〃	H—1	〃	〃	〃	〃	〃	3.5			にぶい 橙色		
36	〃	C—4	〃	〃	〃	〃	〃	4			褐灰色		充填縄文
37	〃	G—2	〃	〃	〃	〃	ナデ ケズリ	3.5	2.4		にぶい 橙色		
38	〃	G—1	〃	〃	〃	〃	丁寧な ナデ	3	1.2		〃		
39	〃	D—3	〃	〃	〃	〃	ナデ	4	0.9		赤褐色		No.43と同一
40	〃	G—1	〃	〃	〃	〃	丁寧な ナデ	3.5	0.8		にぶい 褐色		No.29,No.30と同一
41	〃	H—1	〃	〃	〃	〃	ナデ	4	1.2		褐色		
42	〃	X—5	〃	〃	〃	〃	ケズリ	3～4	2.0		灰黄褐色		
43		D—3	〃	〃	〃	〃	ナデ	4	0.9		にぶい 赤褐色		
44	4		〃	〃	〃	〃	〃	4	2.0~2.2		浅黄色		
45	〃	F—2		〃	〃	〃	〃	3	1.4		にぶい 橙色		
46	〃	B—2		〃	〃	ミガキ	板目状 条痕	3	0.2~0.5		にぶい 赤褐色		
47	〃	F—1		〃	〃	〃	ミガキ	4			灰色		ミガキ後ハケ目 口縁部突起
48	〃	G—1		〃	〃	〃	〃	2.5			褐色	ありなし	口縁部突起
49	〃	G—2		〃	〃	〃	〃	2			浅黄橙色		〃
14－50	口絵8	D—6	浅鉢	〃	〃	〃	〃	3	1.1~1.2	10R4/8	褐色	ありあり	文様帯に朱
51	口絵9	D—2	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.3~1.6	7.5R4/8	黒褐色	〃	〃
52		F—1	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.3		褐色	〃	
53	5	F—3	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	1.4	10R5/8	〃	〃	文様帯に朱
54	〃	F—1	〃	〃	〃	〃	〃	3.5~4	1.6	10R4/8	〃	〃	〃
55	〃	C—7	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	1.4	〃	〃	〃	文様帯沈線内に朱 89,90と同一
56	〃	B—3 F—2	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	1.4	〃	〃	〃	文様帯沈線内に朱
57	〃	D—6	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	1.4	〃	〃	〃	文様帯に朱
58	〃	B—3	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.8		褐灰色	〃	3本沈線
59	〃	E—1	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.5		にぶい 赤褐色	〃	口唇部カギ状沈線 3本沈線、水平口縁
60	〃	H—1	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.8 1.4	10R5/8	黒褐色	〃	文様帯に朱 3本沈線
61	口絵7	〃	浅鉢	〃	〃	〃	〃	2～3	1.4	〃	褐色	〃	文様帯沈線内に朱 ら線状取手、3本沈線
62	5	B—2	〃	〃	〃	ミガキ ナデ	〃	3	1.3		明赤褐色		3本沈線
63	〃	D—2	〃	〃	〃	ミガキ	丁寧な ミガキ	3.5	1.6	7.5R4/8	にぶい 橙色	〃	文様帯に朱 3本沈線、水平口縁?
64	〃	D—6	〃	〃	〃	〃	ミガキ	3	1.2		黒褐色	〃	3本沈線

挿図番号	図版番号	出土地点 層位	器種	文様	撚り	調整 外面	調整 内面	沈線幅 (mm)	文様幅 (cm)	赤色番号	色調	光沢 外面 内面	形態の特徴
15－65	5	H—1		沈線文	RL	ミガキ	ナデ	.25			黄橙色		
66	〃	E—1	浅鉢	磨消縄文	〃	〃	ミガキ	3	1.5		にぶい黄橙色	あり あり	施文の後沈線を施す
67	〃	H—2	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.0		〃	〃	
68	〃	C—2 D—2	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.5		〃		
69	〃	D—2	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	1.3		黄橙色		
70	〃		〃	〃	〃	〃	〃	3	0.9		にぶい橙色	あり あり	
71		D—7		〃	〃	〃	〃	3	1.0		灰白色		
72		C—3	浅鉢	〃	〃	〃	〃	3~4.5	1.9	7.5R4/6	褐色	あり あり	文様帯に朱
73	5	D—4		〃	〃	〃	〃	3.5	1.9	10R5/8	〃	〃	〃
74	〃	G—1		〃	〃	〃	〃	3	1.1	10R4/8	淡褐色	〃	〃
75	〃	D—1		〃	〃	〃	〃	3	1.2	7.5R4/6	褐色	〃	〃
76	〃	F—1	浅鉢	〃	〃	〃	〃	2	0.4	10R5/8	〃	〃	文様帯沈線内に朱
77	〃	D—2	〃	〃	〃	〃	〃	3	1.1~1.3	〃	〃	〃	文様帯に朱
78	〃	G—1	〃	〃	〃	〃	〃	3	0.8		明赤褐色		
79		H—1	〃	〃	〃	〃	〃	2	0.9		黒褐色		
80	5	E—1		〃	〃	〃	〃	3			褐色	あり あり	取手
81	〃	E—1 F—2	壺	〃	〃	〃	〃	4	1.7		にぶい黄褐色	あり	沈線が浅い
82	〃	B—3		〃	〃	〃	〃	3	1.3		黒褐色	あり	
83		C—4	壺型	〃	〃	〃	丁寧なナデ				褐色	あり あり	壺
84	5	G—2		〃	〃	〃	ミガキ	3.5	2.1		灰黄褐色		沈線が深い
85	〃	H—1		〃	〃	〃	〃	2.5~3.5			黄橙色		52と同一
86	〃	D—4		〃	〃	〃	条痕後ナデ	3			にぶい橙色		
87	〃			〃	〃	ナデ	ナデ	3	1.0		〃		
88		F—1	浅鉢	〃	〃	ミガキ	ミガキ	2	1.4~1.9	10R5/8	褐色	あり あり	文様帯に朱
89	5	G—1		〃	〃	〃	〃	3	0.6	〃	にぶい橙色		〃
90	〃	H—1	浅鉢	〃	〃	〃	〃	3	1.7	〃	褐色	あり あり	〃
91		〃		〃	〃	〃	ナデ	4	1.6		〃		
92	5	G—2	浅鉢	〃	〃	〃	ミガキ	2	0.5	10R5/8	〃	あり あり	文様帯に朱
93		F—1		〃	〃	〃	〃	3	1.8	7.5R4/6	〃	〃	〃
94	5	D—7	壺	〃		〃	〃	2	0.8	10R5/8	灰白色	〃	〃
95	〃	B—3	双耳壺	〃		〃	〃						取手付
96	〃	G—2	〃	〃		〃	〃				浅黄橙色	あり	壺把手

挿図番号	図版番号	出土地点 層位	器種	文様	撚り	調整 外面	調整 内面	沈線幅(mm)	文様幅(cm)	赤色番号	色調	光沢 外面 内面	形態の特徴
97	5	G—1		磨消縄文		ミガキ	ミガキ				黄橙色		
16—98	6	D—1,D—2 D—3	深鉢	〃	RL	〃	〃	3	1.2		明赤褐色	ありなし	
99	〃	G—2	〃	〃	〃	〃	〃	3～4	1.8		浅黄橙色		
100		D—2		〃	〃	〃	〃	3～4	1.3~1.5		褐灰色	ありなし	
101	6	C—7		〃	〃	〃	二枚貝条痕	2.5～3	1.4~1.5		橙色		胴部
102	〃	G—1		〃	〃	二枚貝条痕ナデ	ナデ	2.5	1.5		〃		
103	〃	G—2	深鉢	〃	〃	ナデ	ミガキ	3	1.4		にぶい橙色		ゆるい波状口唇部にうずまき文
104	〃	〃		〃	〃	ナデ	二枚貝条痕	4			にぶい赤褐色		口唇部太い刻目
105	〃	〃		〃	〃	〃	ナデ	4			褐色		
106	〃	D—2		〃	〃	ミガキ	二枚貝条痕ナデ	3	0.9		にぶい橙色		98と同一
107	〃	G—2		〃	〃	ナデ	二枚貝条痕	3	1.2		にぶい褐色		
108	〃	C—3		〃	〃	〃	ナデ	3.5	2.0		にぶい橙色		
109	〃	G—2	鉢	〃	〃	ミガキ	丁寧なナデ	3	1.2~1.5		浅い黄橙色		水平口縁
110	〃	C—2	〃	〃	〃	〃	ミガキ	4	1.7		にぶい黄橙色	ありあり	口唇部うずまき状突起
111	〃	G—2		〃	〃	〃	〃	2	1.9		褐色	〃	文様帯に朱
112	〃	G—0		〃	〃	〃	〃	3	0.9		明黄褐色	〃	水平口縁
113	〃	D—4		〃	〃	ナデ	〃	3	1.0		にぶい橙色		
114	〃	G—0		〃	〃	ミガキ	〃	3	0.3		〃	なし	112と同一 水平口縁
115	〃	B—3		〃	〃	〃	〃	3	1.5	10R5/8	橙色		文様帯に朱 116と119と同一
116	〃	トレンチ1	鉢	〃		〃	〃	3	1.2		〃		
117	〃	B—3		〃		〃	〃	3	1.5	10R5/8	明赤褐色	ありあり	文様帯に朱
118	〃	G—2		〃		ナデ	カキ目状ナデ	3.5	1.1		にぶい橙色		
119	〃	C—4		〃	RL	ミガキ	ミガキ	2	0.7~0.9		橙色		磨消部に縄文残存肉厚
120	〃	B—3		〃		〃	〃	3	1.3	10R5/8	にぶい褐色		116と115と同一 文様帯に朱
121	〃	D—7		〃	RL	〃	〃	3	1.9	10R4/8	黄褐色	ありあり	文様帯に朱
122	〃	E—1		〃	〃	〃	〃	3	1~4.5		灰褐色	ありなし	沈線2本と3本
17—123	〃	G—0	浅鉢	〃	〃	〃	〃	3	1.5~1.9		黄橙色		水平口縁
124	〃	C—3		〃	〃	〃	〃	3	0.8~1.5		にぶい黄橙色	ありあり	口唇部沈線中に刺突文? 水平口縁
125	〃	G—0		〃	〃	ナデ	ナデ	3	1.4		浅い黄橙色		水平口縁
126	〃	B—3		〃		ミガキ	ミガキ	3	0.8		にぶい橙色		
127	〃	B—3	浅鉢	〃		〃	〃	3	1.3		〃		115と同一
128	〃	C—3		〃		〃	ナデ	2	0.8		〃		

挿図番号	図版番号	出土地点層位	器種	文様	撚り	調整 外面	調整 内面	沈線幅(mm)	文様幅(cm)	赤色番号	色調	光沢 外面 内面	形態の特徴
17－129	6	D—2		沈線文		ナデ	ナデ				明赤褐色		
130		F—2		磨消縄文		ミガキ	ミガキ	2.5	1.1		にぶい橙色	あり あり	
131	6	G—2		〃	RL	〃	〃	2～3	1.0～		褐色	〃	
132	〃	H—2	鉢	〃	〃	ナデ	ナデ	3	1.6		にぶい充褐色		外面全体にスス付着
133				〃		〃	〃	2			灰白色		緑帯文
134		H—2		〃	RL	ミガキ	ミガキ	2			暗灰黄色		外面スス付着
135	6	G—1	浅鉢	〃	〃	〃	〃	4.5			灰褐色		口縁内面に刺突文
136		B—2		〃	〃	〃	〃	3		10R4/8	褐色	あり あり	縁帯文 文様帯に朱
137	6	B—2		〃	〃	〃	〃	4			黄灰色		
138	〃	C—6	浅鉢	無文精製	〃	〃	〃	3	0.7		黄橙色	あり あり	
139	〃	B—4		磨消縄文	〃	〃	〃	3	1.4	10R4/8	にぶい黄橙色	〃	文様帯に朱
140	〃	B—3		〃	〃	〃	〃	2.5	0.9	〃	〃	〃	〃
141	〃	〃		〃	〃	〃	〃	3	1.0	10R5/8	〃		文様帯に朱 内面に段を設ける
142	〃	C—2		〃		〃	〃	3			にぶい橙色		3本沈線
143	〃	C—3		〃	RL	〃	〃				暗赤褐色		突起

Ⅳ類－口縁を丸くおさめるもの（1、24～26、28～30）

深鉢体部の形状では胴部から直線的に立ち上るもの、やや内反して頸部をつくりわずかに外反するもの、内彎するものとに分けられるようである。32は把手付きの鉢と思われる。注口としても使用されたかもしれない。なお深鉢の口径は岡山県福田貝塚遺跡出土の粗製深鉢の資料では13例中のほとんどが20.0cm～30.0cmであるが本調査区では39.0cm～44.0cmのものが10個体、45.0cm以上の深鉢も4個体確認された。

2) 石　器

① 石　錘

本調査区では151個の石錘が出土した。河原石を利用した打欠き石錘で、出土が集中する場所は土器出土地区と一致するようである。図化はその一部とし、重量による石錘分布表を末葉に付して一覧表、写真は省略することにした。石錘について概観するとC-6.7グリッド出土石錘の平均重量は80～100gであるがG-2、H-1、2グリッドの平均重量は100～190gと大型化しており出土場所によって石錘重量が異なっていることが窺われる。その他のグリッドでは重量、形状ともにバラエティーがあるが50～90gと100～120gとに二分できると思われる。200gを超えるものは少なく近隣の下鴨倉遺跡からの石錘出土状況とは異なった様想を呈している。

② その他の石器

1、2は抉入り無茎石鏃である。3は削器である、剥片を利用したものと思われる。4から8は横長の石匙で石材は4が安山岩である。他は一見すると安山岩のようであるが、三

挿図番号	図版番号	出土地区	口縁形状	器種	調　整	内面調整	口径(cm)(推計)	残存高(cm)	器厚(mm)	備　考
19－1	口絵1-4	E-1	Ⅳ	深鉢	カキ目状条痕(ケズリ)	ケズリ＋ナデ	32.6	46.4	9	
2	口絵1-2	H-1	Ⅱ	〃	カキ目状条痕	〃	43.4	61.8	7	内面丁寧なケズリ
3		F-1 F-2	Ⅰ	〃	二枚貝条痕	二枚貝条痕	32.4	47.6	11	器形は変形する 外面にスス付着
4	口絵5	G-2	Ⅰ(刻目)	小鉢	ナデ	ナデ	11.0	8.0	5	粗製有文 外面にスス付着
5	8	C-2	Ⅰ	深鉢	〃	〃	32.8	30.6	10	
6	〃	B-3	〃	〃	〃	〃	40.4	(40.4)	7	外面丁寧なナデ 一部スス付着
7	〃	D-6	〃	〃	ハケ目状ナデ	〃	46.8	24.0	10	外部全体にスス付着 内面丁寧なナデ
8	〃	G-1	〃	〃	二枚貝条痕	二枚貝条痕	44.0	27.2	8	口唇部にも二枚貝条痕
9	〃	G-1	〃	〃	粗いミガキ	ナデ		27.2	10	外面スス付着
10	〃	B-4	〃	〃	ケズリ＋ナデ	丁寧なナデ	37.0	18.0	8	口縁外面にハケ目状のナデ痕
11	〃	I-5	〃	〃	二枚貝条痕	二枚貝条痕	37.8	19.8	9	外面スス付着
12	〃	G-1	Ⅱ	〃	〃	〃	28.0	18.0	8	〃
13	〃	D-2	〃	〃	〃	〃	54.6	24.8	8	外面縦方向に条痕
20－14	〃	F-1	〃	〃	条痕	条痕＋ナデ	31.6	(45.6)	7	縦(斜目)方向に条痕 外面にスス付着
15	〃	H-3	〃	〃	カキ目状条痕	二枚貝条痕 ＋ナデ	40.0	38.5	8	
16	〃	A'-5	〃	〃	ヘラケズリ 一部ミガキ	ナデ 一部ミガキ	50.0	25.7	8	口縁外面にハケ目状のナデ
17	〃	G-2	〃	鉢	二枚貝条痕	二枚貝条痕	32.0	(25.5)	8	外面スス付着
18	〃	A'-5	Ⅱ	深鉢	カキ目状条痕	ナデ	31.5	27.4	10	
19	〃	G-1	〃	〃	ケズリ	〃	45.4	31.3	9	内面にコゲ目付着
20	〃	H-2	〃	〃	〃	〃	43.0	27.0	9	内面に少量のコゲ目付着
21	〃	G-1	〃	〃	カキ目状条痕	〃	39.4	26.3	10	内面にコゲ目付着
22	〃	D-1	Ⅲ	〃	二枚貝条痕	二枚貝条痕	39.6	31.2	9	外面二枚貝条痕を交叉させる 内面コゲ目付着
23	〃	G-1	〃	〃	ケズリ	ケズリ＋ナデ	40.8	30.8	9	内彎深鉢
24	〃		Ⅳ		カキ目状条痕	ケズリ	37.4	24.5	9	
25	〃	H-1	〃	深鉢	ナデ	ナデ	21.0	11.0	7	丁寧なナデ 内面にスス付着
26	〃	H-2	〃	〃	〃	〃	39.0	12.5	9	口唇部を丸く面取り
27	〃	F-2	Ⅲ		ケズリ	二枚貝条痕 のちナデ	41.4	16.2	9	
28	〃	G-1	Ⅳ	深鉢	二枚貝条痕	二枚貝条痕 ＋ナデ	33.4	17.8	11	外面スス付着
21－29	〃	E-2	〃	小鉢	ナデ	二枚貝条痕	14.8	7.3	6	
30	〃	D-2	〃	〃	丁寧なナデ	粗いナデ	15.0	8.3	6	
31	〃	C-2		壷	粗いミガキ	粗いミガキ		19.0	8	ミガキ原体幅2m/m
32	〃	G-1		取手付鉢	ナデ	ナデ	23.5	21.5	8	内、外面にスス付着

第2表　第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器観察表

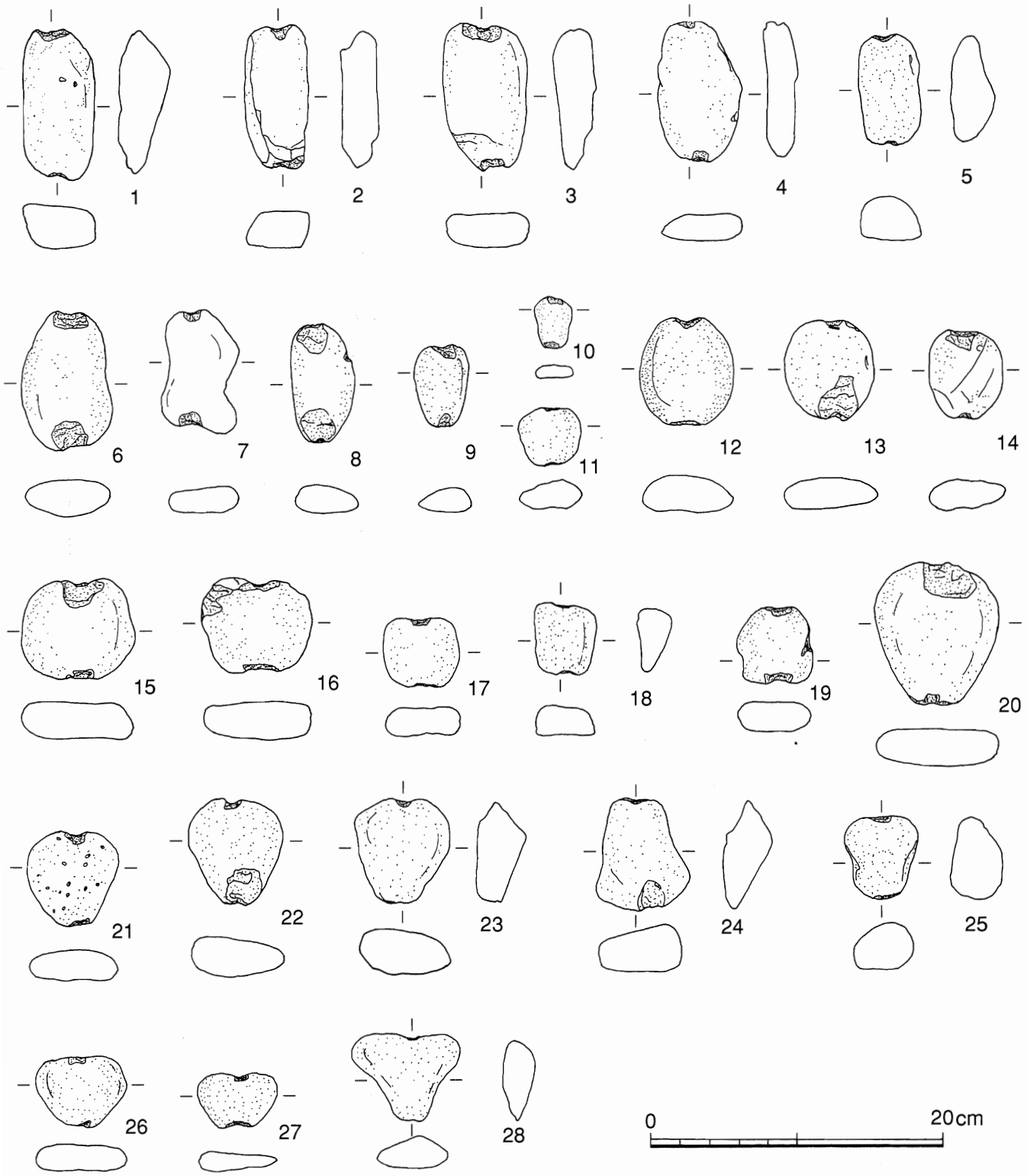
挿図番号	図版番号	出土地区	器　種	調　整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
				外　面	内　面				
18 1	7	H－2	浅鉢	ミガキ	ミガキ	38.8	10.2	7.8	黒褐色・光沢あり
2	口絵6	H－1.H－2		条　痕 (粗いミガキ)	二枚貝条痕＋ナデ	24.0	12.0	10.0	粗製
3	口絵3	H－1.H－2		ミガキ	ミガキ	34.2	11.4	8.2	乳白色・光沢あり
4	7	H－1.G－2		ミガキ	ミガキ	29.0			黄橙色・光沢なし
5	〃	H－1		ミガキ	ミガキ＋条痕	48.0			橙色・光沢なし
6	〃	H－1		ミガキ	ミガキ	37.0			黄橙色・光沢あり
7	〃	C－7		ミガキ	ミガキ	43.0			褐色・光沢なし

第3表　第Ⅰ調査区精製・粗製浅鉢観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器　種	底部形状		底径(cm)	器厚(cm)	備　考
				外　面	内　面			
1	9	G-2	深鉢	平　底	平	11.7	12.0	底部内面指頭による圧痕 胎土粗い
2	〃	H-2		〃	ゆるい凸	9.0	6.0	底部外面内部ナデ
3	〃	G-1	深鉢	〃		(10.5)	10.0	
4	〃	G-2	〃	〃	凹	9.0	11.0	
5	〃	F-2	〃	〃	凸	10.0	7.0	
6	〃	G-1	〃	〃	平	14.4	7.0	
7	〃	F-1		〃	ゆるい凸	9.5	9.5	半精製
31-底		C-2	深鉢	〃	平	10.0	8.0	底部外周を残して内部をわずかにナデる
17-底		G-2	鉢	〃	〃	8.5	9.0	
8	9	D-7	深鉢	浅い上底	〃	8.5	7.0	風化
9	〃	G-1	〃	〃	〃	9.1	8.0	端部をやや張り出す
10	〃	F-1	〃	〃	凸	10.5	8.0	外面内部ナデ
11	〃	C-3		〃	凹	8.2	9.0	外面中央ナデ 端部が張り出す
14-底		F-1	深鉢	〃	平	9.0	8.0	底部外周を残して内部をわずかに窪める
12	9	G-1	深鉢	凹底	〃	8.0	7～11	
13		G-0		浅い凹底	ゆるい凸	7.5	8.0	内面に櫛目状の圧痕
14	9	C-2	深鉢	凹底	〃	8.6	10.0	外面二枚貝条痕
15	〃	G-1	〃	〃	平	7.5	8.0	
6-底		B-3	鉢	浅い凹底	〃	8.6	6.0	丁寧な仕上げ
16	9	D-2	小鉢	〃	〃	7.5	6.0	
17	〃	B-4	深鉢	〃	凹	7.5	9.0	
18	〃	G-1	〃	平底	平	4.0	8.0	端部を指頭で押圧し、わずかに高台をつくる
19	〃	G-2		高台底	〃	11.0	5～7	手づくね土器
20	〃	F-1	皿？	〃	〃	10.5	7	

第4表　第Ⅰ調査区出土粗製土器底部観察表

浦清氏のご教示によりホルンフェルス化した結晶片岩と考えられた。9は円礫あるいは磨製石斧を転用したと思われる石箆型の削器である。10、11は磨製石斧で、10の石材は石英安山岩である。12～14は玄武岩の磨石で、3個体ともベンガラが付着しており全てG-2グリッドから出土した。15は小型の砥石である。16は削痕が認められる砥石であるが、細い線刻が直線的に砥石を一周する。17は調査開始当初、調査区西側撹乱土中より出土



第22図　第Ⅰ調査区出土石錘実測図

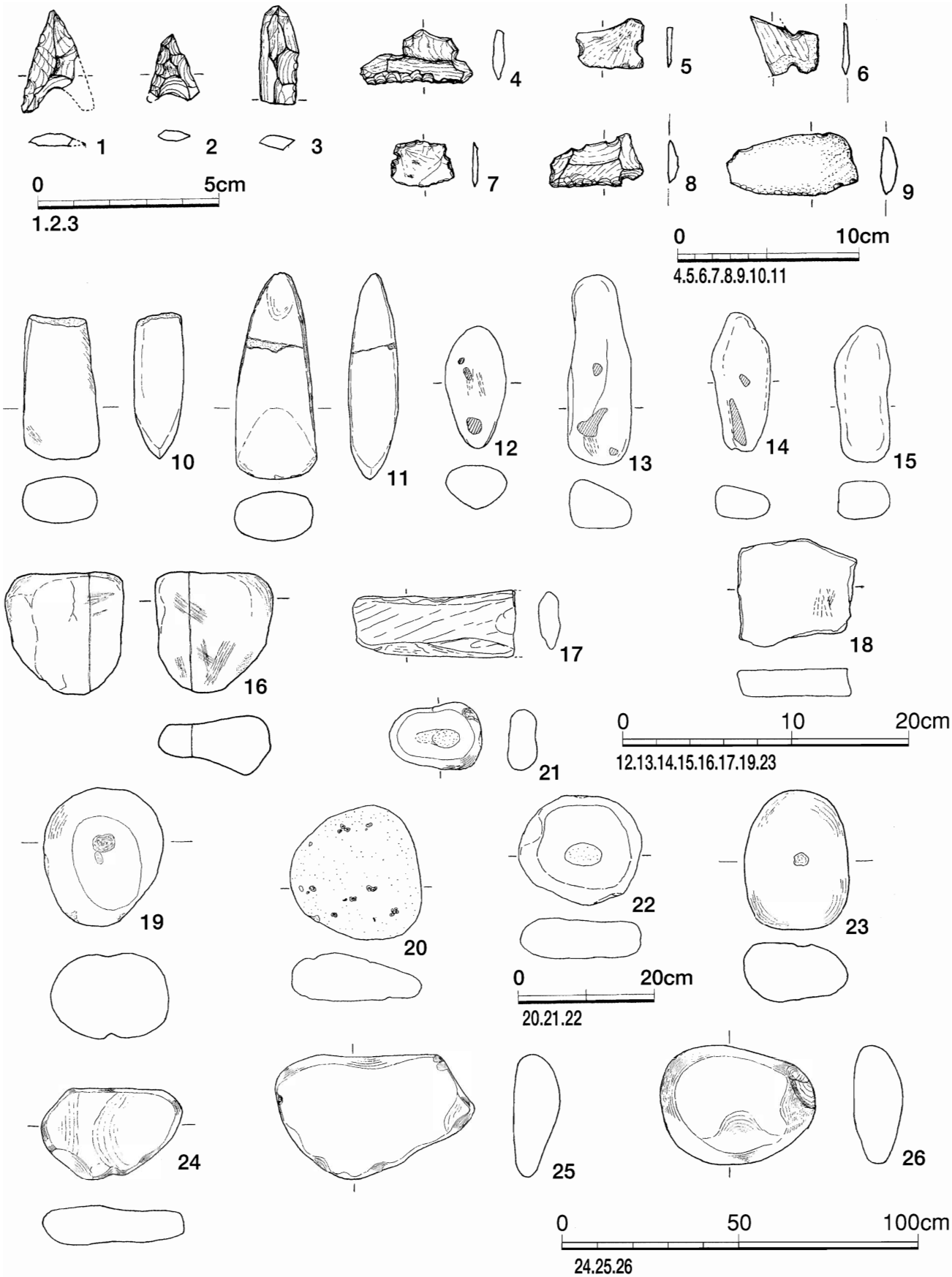
指図番号	図版番号	グリット	取り上げ No.	縦 (cm)	横 (cm)	形状	重量 (g)	材質	備考
22—1	10	F—2	No.7	10.0	5.2	長方形	250	石英閃緑岩	
2		H—0	No.11	9.6	4.3	〃	160	凝灰岩	
3		C—4	No.15	9.0	5.5	〃	240	石英閃緑岩	楕円形
4		C—2	No.16	9.3	5.3	〃	150	〃	
5		A'—5	No.27	7.0	3.8	〃	130	〃	
6		E—2	No.2	9.5	6.0	〃	205	玄武岩	
7		H—3	No.43	8.1	4.9	〃	110	凝灰岩 砂岩	
8		F—2	No.2	8.1	4.2	〃	80	玄武岩	
9			No.16	5.7	3.6	〃	40	〃	楕円形
10		D—2	No.41	3.5	2.5	〃	10	石英閃緑岩	極小の石錘
11			No.2	4.0	4.0	正方形	35	〃	
12		H—2	No.8	7.5	6.1	〃	160	玄武岩	隅丸
13		〃	No.17	7.0	6.2	〃	110	〃	〃
14		F—3	No.8	6.0	5.0	その他	80	石英閃緑岩	〃
15		D—2	No.54	6.0	7.2	正方形	210	花崗岩	
16		〃	No.3	6.1	7.2	〃	170	流紋岩	やや横長
17		I—3	No.7	4.7	5.0	〃	75	石英閃緑岩	
18		G—2	No.23	4.7	4.2	〃	60	〃	
19		F—2	No.18	5.0	5.0	〃	85	砂岩	3カ所に打欠きあり
20		G—1	No.13	9.6	8.1	台形	260	玄武岩	楕円形
21		G—0	No.6	6.5	6.1	〃	95	花崗岩	
22		D—6	No.3	7.0	6.6	〃	165	玄武岩	
23		E—1		6.7	6.0	〃	160	流紋岩	
24			No.10	7.6	6.2	〃	180	砂岩	
25		C—2	No.16	5.2	4.9	〃	100	石英閃緑岩	
26		E—1	No.2	4.9	6.1	〃	80	〃	横長
27		D—2	No.9	3.4	5.0	その他	30	玄武岩	〃
28		B—3	No.29	5.8	7.0	〃	100	凝灰岩 砂岩	三角形

第5表　第Ⅰ調査区石錘一覧表

した石器で、石刀と思われる。石材は当地では産しない結晶片岩であり、他所から持ち込まれた可能性もある。20は台石状の表裏に人為的に凹められたと思われる数カ所の凹みをもつもので用途は不明である。18、22は石皿である。21～23はくぼみ石である。25、26は第5図で示した石で、26は41.3kgを測る花崗閃緑岩、27は36.6kgを測る黒雲母花崗岩である。いずれも近辺から持ち出されたものと思われる。25は19.3kgを測る閃緑岩の台石と思われるが砥石としても使用されたことも考えられる。

第4節　小　結

第Ⅰ調査区から出土した有文土器はその多くが2本沈線の磨消縄文土器である。文様屈曲部で沈線が途切れて不連続となるものが多くいずれも福田KⅡ式と考えられる。ただ46や65



第23図　第Ⅰ調査区出土石器実測図

挿図番号	図版番号	器　種	出土地点	最大長	最大幅	重　量(g)	材　質	備　考
23－1	12	石　鏃	トレンチ1	2.8	2.0	1.41	凝灰質砂岩	
2	〃	〃	I—3	1.9	1.4		結晶片岩	
3	〃	削　器	D—2	2.8	1.1			
4	〃	石　匙	G—2	6.3	2.9	10.24	安山岩	
5	〃	〃	H—2	3.8	2.8	4.34	結晶片岩	
6	〃	〃	C—3	3.8	2.9	5.14	〃	
7	〃	〃		3.5	2.6	3.97	〃	
8	〃	〃	H—3	5.2	3.0	9.39	〃	
9	〃	削　器	G—2	7.3	3.5	27.91	玄武岩	川原石・石器片を転用か
10	〃	磨製石斧	〃	8.1	4.3	165	石英安山岩	
11	〃	〃	〃	11.6	4.4	211	玄武岩	
12	〃	磨　石	〃	9.1	4.4	176	〃	赤色顔料付着(10R5/8)
13	〃	〃	〃	14.2	4.6	366	〃	〃
14	〃	〃	〃	10.3	4.3	165	〃	〃
15	〃	砥　石	B—3	10.4	4.1	228	砂　岩	
16	〃	砥　石	トレンチ1排土中	8.9	8.7	409	砂　岩	幅0.7m/mの線刻が一周する
17	〃	石 刀 ?	I—3	11.8	5.0		片磨石	
18	〃	石皿・台石	F—1	16.2	15.1	1,950	黒雲母花崗岩	
19	〃	叩石・凹石	F—1	10.4	8.7	756	花崗岩	
20	〃	凹　石	H—1	19.0	19.6	3,700	花崗岩	
21	〃	凹　石	トレンチ7、8中間	13.0	9.8	789	花崗閃緑岩	
22	〃	石　皿	トレンチ7	17.3	16.2	2,600	黒雲母花崗岩	
23	〃	磨石・凹石	〃	20.4	16.0	478	〃	
24	〃	台石・砥石	C—7	41.6	27.4	19,300	閃緑岩	
25	〃		F—2	58.4	36.6	41,300	花崗閃緑岩	
26	〃			45.8	35.4	35,000	黒雲母花崗岩	
10－1	7	磨製石斧	D—7	16.8	5.4	455	閃緑岩	縦半分が欠損
2	〃	砥　石	D—6	13.8	4.9	350	玄武岩	三面とも砥面
3	〃	磨製石斧	C—7	22.8	5.5	815	閃緑岩	刀部片面に赤色顔料付着 体部にスス付着
4	〃	石　錘	〃	6.0	4.8	73	黒雲母花崗岩	打欠
5	〃	〃	〃	6.6	4.1	90	花崗閃緑岩	〃

第6表　第Ⅰ調査区石器一覧表

のように文様がやや直線的なものもあることから、多少の時代幅はあるかもしれないがいずれも縄文時代後期前葉から後葉の範囲に納まるであろう。

本調査区から出土した土器のうち注目されるのは後期中葉とされている北部九州の鐘ヶ崎系の土器が含まれることである。鐘ヶ崎式土器は中・四国地方の初期縁帯文土器と並行するとされ、島根県内では美保関町崎ヶ鼻洞窟遺跡、津和野町高田遺跡などからも出土している。遺跡の性格については粗製土器がまとまって出土した場所には集石が見られること、遺物の出土面はゆるい傾斜地で住居跡とは考えにくいことや土器の残存状況等から本調査区からまとまって出土した深鉢は埋設土器の可能性が高い。大阪府山之内B遺跡では倒置された底部穿孔の施されない土器が検出されており、本調査区においても類似すると思われる土器（第5図）もあることから今後の検討課題としたい。また赤色塗彩の精製土器や同じくベンガラ（色調は主に10R4/8、10R5/8であった）の付着した磨製石斧、磨石の出土などは埋設された土器の近くで祭祀儀礼が行われた可能性を窺わせている。

第4章　第Ⅱ調査区

第1節　調査の経過と概要

平成7年9月に温泉小学校屋内運動場建設予定地の試掘調査に併わせ温泉幼稚園建設予定地についても試掘調査を行った。

その結果トレンチ9、10及びこの2カ所をつなぐサブトレンチの水田耕作土下層の黒褐色細粒砂土から縄文土器、石鏃が検出された。調査区域を設定したのち調査は平成8年3月19日より開始した。調査地の現状は水田で耕作土下層は黄褐色砂土と褐色土の混合層が堆積し、この層からも縄文土器が出土した。この堆積は現在温泉小学校の南側を流れる阿井川のかつての氾濫によるものと思われる。

区割りは第1調査区と同様2m四方を1グリッドとし、発掘調査を行った。調査開始から間もなく石器の剥片があいついで検出され、それとともに石鏃も点々と出土したため、4月18日より排土は全てふるいにかけることとした。その結果最終的に確認された石鏃は187点を数えた。また打製石斧も64点出土した。

遺構については、土質が第1調査区同様黒色土壌で、遺構を見い出すことは困難であった。しかし偶然にも土層図をとるために掘り下げた土層から落ち込みが認められ、さらには壙内から骨片が検出されたため土壙であることが判明した。本調査区では最終的に7基の土壙が確認されたが土壙内から出土した土器によっておよそ縄文時代後期後葉の埋葬施設と考えられた。以上のような成果を得て、平成8年6月19日に2カ月にわたる現地調査を終えた。以下遺構については調査区北側から順次概要を述べる。

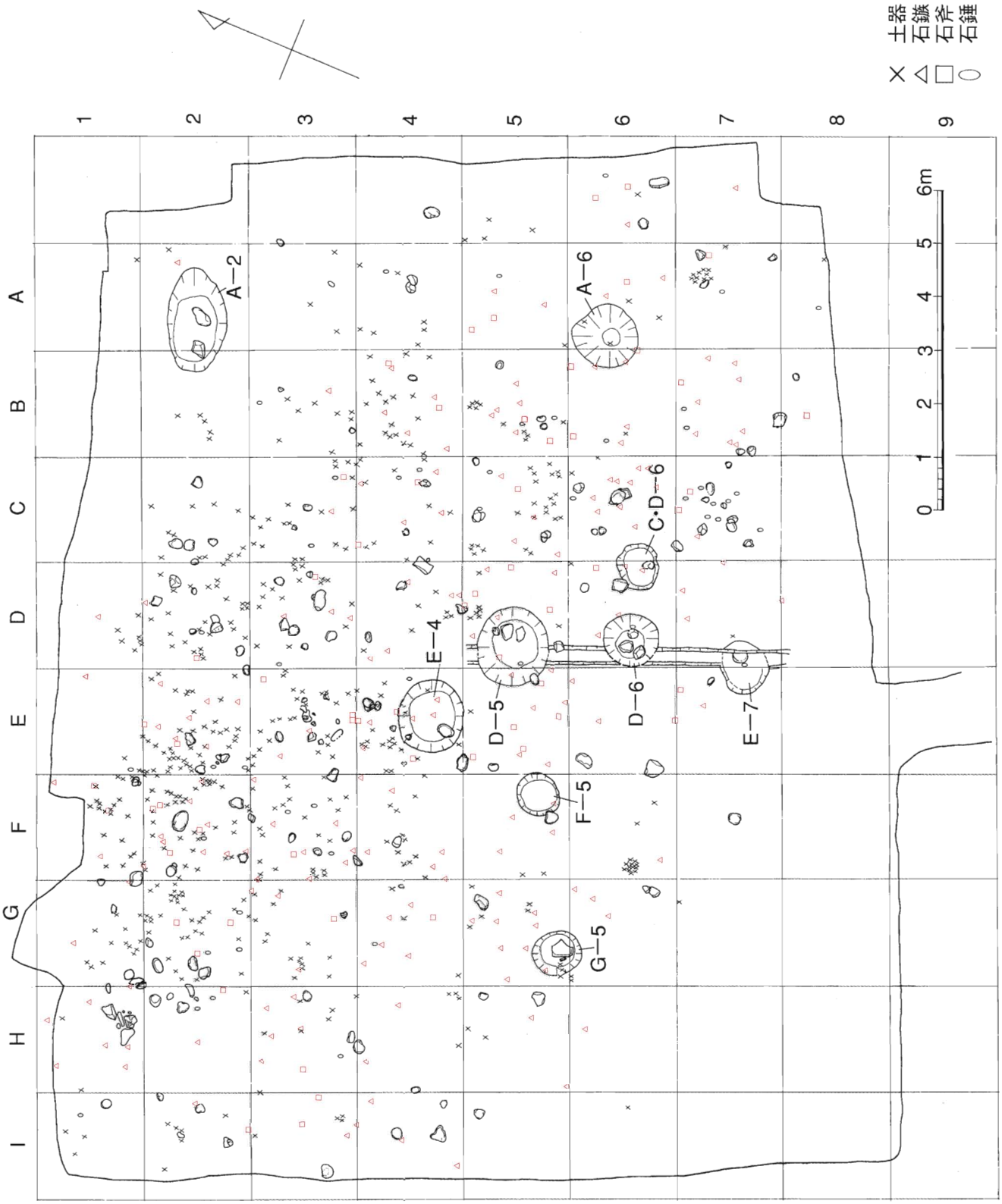
第2節　遺　構

1）A-2土壙

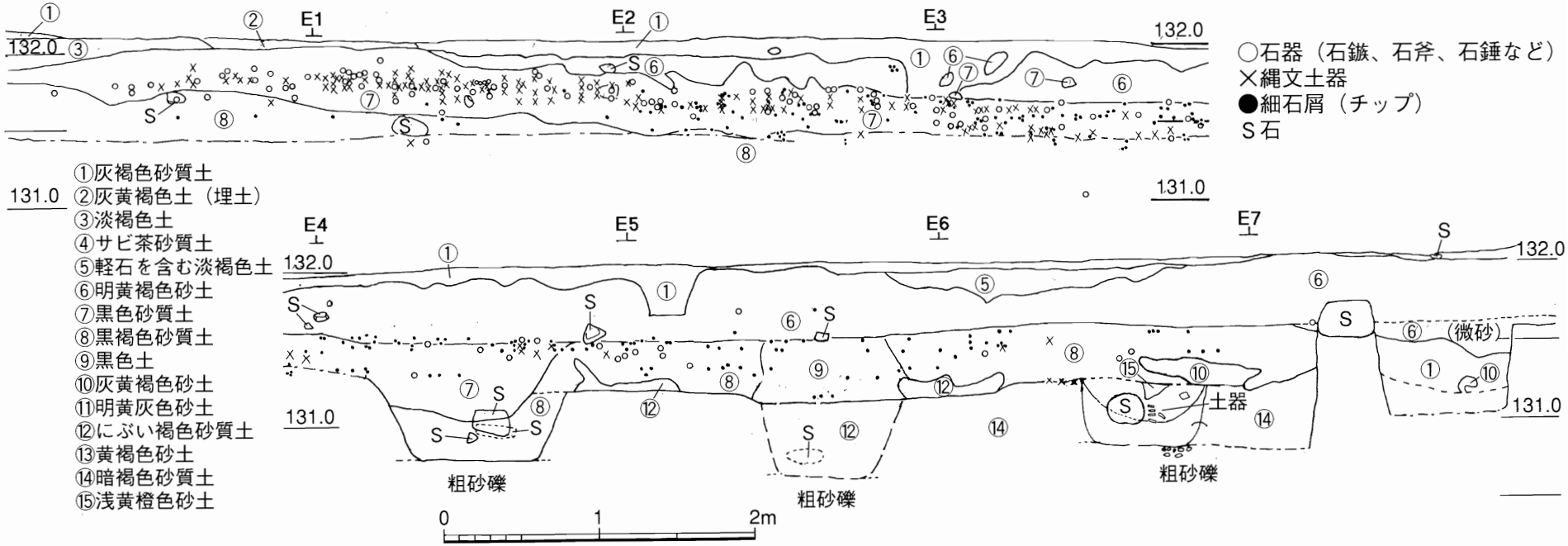
この土壙は調査区北端から検出された長さ190cm、幅110cm、深さ33cmを測る楕円形の土壙で、本調査区から検出された楕円形土壙としてはこの土壙のみであった。A-2土壙は黒色土ないし黒褐色土を掘り込んで作られた他の土壙と異なり、黄褐色の微細砂土に掘り込まれていた。地形的にも調査区北端部はレベルがやや高く、土壙が確認された時点での他の土壙との高低差は約30cmである。土壙内では2個の石が検出された。遺構の性格を考えるうえで第26、27図のように土壌を採取し、分析を行った。その結果、同図5～9及び24～26付近に他の土壌サンプルと比べ3～4倍もの高濃度のリンが抽出され、この付近に遺体が埋設されていた可能性があることが分かった。2個の石は埋葬に伴って置かれた石とも考えられる。また前述したようにA-2土壙は他のまとまった土壙に比べ離れて位置しており、形態も異なることから時代差を反映していると考えられる。土壙が作られた順は不明である。

2）A-6土壙

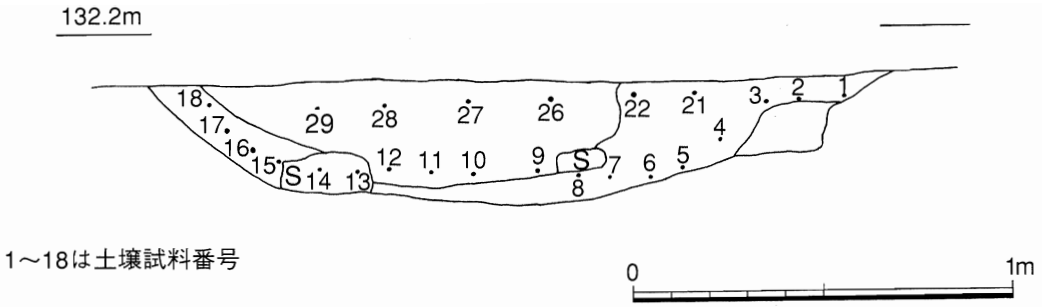
A-6土壙はDライン土壙群よりやや東よりに位置する、円形の土壙である。上面の径120cm、底面の径32cmを測る。墓と確認できる資料は得られなかったが形状から土壙とし



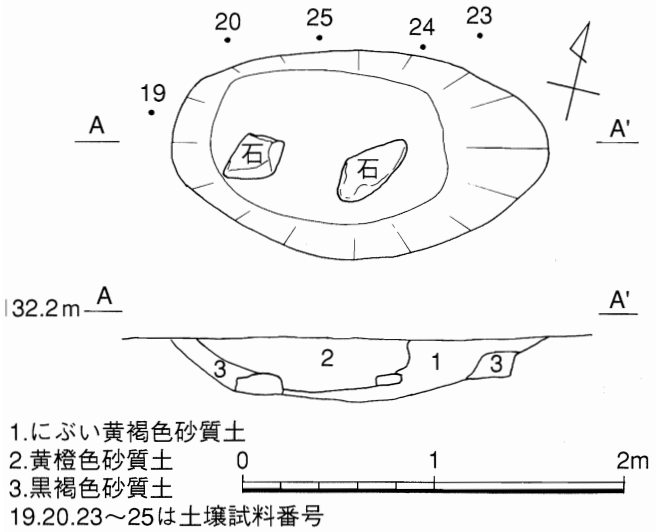
第24図　第Ⅱ調査区全体図



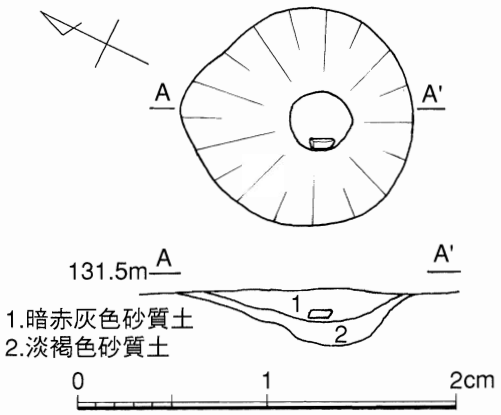
第25図　第Ⅱ調査区Eライン土層図



第26図　第Ⅱ調査区A－2土壙土壌分析試料採取位置図（1/20）



第27図　第Ⅱ調査区A-2土壙実測図（1/40）



第28図　第Ⅱ調査区
A－6土壙実測図（1/40）

た。下層が淡褐色砂質土、上層に暗赤褐色砂質土が推積していた。また土壙内中ほどに長方形の礫が入っていたほかは遺物は認められなかった。

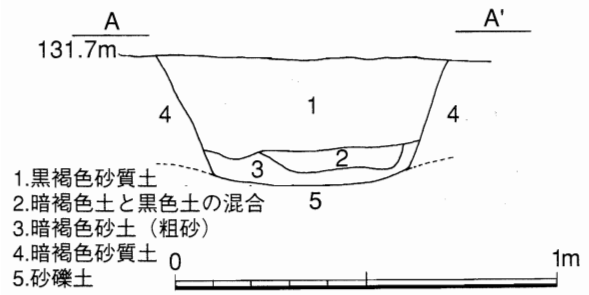
3)　C・D-6土壙

Dライン土壙群に入り、やや不整形な円形の土壙である。長径86cm、短径78cm、深さ34cmを測る。暗褐色砂質土をほぼ直線的に掘り込み、底を広げた土壙で骨片が検出された。骨片はいずれも底面に残存していたものである。

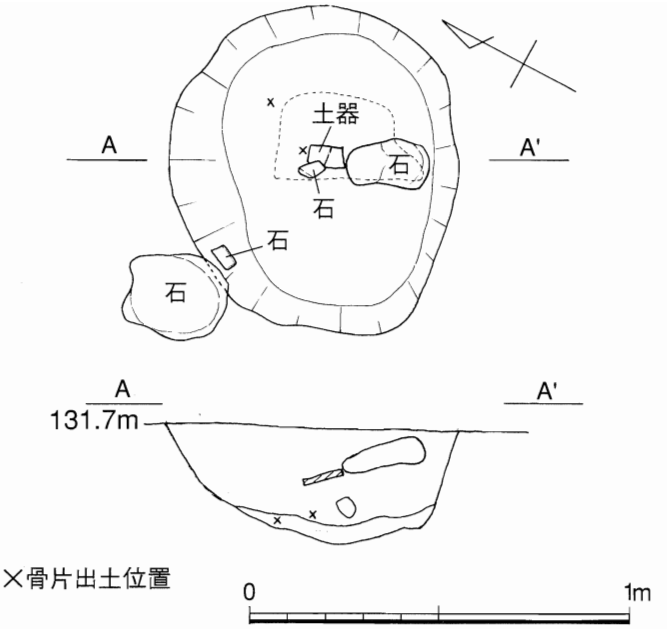
遺物を取り上げ土壙内を完掘したところ、底部は暗褐色土と黒色土がブロック状に混ずる混合土で、その周囲が暗褐色砂質土と2層に別れていた。（第29図）この混合土層を上方から見ると第30図の点線に示すようになる。他の半分については未確認であるが遺体を何かに包んで埋葬した可能性も考えられる。

CD-6土壙からは第31図に示す粗製土器のほか、打製石斧も土壙壁面から出土した。埋葬の際に共献されたものと思われる。石材は玄武岩で長さ10.8cm、最大幅4.3cmを測る。

第31図1はうす手の粗製深鉢口縁部で口径34.4cm、口縁の調整は雑である。2は粗製深鉢の胴部と思われる。外面は粗いナデだが内面は丁寧である。3も粗製土器片であるが詳細は不明である。1、2とも岩田Ⅳ類の範囲に入ると思われる。



第29図　第Ⅱ調査区
C・D−6土壙土層図（1/20）



第30図　第Ⅱ調査区C・D−6土壙実測図（1/20）

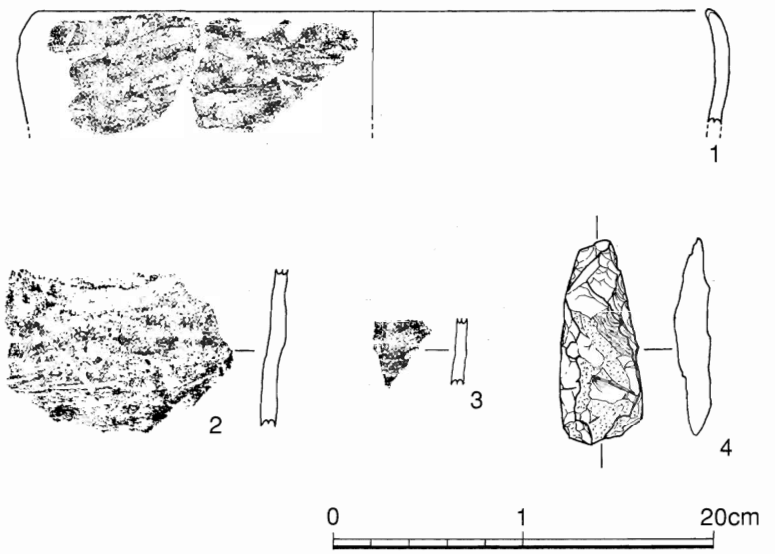
4)　D-5土壙

本調査区の土壙群中最も大きな土壙で上面径140cm×130cm、底面径約84cm、深さ54cmを測る。淡褐色細粒砂土、明黄褐色砂土を掘り込み、底面は地山の河原石を含む粗砂層の上部まで達している。土壙群の中で最初に骨片が検出された土壙で、発見された小骨片は縦1.4cm、横2.5cmであった。

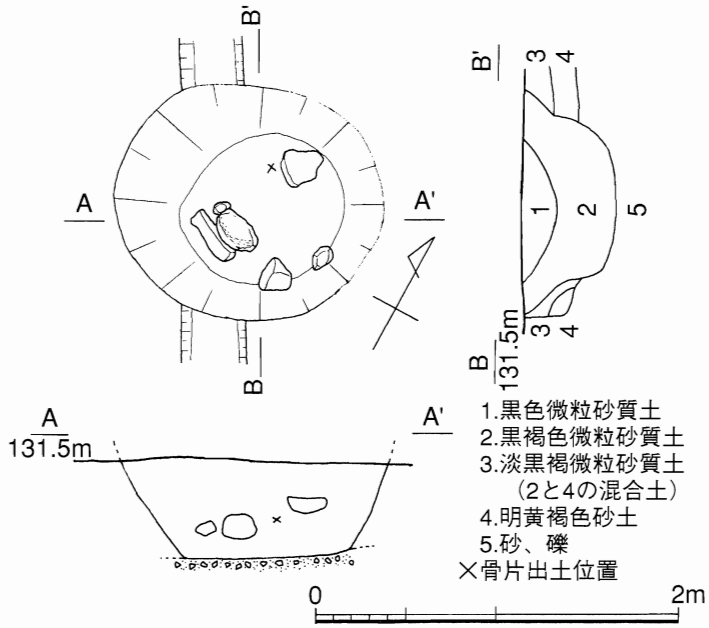
付論の分析報告に記すようにこの骨片は上腕骨の一部の可能性があることが分かった。

D-5土壙内からは32.0cm×10.0cmの長方形の河原石をはじめ人頭大の川石も3個出土した。これは抱き石として用いられた可能性も考えられる。

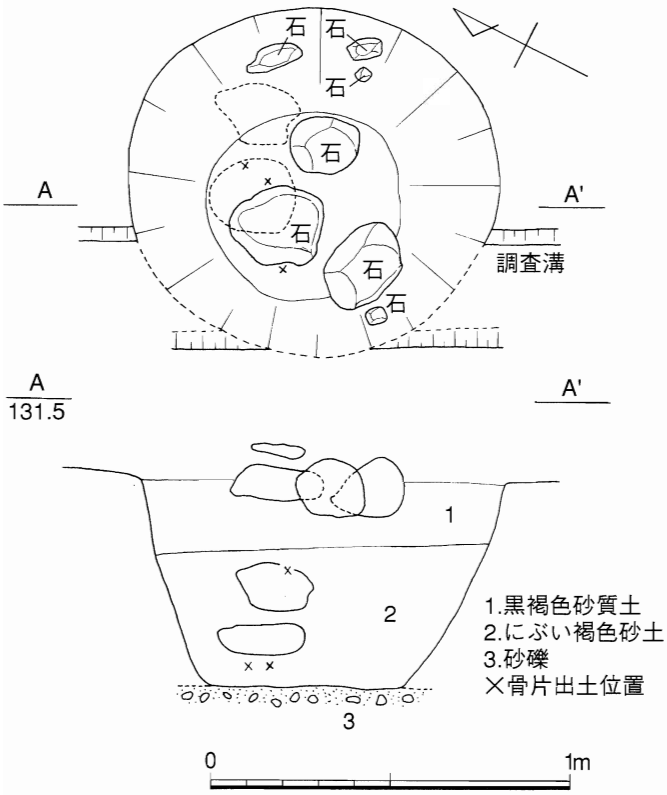
このほか遺物として、粗製土器片、打製石斧が出土した。第32図1は打製石斧で長さ10cm、最大幅3.8cmを測る。石材は玄武岩である。2は粗製深鉢の胴部と思われる、外面はハケ目状のナデが施され、ススが付着する、岩田Ⅳ類に並行すると思われる。



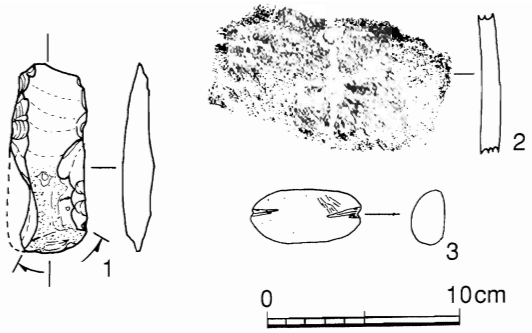
第31図　第Ⅱ調査区C・D−6土壙出土遺物実測図（1/4）



第32図　第Ⅱ調査区D－5土壙実測図



第34図　第Ⅱ調査区D－6土壙実測図



第33図　第Ⅱ調査区
D－5土壙出土遺物実測図（1/4）

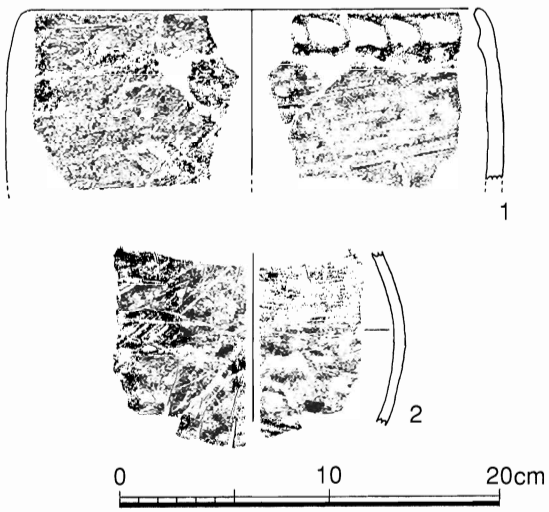
5）D-6 土壙

土壙群のほぼ中央に位置する土壙で上面径104cm、底面径約74cm、深さは58cmであった。D-5土壙と同様一抱えほどの川石が検出された。第34図に示す土壙上部の石についてはちょうど土壙中央部に位置しているがレベルがやや高いため土壙に伴うものかどうか不明である。

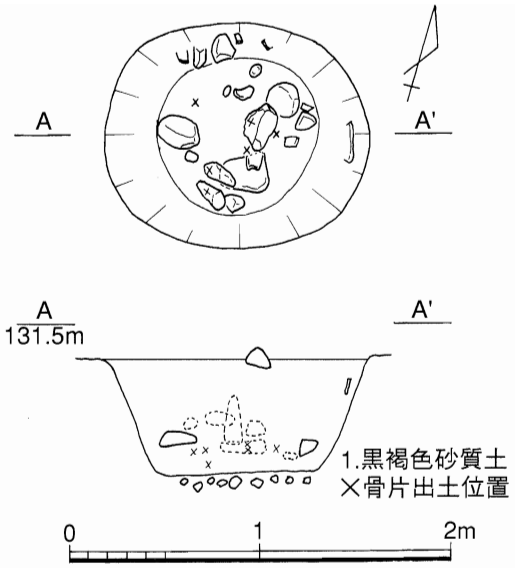
この土壙からも微細な骨片が検出されたが位置が確認されたのは図に示す3カ所で底面に近いほうであった。骨片が石の直下から検出されたことはこの石が遺体の上部に置かれていた可能性が考えられる。

遺物としては、粗製土器片がある。第35図1は粗製深鉢の口縁で口径23.0cmを測る。

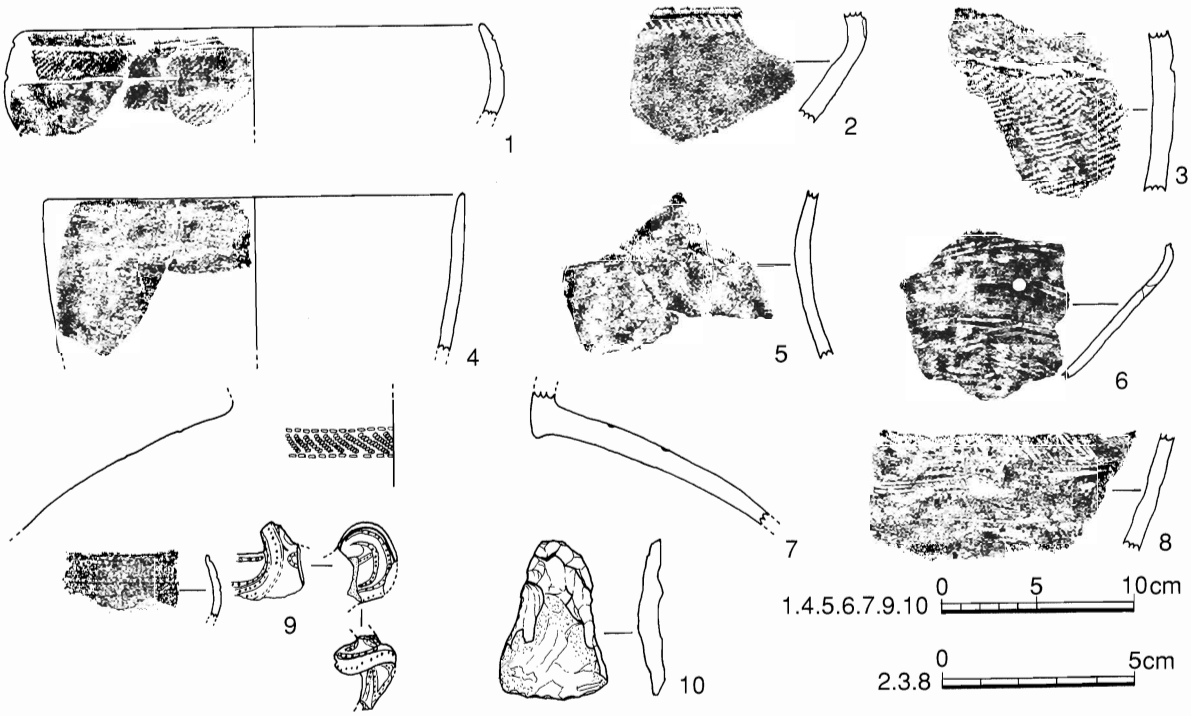
口縁内面を左人さし指で押圧し、右方向に一周させる。外面はカキ目状のケズリ、内面には板目状のナデ痕がみられる。岩田Ⅳ類に並行するものと思われる。2は鉢型土器の胴部片である。内外面ともミガキ調整である。



第35図　第Ⅱ調査区
D－6土壙出土遺物実測図（1/4）



第36図　第Ⅱ調査区
E－4土壙実測図（1/40）

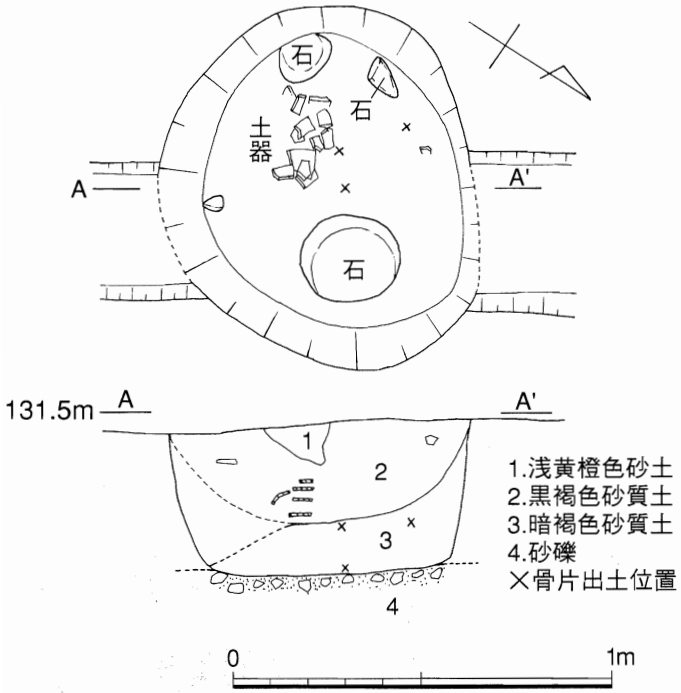


第37図　第Ⅱ調査区E－4土壙出土遺物実測図

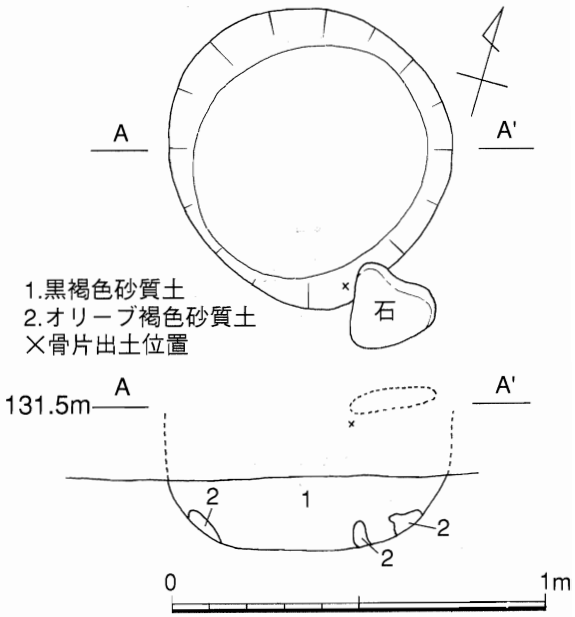
6)　E-4土壙

本調査区のほぼ中央から検出された土壙で上面形は楕円形で、上面は138cm×118cm、底面径は約80cm、深さ58cmを測る。E-4土壙でも礫を含む粗砂層の直上まで掘り込まれ、底面には微小骨片が点在していた。また他の土壙と比べ多くの川石が検出された。遺物は本土壙からも打製石斧及び縄文土器が検出された。1は沈線間に擬縄文を施した浅鉢、2は口縁端部に細沈線と刻目を入れた浅鉢でいずれも彦崎KⅡ式並行のものと思われる。3は深鉢

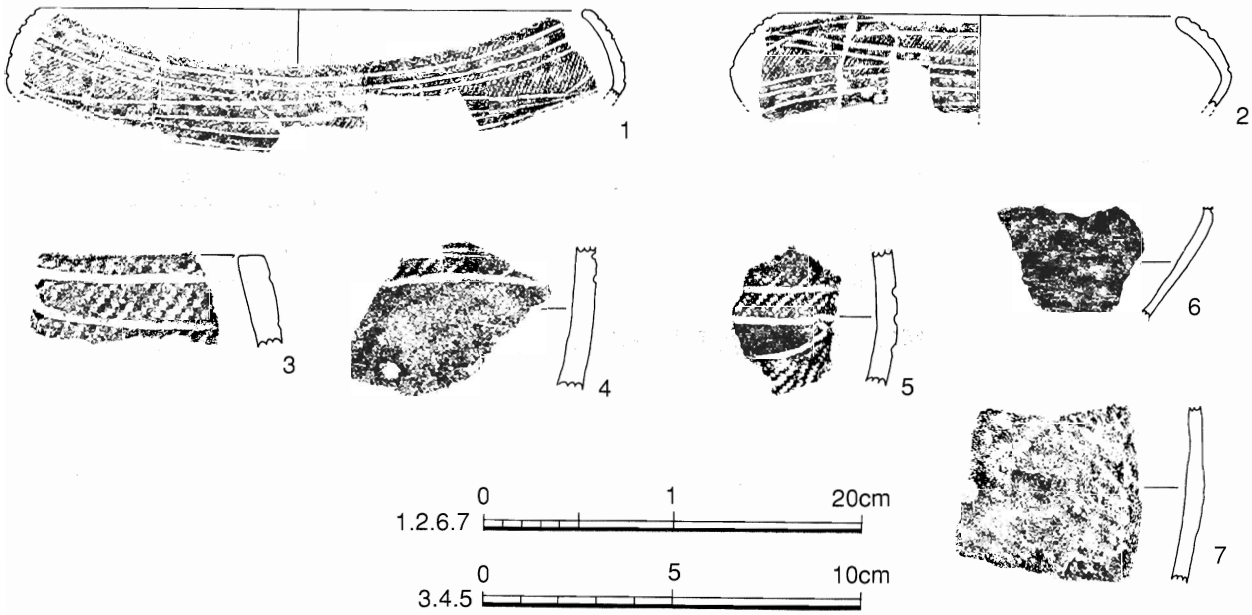
肩部に結節状の沈線を入れ、胴部に擬縄文が施こされる。6はやや光沢のある精製浅鉢で口縁端部に細沈線が1条施こされる。いずれも彦崎KⅡ式に並行すると思われる。7は肩部に刺突を2条めぐらしその間に縄文を施した短頸壷と推定され、権現山式と考えられる。打製石斧は撥形で石材は玄武岩である。他の土壙内出土の石斧と同様、供献遺物であろうか。



第38図　第Ⅱ調査区E－7土壙実測図



第40図　第Ⅱ調査区
F－5土壙実測図



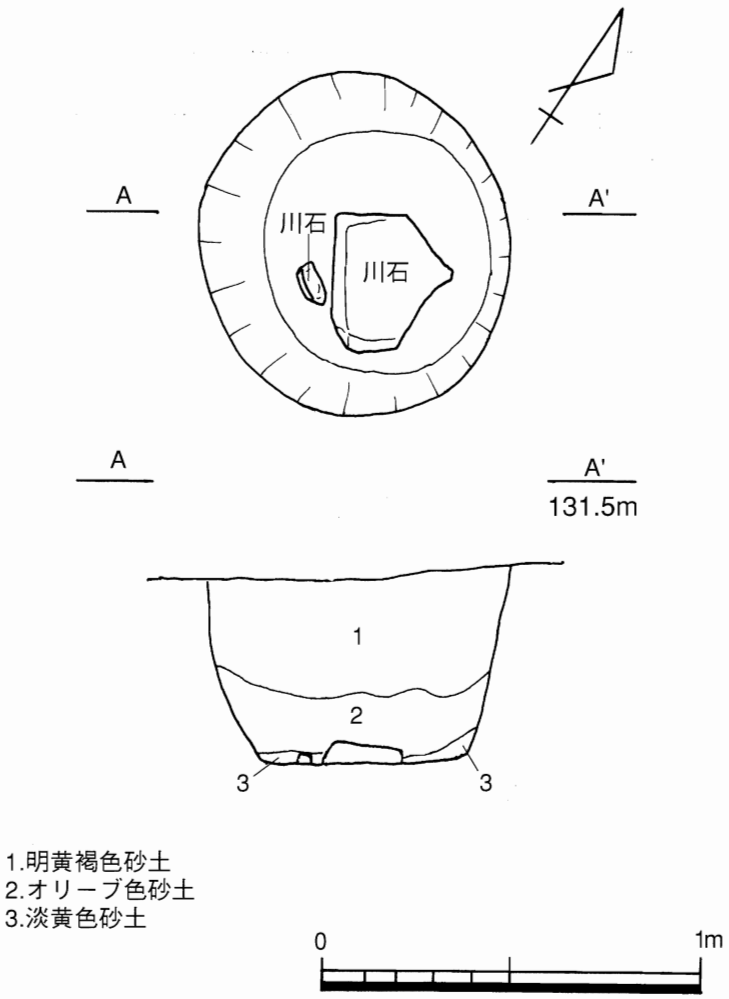
第39図　E－7土壙出土遺物実測図

7) E-7土壙

土壙群中で最も南寄りの土壙である。平面形は不整楕円形で上面は97×80cm、底面は約80×66cm、深さは40cmを測る。実際はもう少し上部から掘り込まれていたと考えられる。この土壙でも川石と川砂の層直上まで掘り込まれている。微細骨片は主に土壙中ほどと底部から検出された。ここでは他の土壙から確認された川石とは異なり、球形の花崗岩が1個出土し、土器片もまとまって出土した。第39図1、2は有文の浅鉢である。1は口径28.0cm、2は20.4cmを測る。1は口縁端部に連弧文はないが他の文様は1と同様である。3、5は浅目の沈線内外に縄文、4は沈線間に擬縄文が施される縄文土器、6には沈線端部に細沈線が入る。7は粗製深鉢の胴部と思われる。7を除きいずれも彦崎ＫⅡ式に並行すると考えられる。このようにE-7土壙から検出された縄文土器は時期がほぼまとまっており、この遺構の年代もおよそ縄文時代後期後葉と考えられる。

8) F-5土壙

土壙群のやや西よりから検出した。上面径約75cm、底面径約60cmとやや小型の土壙である。



第41図　第Ⅱ調査区G－5ピット実測図（1/20）

調査終了段階になって円形のプランが確認されるとともに骨片が検出された。第40図のとおりプランが不明であったため底面上20cmまで掘削していたため遺物の有無等詳細は不明である。

9) G-5ピット

淡褐色砂質土に掘り込まれた上面径80cm、底面径58cmの穴で、下層にオリーブ色砂土、上層には明黄褐色砂土が堆積していた。底面で24cm×36cmの平らな石が検出されたがこのほか遺物はなかった。穴中の堆積土の様相から土壙とは考えにくく性格については不明である。

10) 第Ⅱ調査区検出土壙について

本調査区から検出された土壙について概観してみると、浅く掘り込まれた舟型の土壙と円形土壙とに分けられるが、舟型土壙と円形土壙群は約8mも離れて位置しており、埋設された年代に時期幅があるかもしれない。円形土壙の規

模はすり鉢状を呈するA－6土壙を除くと上面径が1,2mから2,0m、深さは約60cm前後で概略Aグループ（D－5、D－6、E－4）と上面径約80cm前後、深さ40cm前後のBグループ（C・D－6、E－7、F－5土壙）に分けられよう。Bグループは上面径、深さともAグループのおよそ半分の大きさである。形状から被葬者は屈伸葬で埋葬されたと思われるがBグループについては確証はなく、縦位屈葬か横位屈葬かも判断しえない。各土壙の被葬者数は小骨片分析の結果、各一人と考えられるためAグループ土壙は成人、Bグループ土壙には小児が埋葬されたかもしれない。

土壙のほとんどから人頭大の石が検出された。これらの石は概して中心部には置かれず外周に置かれていた。大きさ、形も様々であるがE－7土壙では明らかに加工されたと思われる直径約29cmの球形の花崗岩が検出されている。遺体に伴なうものであればこれらの石は抱き石とみることができようか。今後同類例の報告を待ちたい。

土壙内の遺物は、8基中5基から土器が検出され、そのうち3基は打製石斧を伴っている。土器はすべて破片であった。C・D－6、E－7土壙では中央にまとめて置かれ、供献された可能性が考えられる。またC・D－6土壙では遺体の脇に置かれたような状態で出土した。D－5土壙出土石斧には使用痕が認められた。

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	文様	調整	備考
33－2	19	D－5土壙	粗製深鉢		ハケ目状ナデ	外面にスス付着
31－1	〃	C・D－6土壙	粗製鉢？		ナデ	口径34.4cm
－2	〃	〃	深鉢		ナデ（内面は丁寧なナデ）	
－3	〃	〃			ナデ	
35－1	〃	D－6土壙	深鉢		外面ケズリ 内面板状のナデ痕	口縁内面に左人さし指による押圧痕をめぐらす
－2	〃	〃	壺型土器		粗いミガキ	外面にスス付着
37－1	〃	E－4土壙	浅鉢	沈線・擬縄文	ナデ	外面にスス付着
－2	〃	〃	浅鉢	沈線・刻目	ミガキ・ナデ	外面光沢あり
－3	〃	〃		縄状沈線 擬縄文	ナデ	
－4	〃	〃	鉢		外面粗いナデ 内面丁寧なナデ	口径21.4cm外面にスス付着
－5	〃	〃	深鉢		ミガキ一部条痕 内面ナデ	
－6	〃	〃	浅鉢	口縁部沈線	ミガキ	穿孔、外面にスス付着
－7	〃	〃	壺	刺突・刻目 縄文	ナデ	
－8	〃	〃	深鉢		条痕ナデ	外面にスス付着
－9		〃	浅鉢？	沈線内刺突	ナデ	把手 うず状線の底に連続刺突文
39－1	口絵11	E－7土壙	浅鉢	平行・斜行沈線 連続弧状沈線・縄文	ナデ	口径28.0cm
－2	19	〃	浅鉢	平行・斜行沈線 沈線内刺突	ミガキ	外面スス付着
－3	〃	〃		沈線・縄文		
－4		〃	浅鉢	沈線・擬縄文	ナデ	
－5	19	〃		沈線・縄文	ナデ	内面にスス付着
－6	〃	〃	浅鉢	沈線内刺突	ミガキ	外面にスス付着
－7	〃	〃	深鉢		ハケ目状ナデ	外面にスス付着

第7表　第Ⅱ調査区出土遺講に伴う縄文土器観察表

第3節　遺　物

第Ⅱ調査区から出土した遺構に伴わない遺物については縄文土器片、石鏃、石斧、石錘等である。

1　縄文土器

1）　有文土器

第1類（第42図1～5、8、9）　彦崎KⅡ式より古いと思われるものを一括した。4、5は肩部に段がつき、胴部に縄文を施す鉢である。彦崎KⅠ式と考えられる。彦崎KⅡ式まで残るかもしれないが、とりあえずここに分類しておく。2は肥厚した口縁部に沈線と縄文を入れるもので、津雲A式と考えられる。1～3、8は頸部にも施文され比較的古い様相の土器である。

第2A類（第42図10～35、37、39～45、第43図46～58、62、67、69、70）　彦崎KⅡ式と思われるものを一括した。縄文が施されるもの（第2A類）、擬縄文が施されるもの（第2B類）がある。

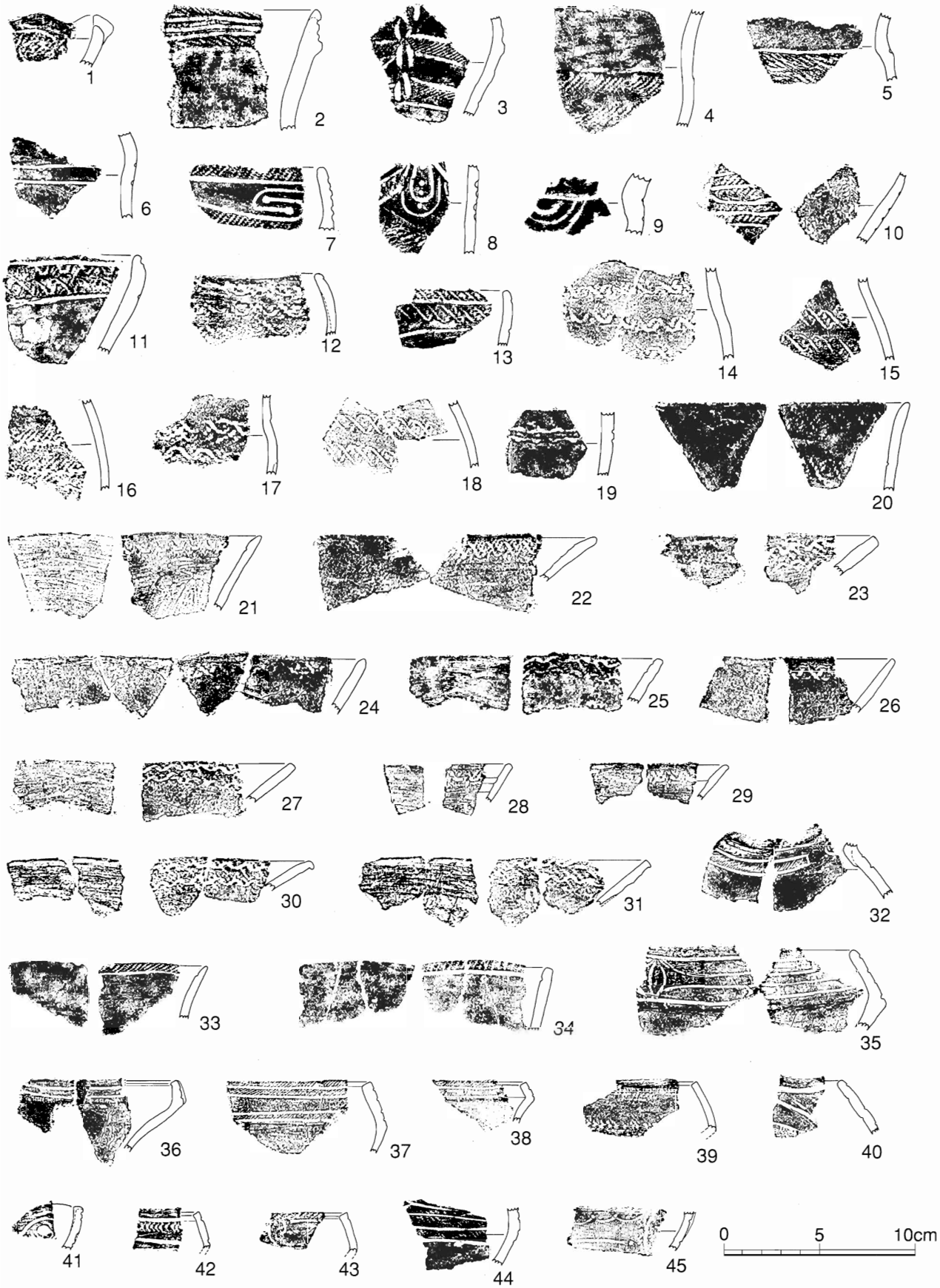
縄文が施される第2A類は、結節縄文の土器がまとまって出土した（10～31）。外面に結節縄文が施文されるもの（11～20）と、内面に施されるもの（10、21～31）がある。16は結節部を軸とした羽状縄文が施されている。また、10は内面に結節縄文が施されるほか外面にも孤文、直線文を基調とした磨消縄文帯が施される。口縁部が内湾するもの（11、12）単純口縁のもの（20～31）がある。

7、33、34、37、49、67、69は、縄文が施された土器である。7、37、67、は口縁部が「く」の字形に屈曲して上方に拡張される器形である。69の屈曲部にはさらに刺突文が加えられる。33、34は単純口縁で、内面に沈線を入れ上端に縄文を施すものである。69は口縁部の屈曲がやや弱く内湾しており波頂部に重弧文がつくので、他の土器より若干古いであろうか。

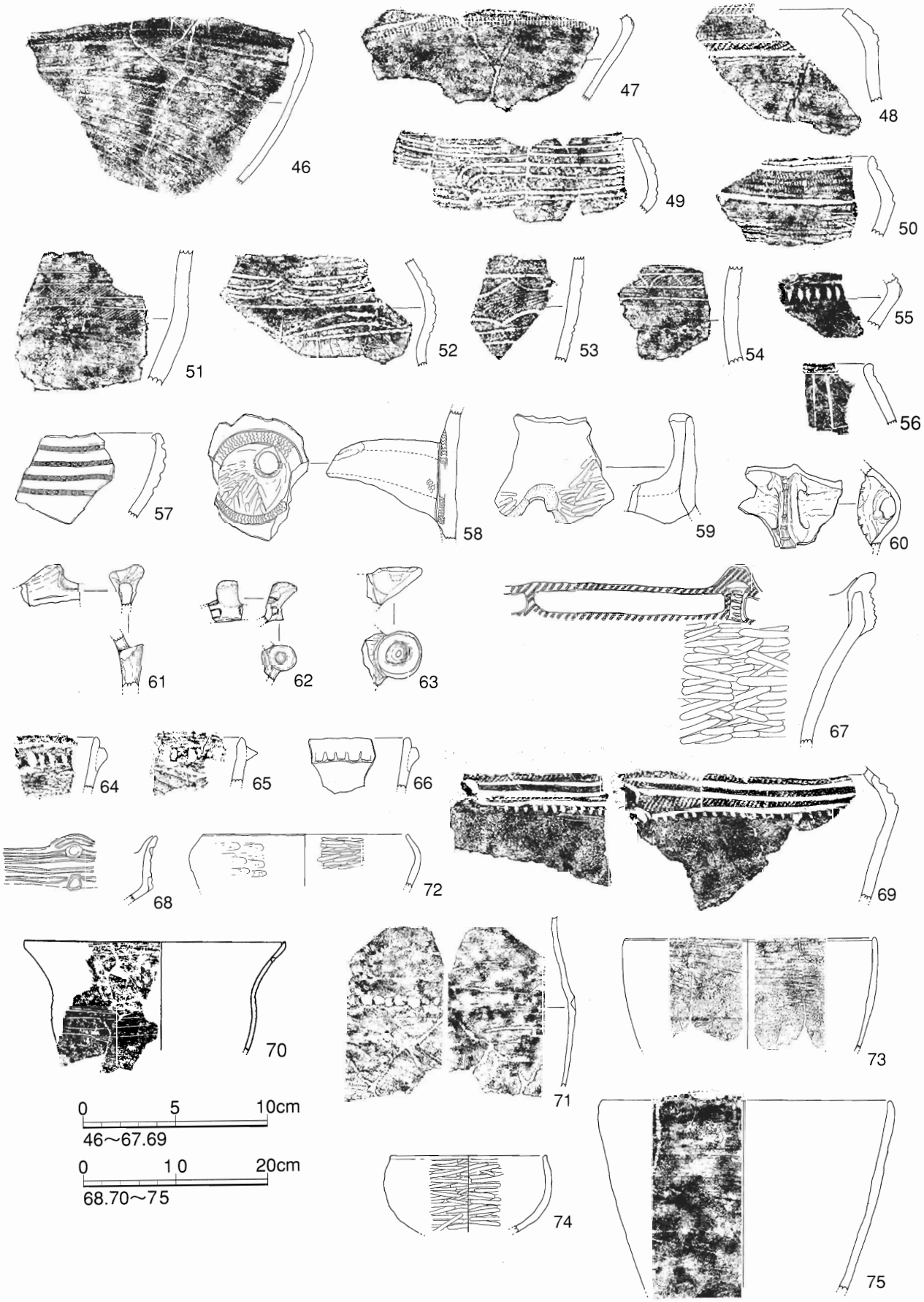
第2B類（第42図22、32、35、36、38～45、第43図50、51、53、54、56、58）も口縁部が「く」の字形に屈曲して上方に拡張される器形のものがみられる（50など）。22、32、40、45、58は注口土器である。56は沈線の両端を刺突されるもので下端に擬縄文が観察できる。これらの土器は擬縄文が施されるが、総じて二枚貝によるものが多く刺突文風となるものが多い。このほか46、47、55は屈曲部に刺突文が施されその上に沈線が巡る。上部に縄文や擬縄文が施される可能性もある。

第3類（第42図36、38、第43図70）　九州地方の西平式土器である。口縁部が「く」の字形に短く屈曲した深鉢で、口縁部には沈線と擬縄文が施されている。36と38は西平式に極めて近いが、70は波状文を二枚貝の刺突で表現しており西平式土器の模倣品と感じられる。なお51、54は2B類としたが、連弧文が波状文に近いので第3類となる可能性がある。

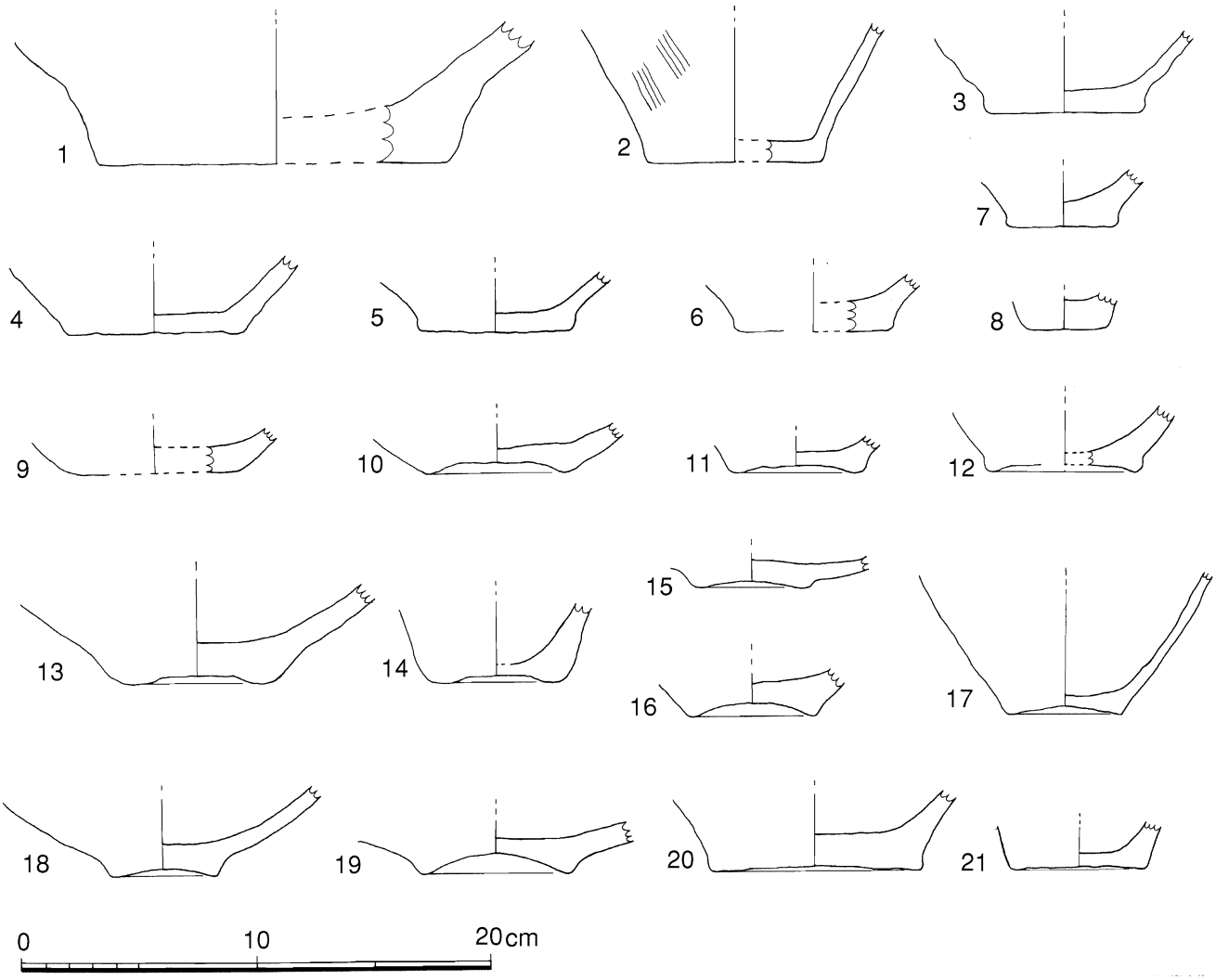
第4類（第43図68）　口縁部が「く」の字形に屈曲し、凹線文が施される。宮滝式または福田KⅢ式といわれる土器である。68は浅鉢で、突起の位置に巻貝による刺突と扇状圧痕がみられる。凹線内は未調整である。この土器の内面にはスス状の付着物が残る。



第42図　第Ⅱ調査区出土縄文土器実測図(1)



第43図　第Ⅱ調査区出土縄文土器実測図（2）



第44図　第Ⅱ調査区出土土器底部実測図（1/3）

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	底部形状 外面	底部形状 内面	底径(cm)	器厚(cm)	備考
44—1	15	D—2	深鉢	平底	凹	15.0	15.0	外面にクサビ形の刺突
2	〃	D—6	鉢	〃	平	7.5	6.0	
3	〃	H—3	〃	〃	〃	6.7	5.0	スス付着
4	〃	D—3	深鉢	〃	〃	7.6	8.0	底部外面押圧ナデ
5	〃	C—5	浅鉢	〃	〃	6.6	5.5	
6	〃	F—1	深鉢	〃	〃	6.6	8.0	
7	〃	C—7	〃	〃	凹	4.6	8.0	
8	〃	D—7	小鉢	〃	平	3.6		
9	〃	C—4		〃		7.0	7.0	
10	〃	G—2	浅鉢	上げ底	平	6.0	7.0	
11	〃	E—3	鉢	浅い上底	〃	5.8	7.0	
12	〃	E—4	深鉢	上げ底	凹	6.3	8.0	
13	〃	E—2	浅鉢	浅い上底	平	6.5	9.0	
14	〃	B—8	小鉢	浅い上底	凹	5.2	7.0	
15	〃	A—8	浅鉢	浅い凹底	平	5.0	6.0	仕上げ雑
16	〃	O—5	深鉢	凹底	〃	5.5	9.0	底部外面丁寧なナデ
17	〃	E—4	鉢	〃	〃	4.7	4.5	底部外面丁寧なナデ
18	〃	C—5	浅鉢	〃	〃	4.5	6.0	底部外面に刺突
19	〃	I—3,E—5,D—4	浅鉢	〃	〃	6.5	9.0	
20	〃	E—5	鉢	浅い凹底	〃	9.0	7.0	
21	〃	I—3	〃	〃	〃	5.7	7.0	内・外面ミガキ

第8表　第Ⅱ調査区出土土器底部観察表

第5類（第43図61、64～66、71）　晩期を一括した。64～66は突帯文土器である。突帯は口縁端部に接近しており65には突帯と口唇部に、64、66は突帯に刻み目が施される。これらの突帯文土器は比較的新しい様相の土器である。71は胴部がやや張り頸部がくびれる粗製深鉢である。胴部、頸部には刺突文が施される。頸部と胴部では施文具が違うようである。谷尻式から突帯文出現期の前池式にみられる文様である。61は浅鉢のリボ

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	文様	調整 外面	調整 内面	沈線幅 (m/m)	備考
1			鉢	沈線、縄文	ミガキ	ミガキ	2	波頭部
2	14	E−3	〃	沈線、縄文	ナデ	ナデ	2.5	緑帯文
3	〃	F−2	〃	沈線、刻目、縄文	ミガキ	ミガキ	2〜3	
4	〃	E−4	〃	縄文	粗い ミガキ	ナデ+ ミガキ		胴部下部を施文
5	〃	E−3	〃	雑な縄文、深い沈線	ナデ	ナデ	2	
6	〃	H−8		沈線	ナデ	ケズリ	2	
7	〃	E−2	浅鉢	沈線、縄文	ミガキ	ナデ	2	
8	〃	C−4		沈線、擬縄文、刺突	ミガキ	ミガキ	1〜3	
9	〃	F−4		沈線	ナデ	ナデ	2〜2.5	
10	〃	B−4		内面−結節縄文 外面−沈線、縄文	ミガキ	ミガキ	2	
11		E−3		沈線、結節縄文	粗い ミガキ	粗い ミガキ	2〜3	外面施文
12	14	F−2	浅鉢	結節縄文		ミガキ		外面施文
13		B−5		沈線、結節縄文	ナデ	ナデ	2	外面施文
14	14	F−1	鉢	結節縄文	ナデ	粗い ミガキ		外面施文
15	〃	B−4		結節縄文	ナデ	ミガキ		外面施文
16	〃	C−2		結節縄文、羽状縄文	ミガキ	ミガキ		外面施文
17	〃	E−2		結節縄文	ナデ	ナデ		外面施文、胴上部
18	〃	C−6		結節縄文	ナデ	ミガキ		外面施文、胴上部
19	〃	C−5		結節縄文	ナデ	ナデ	2〜3.5	外面施文
20	〃	E−3		結節縄文	ナデ	ナデ		内面・外面施文
21	〃	C−3		結節縄文	ミガキ	ミガキ		内面施文
22	〃	I−4	注口土器	結節縄文	ミガキ	ミガキ		内面施文、スス付着
23	〃	D−4	浅鉢	結節縄文	条痕	ミガキ		内面施文
24	〃	I−3	浅鉢	結節縄文	ミガキ	ミガキ		内面施文、スス付着
25		E−3	浅鉢	結節縄文	条痕	ミガキ		内面施文
26	14	I−1	浅鉢	結節縄文	ミガキ	ミガキ		内面施文
27	〃		浅鉢	結節縄文	ハケ目	ミガキ		内面施文
28				結節縄文	ミガキ	ミガキ		内外面板状の磨研
29	14			結節縄文	粗いナデ	ハケ目		内面施文
30	〃		浅鉢	結節縄文	条痕	ミガキ		内面施文
31	〃	D−6	浅鉢	結節縄文	条痕	ナデ		内面施文
32		E−4	注口土器	沈線、擬縄文	ミガキ	ナデ	2	

第9表　第Ⅱ調査区出土縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	文様	調整 外面	調整 内面	沈線幅 (m/m)	備考
42－33		I－1	鉢	沈線、縄文	ミガキ	ミガキ	1～2	
34	14	D－3	鉢	沈線、縄文	ナデ	ナデ	2	外面スス付着
35	〃	F－3	浅鉢	沈線、擬縄文	ミガキ	ミガキ	2～1	外面スス付着
36	〃	D－2 E－4	深鉢	沈線、擬縄文	ミガキ	ミガキ	2	口縁帯を擬縄文帯と区画する
37	〃	C－7	浅鉢	押引状沈線、縄文	ミガキ	ミガキ	1	
38	〃	D－4	深鉢	沈線、擬縄文	ミガキ	ミガキ	1	
39	〃	I－3	浅鉢	S字状文様、擬縄文	ミガキ	ミガキ		
40		A'－6	注口土器	沈線、刻目、擬縄文	ミガキ	ミガキ	1～2	
41		D－2	浅鉢	沈線、擬縄文	ミガキ	ミガキ	2	
42	14		浅鉢	沈線への字状押引文、擬縄文	ミガキ	ナデ	2	
43	〃		浅鉢	沈線、擬縄文	ミガキ	ミガキ	1	
44	〃	E－4	浅鉢	沈線、擬縄文	ミガキ	ミガキ	1～2	
45	〃	F－3	注口土器	沈線、擬縄文	擬縄文	ナデ	1～2	沈線、末端刺突
43－46	〃	G－2	浅鉢	沈線、押引状の刻目 二枚貝条痕	ミガキ の条痕	ミガキ		外面スス焦げ目付着
47	〃	E－4	浅鉢	刻目、刺突	ミガキ	ミガキ		
48	〃	F－2		口唇部、沈線間に縄文	やや粗い ミガキ	ミガキ	1.5～2	
49	〃	E－4	浅鉢	V字状沈線 沈線間に縄文	やや粗い ミガキ	ナデ ミガキ	1～2	
50	〃	I－3	浅鉢	V字状沈線 擬縄文、条痕	条痕	条痕 ナデ	3	
51	〃	F－3	深鉢	沈線、連弧文、擬縄文	ミガキ	ミガキ	1	
52	〃	A－5		沈線内に刺突文、連弧文	粗い ミガキ	粗い ミガキ	1.5～2.5	外面スス付着
53	〃	C－6		擬縄文、連弧文、沈線	ナデ	ナデ	1.5～2	
54	〃	F－4		沈線、連弧文、擬縄文	ナデ	ナデ	1	
55	〃	E－4	浅鉢	刺突文、沈線	ナデ	ナデ		
56	〃	H－4		沈線、擬縄文	ナデ	ナデ	1～2	沈線、末端刺突
57	〃	D－6	浅鉢	沈線、刺突	ナデ	ナデ	2～2.5	
58	〃	E－1	注口土器	沈線、S字状細沈線、擬縄文	ミガキ	ナデ		注口部スス付着
59		E－6	注口土器		ミガキ	ナデ		
60	14	A－7	把手部	把手外縁に刻目				
61			浅鉢		ナデ	削り ナデ		
62	14		浅鉢	擬縄文	ナデ	ミガキ		突起波頭部
63	〃	D－5	浅鉢					突起波頭部
64	〃	H－6		突帯文、刻目	ナデ	ナデ		

第9表　第Ⅱ調査区出土縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	文様	調整 外面	調整 内面	沈線幅 (m/m)	備考
65	14	E−3		突帯文	ナデ	ナデ	4.5〜2.0	口縁頂部に刺突
66	〃	F−6		突帯文、刻目	ナデ	ナデ		
67	〃	E−2	深鉢？	沈線、縄文、刻目	ミガキ	ミガキ	1	元住吉山式、口縁部縄文帯を区画する
68	〃	I−2	浅鉢	凹線文、圧痕	ナデ	ナデ	5	内面スス付着
69	〃	E−4	浅鉢	縄文、刻目、重弧文	ナデ	ナデ	2〜3	外面スス付着
70	〃	G−2	鉢	擬縄文、沈線刻目、波状文	ミガキ	ミガキ カキ目	1	波状文は2枚貝使用か
71	〃	F−6	深鉢	押圧痕、刺突	板状 カキ目	ナデ		胴部の部に下方に向けて刺突を施す
72	〃	D−4	浅鉢		ナデ	ミガキ		口縁部外面にハケ目状細線条痕
73		G−2	浅鉢？		ヘラナデ	ヘラナデ		外面全体にスス痕厚く付着
74		G−2	浅鉢		やや粗い ミガキ	ミガキ		外面スス付着
75	14	B−5	鉢		ナデ	ナデ		外面全体にスス付着

第9表　第Ⅱ調査区出土縄文土器観察表

分類＼底径(cm)	第Ⅰ調査区 ～4.9	5.0～5.4	6.5～7.9	8.0～9.4	9.5～10.9	11.0～12.4	12.5～13.9	14.0～	合計	第Ⅱ調査区 ～4.9	5.0～5.4	6.5～7.9	8.0～9.4	9.5～10.9	11.0～	合計
平底	1		2	18	6	1		1	29	1	4	9	2		1	17
凹底										3	7	4	2			16
上げ底			2	4	1				7	2	6	3		1		12
高台			1	2	1	1			5							
丸底	2								2							
合計	3		5	24	8	2		1	43	6	17	16	4	1	1	45

第10表　縄文土器底部調査区別比較表

ン状突起である。突帯文出現期前後と思われる。

その他の土器（第43図57、60、72、74）　57は沈線内に刺突文が加えられるもので、波状口縁と思われる。口縁部は内湾するが、彦崎KⅡ式の範疇であろうか。60は環状把手である。文様がほとんど施されないので時期不明だが、頸部が短いので彦崎KⅠ式ころであろうか。72、74は精製無文の土器である。晩期ではないと思われるが、確証はない。

2)　粗製土器底部

本調査区から出土した粗製土器底部は概ね底径が5.0cmから8.0cm、器厚は6.0mmから8.0mmで、第1調査区のものに比べ小型化している（第8表）。底部外面の形状は平底が最も多く、ついで上げ底、凹底の順となっている。凹底は底部外面が丁寧にナデられるものが多い。1は本調査区出土の底部中最も大型で器厚1.5cmを測る。胴部下方にクサビ形、あるいは長方形の刺突がみられる。

器種については鉢形土器、浅鉢に分類される。浅鉢は皿形の器形が多い。図化、写真撮影は一部にとどめ、第10表に出土数のみを記した。

2 石 器

1） 石 鏃（第45、46図）

前述したとおり石鏃の出土数は187点を数え、第16表に示すように主にC-6グリッド周辺及びF-3グリッドを中心とする広い範囲から出土した。形状、重量について概観すると全体では長さ1.2cm～1.6cm、重量は0.2g～0.4gのものが最も多く、次いで長さ1.6cm～2.0cm、重量0.4g～0.6gの石鏃が多い。多数を占めるグループのうち凹基無茎短身鏃と抉基無茎短身鏃との比率は1：1.6で抉の深い短身鏃の割合が多いようである。また最小重量は図93の0.11gで他に0.12gが（第45図6、45）2個確認された。石材は大多数が結晶片岩で黒曜石は8点とわずかであった。まれにチャート、粘板岩が含まれる。分類は石鏃の器形を基に次のように行った。

A類） 凹基無茎鏃

A類-①短身鏃（第45図1～44） 抉が比較的浅く脚間の長さに比べ身長があまり長くないもので1～17は横断面に示すようにひし形で薄く丁寧に仕上げられる。18～43は粗製が多く45は剥片を利用したと思われる。

A類-②長身鏃（第46図96～108） A類の長身型である。96～101は薄めに仕上げられる。102～108は厚手かやや雑な仕上げである。

B類） 抉基無茎鏃

B類-①短身鏃（第45図45～95、第46図187） 抉が深く入る短身鏃で45～58がA類同様丁寧な仕上げ59～95は断面が平坦でやや粗雑である。

B類-②長身鏃（第46図109～145、185、186） B類の長身鏃で109～117、119、127は断面形がひし形を呈し、概ね良好な仕上げであるがそのほかは粗雑品が多い。72、87は抉の形状から鍬型鏃とも呼ばれる石鏃である。

C型） 平基無茎鏃（第46図146～160、184） 抉をもたない三角形の石鏃をこのグループに入れた、断面形は平行四辺形状を呈するものが多い。

D類） 有段凹基無茎鏃（第46図161～164）

脚上部に段を有するロケット型の凹基無茎鏃で中部、関東地方では飛行機鏃の名称がある。出土数は少ないが成形は整っているものが多い。

E類） 尖基鏃（第46図165～170）

柳葉鏃とも呼ばれる石鏃でこれも出土数はわずかである。最大長は第46図166で3.2cmを測る。

F類） 五角鏃（第46図171～174）

本調査区では4点確認された、174は剥片を利用したと思われる。その他、180は円礫を薄く割って脚を作ったと思えるが石鏃という確証はない。

このように本調査区からは未製品から完成品まで多量に出土した、欠損した石鏃に脚が折損したものが多いことは先端部から作り、最終工程で脚を整えることを示しているかもしれない。なお第16表に本調査区出土の石鏃、石斧数及び細石刃岩質表を示した。細石刃は精査あるいは排土をふるいにかけて採取した剥片を結晶片岩と玄武岩

に分けて数えた数量で1m/mが剥片4個に当たる。このように多量の剥片を伴って石鏃が出土したことは本調査区が石鏃の製作工房である可能性が高いことを示しており、黒曜石の石鏃数についても剥片数とほぼ比例していると思われる。なお、石鏃の石材は安山岩とも思えたが三浦清氏に肉眼鑑定を依頼したところ、ホルンクェルス化した結晶片岩であるとの報告を得たので付記する。

2) 石斧（第47、48図）

第16表に示したとおり、本調査区では石鏃とともに打製石斧も多数出土した。石材は玄武岩であり、この石屑も多量に検出された。ところで玄武岩は当地にはみられず近辺では横田町で産出する。石核と思われる玄武岩の岩塊が礫状で出土しているため斐伊川で流出による石材の利用が考えられる。

出土した石斧は石鏃出土とほぼ同一レベルにあったため、製作時期はほぼ同じとみられる。また出土位置についてはB-5グリッドとその周辺、E-4グリッドとその周辺、F-2グリッドとその周辺に大別でき、石鏃出土位置とはやや異なるようである。分類は石斧の形状から短冊形、撥形、石篦形に分け一覧表に記した。

また土壙外から出土した石斧のうち11点は図化、写真を省略し一覧表の記載のみとした。

3) 石錘（第49図）

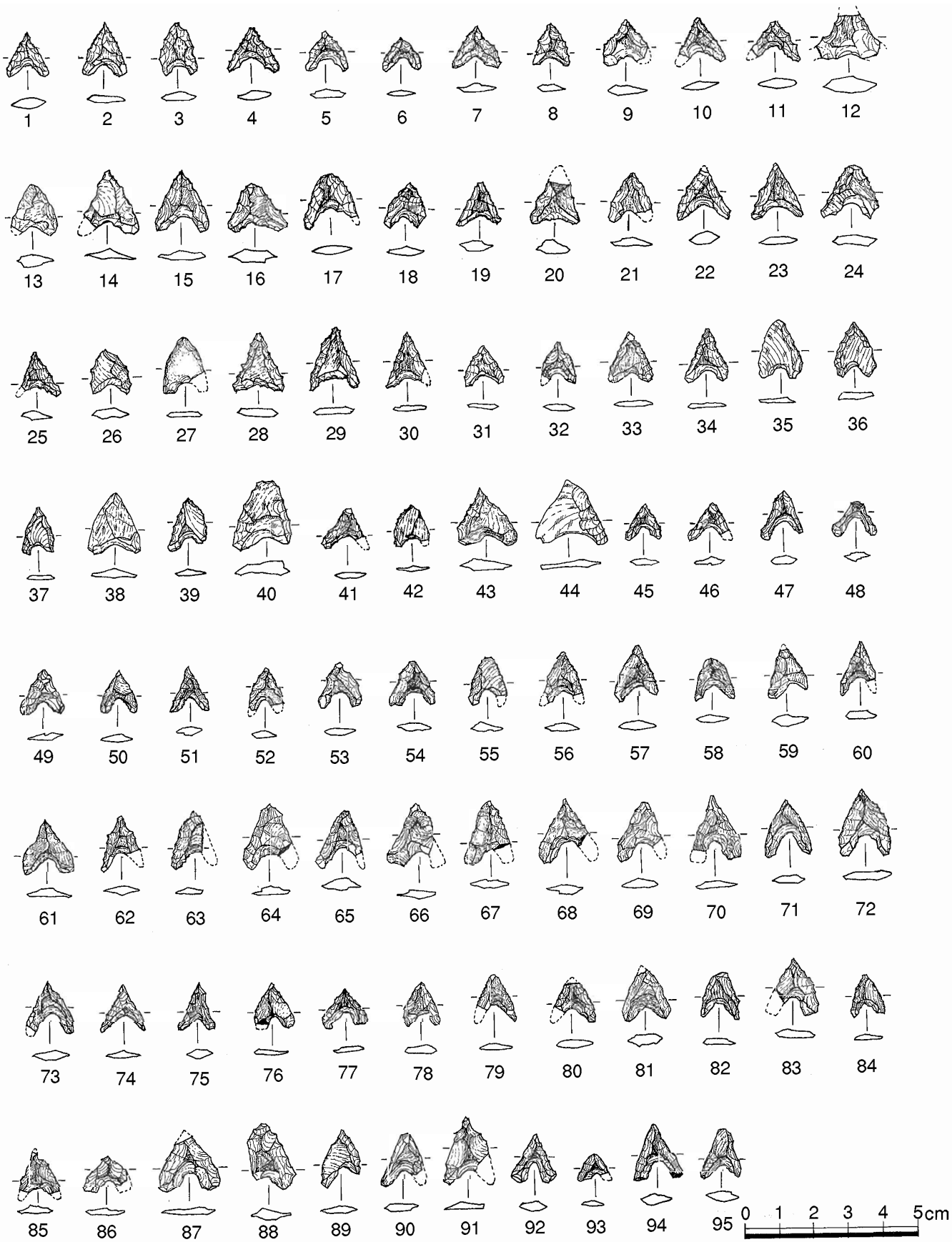
本調査区から出土した石錘は51点で内訳は打欠き石錘が35点、切目石錘が14点、他に土錘が1点あった。C-7グリッドから出土した石錘のうち7個の切目石錘は切目の方向に連続性がみられ、一見つながっているような状態で出土した。図化、写真は打欠きの一部と切目石錘、土錘にとどめ、その他は省略した。

3 その他の遺物（第50図）

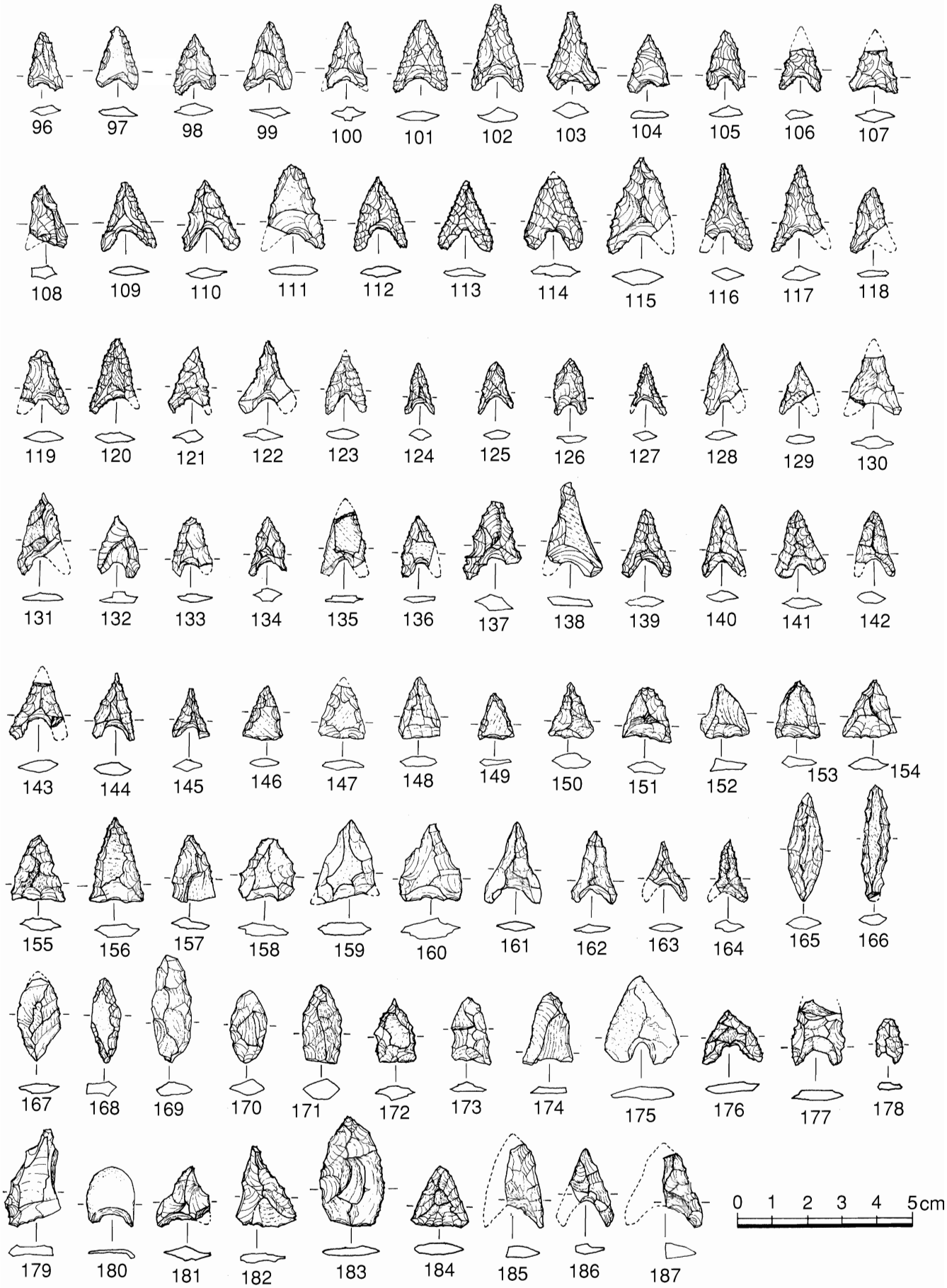
図1～4は石錐である。1は黒曜石で2は頁岩、3、4は結晶片岩と思われる。5は頁岩の削器である。6は長さ3.1cm、幅9m/mを測り、上下片方に2条と3条の線刻を入れる小礫で使途は不明である。7は耳環で石材は滑石である。8はX字状に研磨された異形石器である。頓原町神原Ⅱ遺跡でも近似する石器が出土している。9は石鏃を製作したと思われる結晶片岩の石核である。図の上方から立て剥ぎをした残りと思われる。10は玄武岩で石斧の石核と考えられる。11は削器、12は流紋岩の石篦状石器で片面は研磨されている。13は細粒凝灰岩で石核と思われる。おそらく石鏃の石材と考えられる。14、15は排土中から検出された弥生土器で拡張口縁をもつ壷である。口縁の形態からV-1様式にあたり、弥生時代中期後半の土器と思われる。16は磨石であるが中央部に凹があり敲打用の作業台にされた敲石（たたき）と思われる。18は球形の台石で3か所に研磨された平面があり、1か所敲打されたと思われる痕がある。19～22は台石と思われる。23は玄武岩の台石である。欠けている一部は石斧の作製にも利用されたのであろうか。24は花崗閃緑岩で35.5kgを測る。

第3節 遺 物

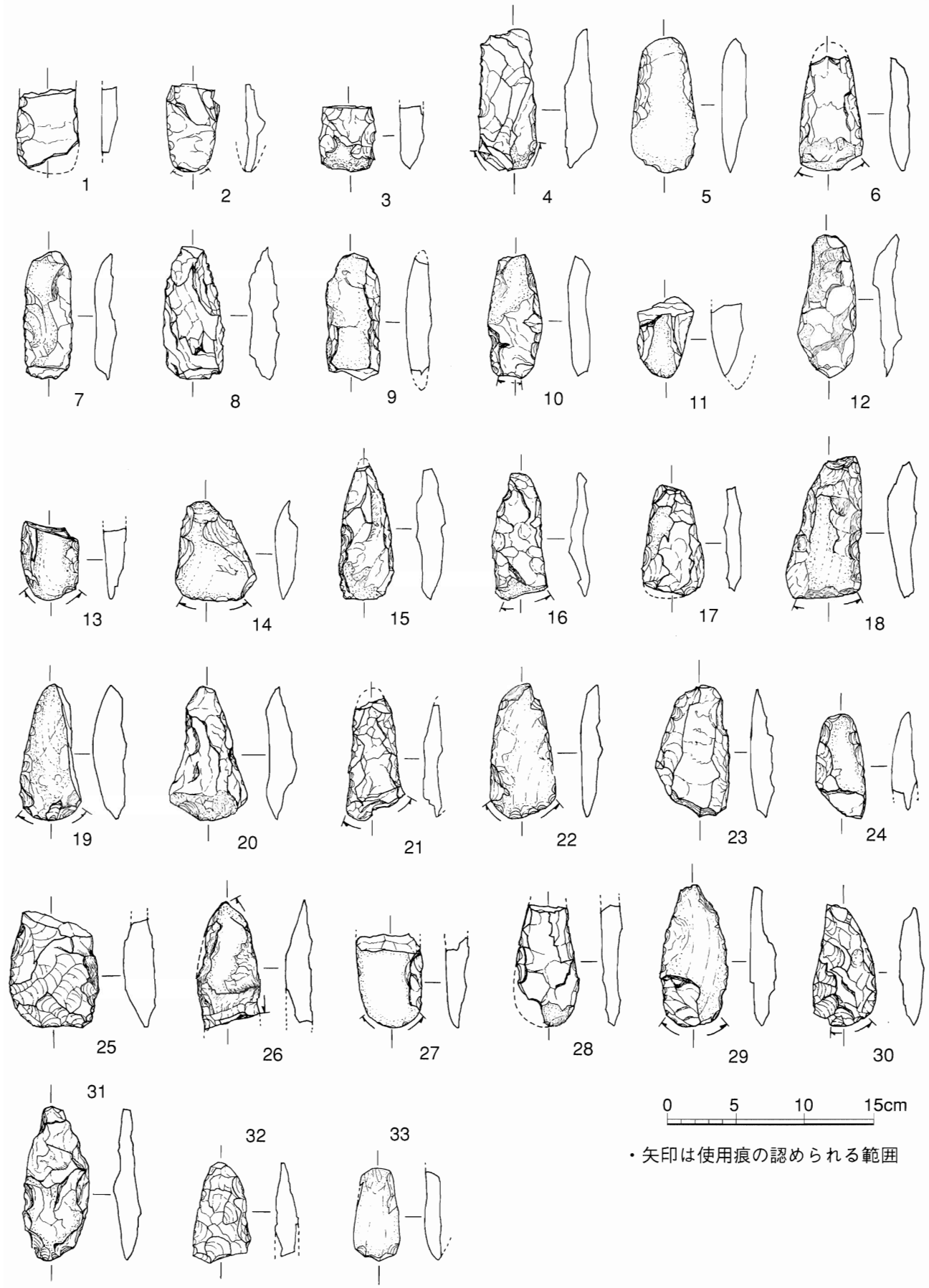
第Ⅱ調査区から出土した遺構に伴わない遺物については縄文土器片、石鏃、石斧、石錘等である。



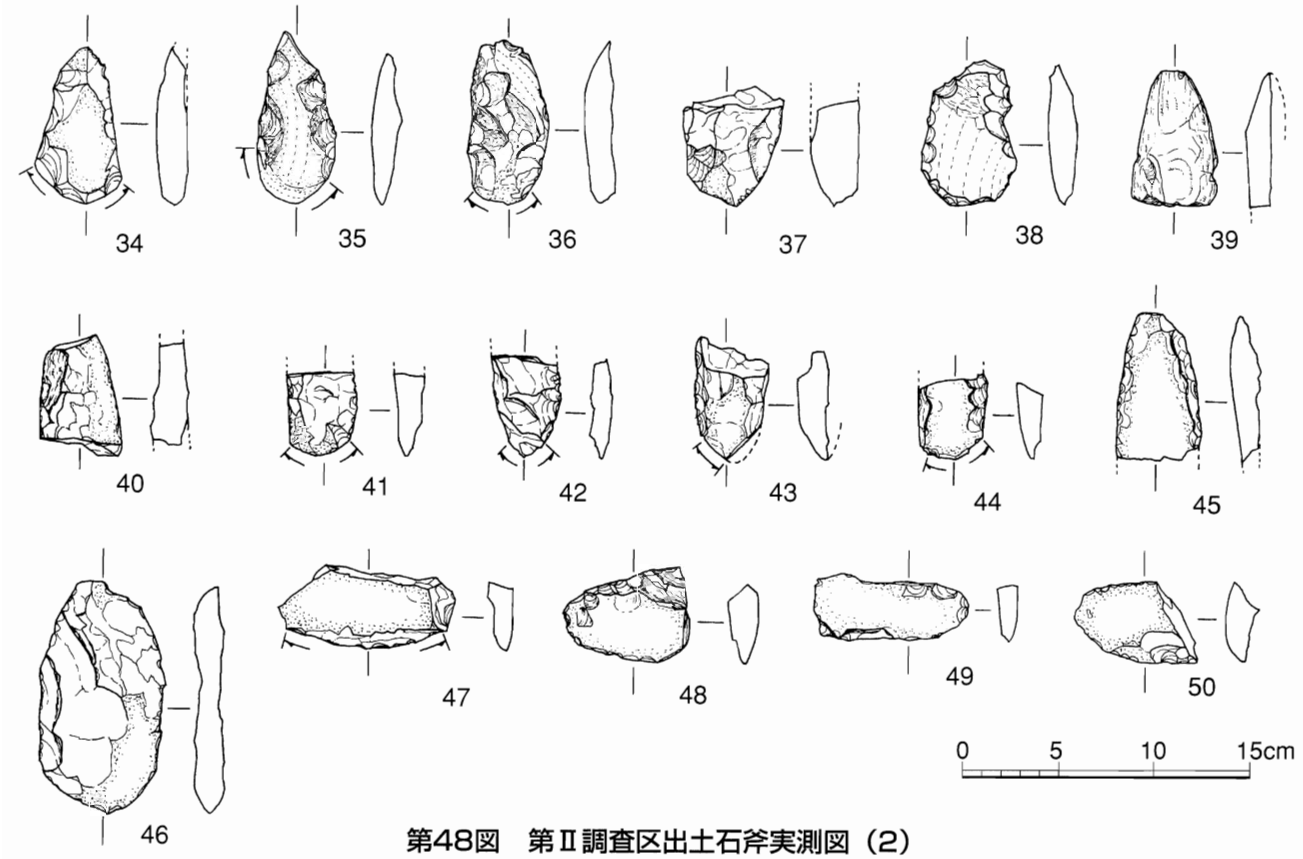
第45図　第Ⅱ調査区出土石鏃実測図(1)



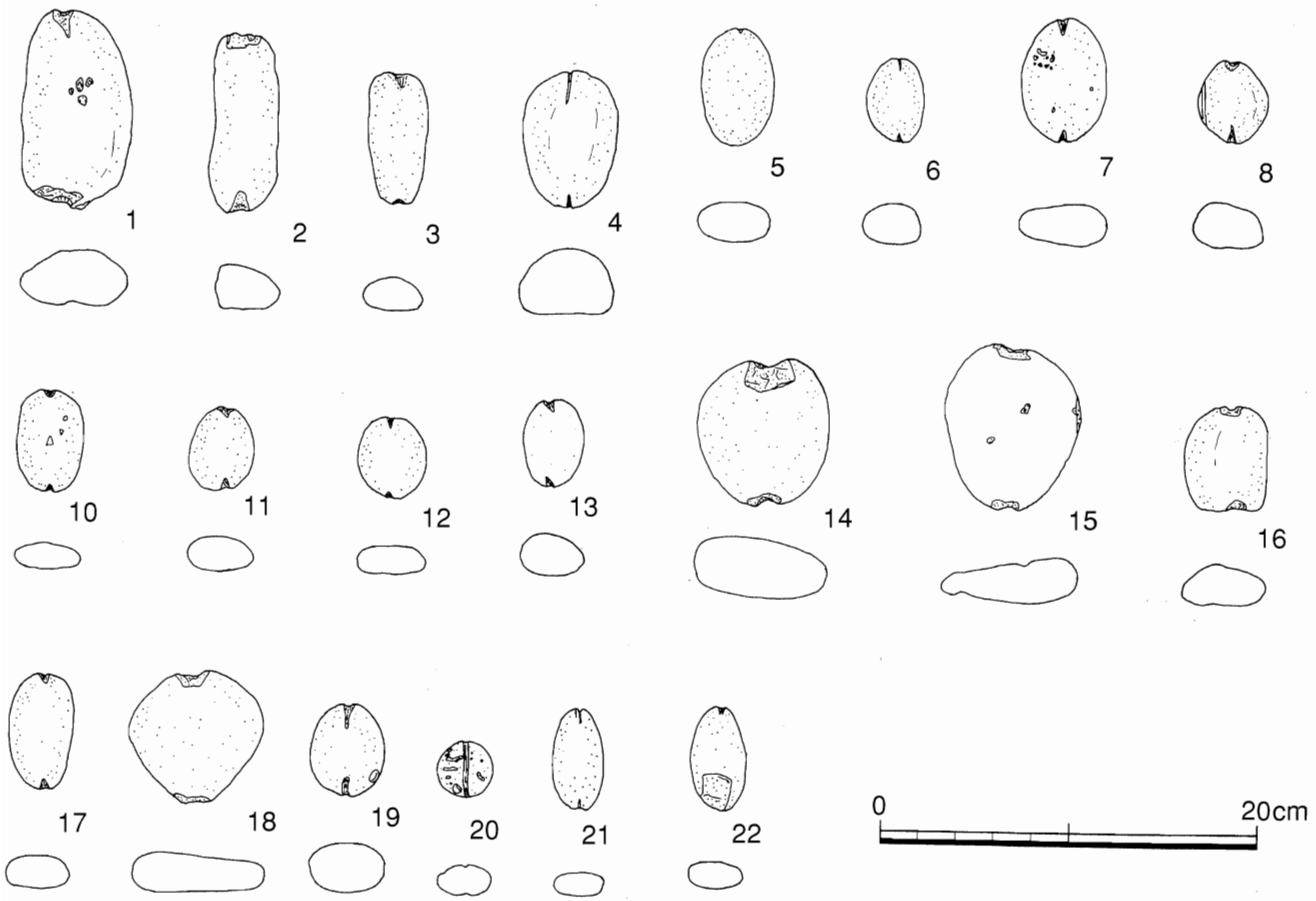
第46図　第Ⅱ調査区出土石鏃実測図(2)



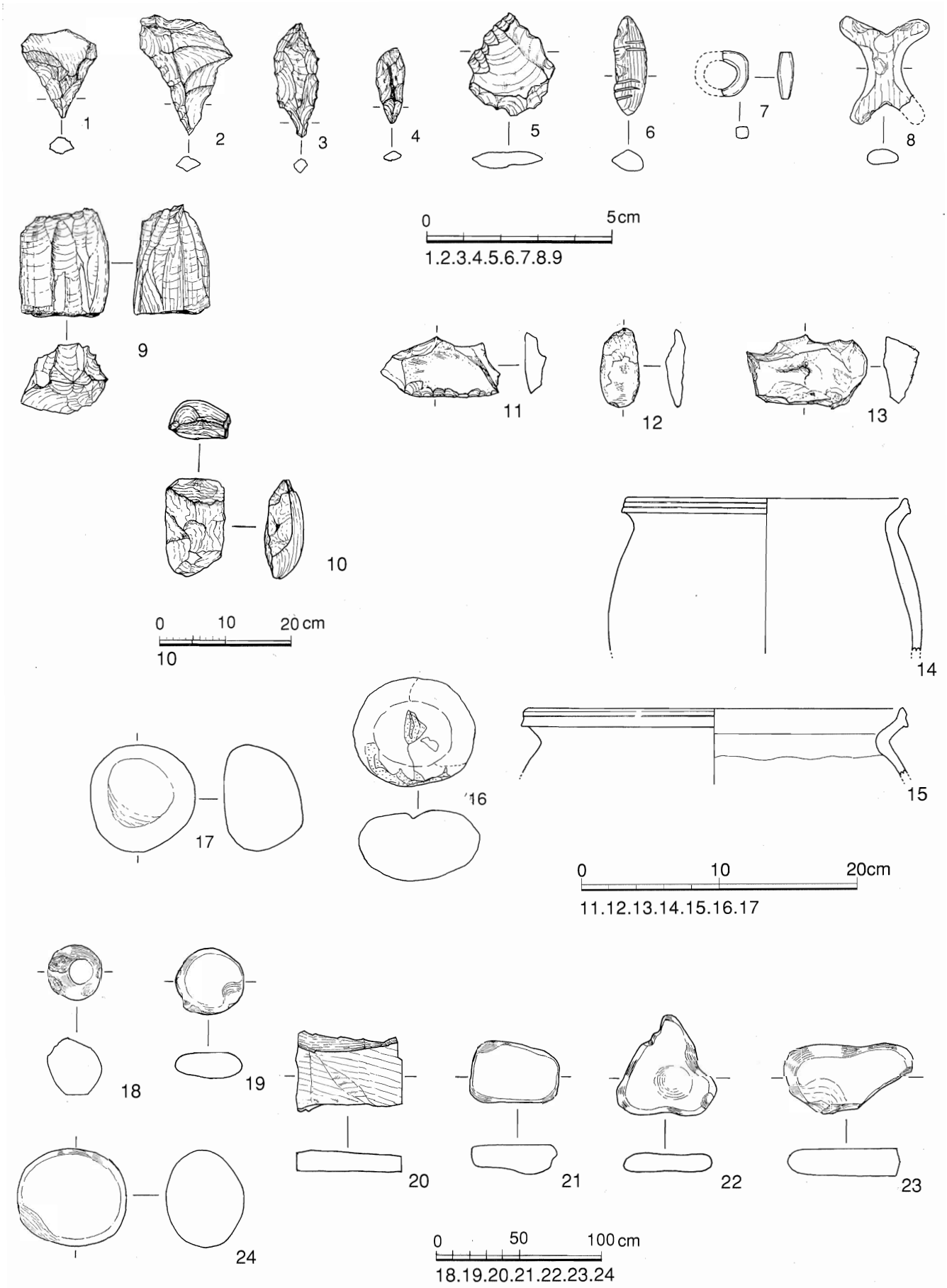
第47図　第Ⅱ調査区出土石斧実測図（1）



第48図　第Ⅱ調査区出土石斧実測図（2）



第49図　第Ⅱ調査区出土石錘実測図



第50図　第Ⅱ調査区出土石器・土器実測図

挿図番号	形　状	材　質	長さ×幅 (cm) ( )は推計	重　量 (g)	出土地区	取上No	備　考
45－1	凹基無茎（短身）	結晶片岩	1.3×1.2	0.45	C—6	No.144	
2	〃	〃	1.6×1.3	0.42	C—3	No.6	
3	〃	〃	1.6×1.1	0.41	D—4	No.4	
4	〃	〃	1.3×1.5	0.32	E—3		丁寧な整形
5	〃	〃	1.1×1.2	0.21	B—5	No.8	
6	〃	〃	1.0×1.1	0.12	B—4	No.15	
7	〃	〃	1.3×1.5	0.30	C—4	No.9	
8	〃	〃	1.2×1.0	0.24	F—2		
9	〃	〃	1.4×(1.5)	0.36	E—2	No.54	脚部欠損
10	〃	〃	1.4×(1.5)	0.28	I—2	No.107	〃
11	〃	チャート	1.2×(1.6)	0.38	E—1	No.9	〃
12	〃	結晶片岩	(1.5)×(2.5)	1.05	H—1	No.1	頭部、脚部欠損
13	〃	〃	1.5×(1.4)	0.58	D—8		脚部欠損
14	〃	〃	1.9×(1.6)	0.55	C—6	No.6	〃
15	〃	〃	1.8×1.6	0.50	F—3	No.22	
16	〃	〃	1.4×1.8	0.65	B—7	No.100	
17	〃	〃	1.5×1.5	0.49	C—6	No.11	脚部欠損
18	〃	〃	1.4×1.2	0.32	E—6	No.2	〃
19	〃	〃	1.4×1.4	0.33	E—4		
20	〃	〃	(1.8)×1.4	0.71	G—5		頭部欠損
21	〃	〃	1.5×(1.3)	0.32	G—5	No.1	脚部欠損
22	〃	チャート	(1.4)×1.5	0.50	C—4	No.13	頭部欠損
23	〃	結晶片岩	1.6×1.5	0.44	D—5	No.126	
24	〃	〃	1.5×1.5	0.70	F—2		
25	〃	〃	1.3×(1.3)	0.25	D—5	No.124	脚部欠損
26	〃	〃	1.3×1.2	0.35	C—7	No.103	
27	〃	〃	1.62×(1.3)	0.30	F—3		脚部欠損
28	〃	〃	1.7×1.5	0.56	G—6	No.114	丁寧な仕上げ
29	〃	〃	1.8×1.5	0.45	B—6	No.6	
30	〃	〃	1.6×(1.3)	0.22	I—4	No.4	脚部欠損
31	〃	〃	1.2×1.1	0.17	E—5		
32	〃	〃	1.1×(1.0)	0.24	B—7	No.112	脚部欠損

第11表　第Ⅱ調査区石鏃一覧表（(　)内は推計値）

挿図番号	形　状	材　質	長さ×幅(cm) ( )は推計	重　量 (g)	出土地区	取上No	備　考
45－33	凹基無茎 (短身)	結晶片石	1.5×1.3	0.29	G—4	No.103	
34	〃	〃	1.5×1.2	0.21	C—6	No.12	
35	〃	〃	1.7×1.3	0.40	A—5	No.112	粗製
36	〃	〃	1.6×1.2	0.45	B—6	No.4	
37	〃	〃	1.4×0.9	0.20	B—6	No.141	
38	〃	〃	1.8×1.5	0.53	D—6	No.112	
39	〃	〃	1.5×1.1	0.25	H—4	No.1	
40	〃	〃	2.1×1.7	1.00	E—4		仕上げやや雑
41	〃	〃	1.2×(1.4)	0.15	F—2		
42	〃	〃	1.2×1.1	0.19	H—3	No.104	粗製
43	〃	〃	1.7×1.7	0.75	C—5	No.125	粗割製
44	〃	〃	1.8×2.1	0.85	C—5	No.145	剥片利用粗製
45	抉基無茎 (短身)	結晶片石	1.0×1.0	0.12	B—7	No.113	
46	〃	〃	1.1×(1.2)	0.18	C—4	No.123	脚部欠損
47	〃	〃	1.5×1.3	0.24	B—6	No.5	仕上げやや雑
48	〃	〃	1.0×1.3	0.17	C—6	No.121	頭部欠損、大きく抉が入る
49	〃	〃	1.3×1.3	0.25	I—4	No.116	脚部欠損
50	〃	〃	1.3×1.1	0.15	D—3	No.132	
51	〃	〃	1.3×1.0	0.22	F—4	No.5	
52	〃	〃	(1.5)×1.0	0.16	C—6	No.9	頭部、脚部欠損
53	〃	〃	1.4×1.3	0.26	B—5		
54	〃	〃	1.3×1.3	0.30	C—5		頭部、脚部欠損
55	〃	〃	1.4×(1.2)	0.28	G—3	No.6	脚部欠損
56	〃	〃	(1.6)×(1.3)	0.30	H—5	No.12	〃
57	〃	〃	1.6×1.3	0.31	E—6	No.2	
58	〃	〃	1.3×1.2	0.30	B—5	No.150	
59	〃	〃	1.4×1.2	0.37	E—2	No.51	頭部、脚部欠損
60	〃	〃	1.6×(1.1)	0.27	B—7	No.103	脚部欠損
61	〃	〃	1.6×1.4	0.37	C—4	No.14	
62	〃	〃	1.6×(1.2)	0.26	G—4	No.6	脚部欠損
63	〃	〃	1.3×(1.7)	0.27	G—3	No.5	〃
64	〃	〃	2.4×(1.5)	0.47	F—5		〃

挿図番号	形　状	材　質	長さ×幅 (cm) ( )は推計	重　量 (g)	出土地区	取上No	備　考
45－65	抉基無茎（短身）	結晶片岩	1.7×(1.4)	0.36	G—1	No.10	脚部欠損
66	〃	〃	1.9×(1.8)	0.44	H—1	No.103	〃
67	〃	〃	1.8×(1.4)	0.52	H—1	No.1	〃
68	〃	〃	1.8×(1.7)	0.41	E—2		〃
69	〃	〃	1.7×(1.5)	0.38	D—4	No.5	〃
70	〃	〃	1.9×(1.5)	0.40	E—4	No.12	〃
71	〃	〃	1.7×1.4	0.24	G—4	No.3	
72	〃	〃	1.9×1.3	0.56	D—6		
73	〃	〃	1.5×(1.4)	0.28	D—4	No.126	脚部欠損
74	〃	〃	1.4×1.3	0.20	C—5	No.145	丁寧な仕上げ
75	〃	〃	1.4×1.0	0.22	B—7	No.110	
76	〃	〃	1.3×1.1	0.18	B—4	No.10	脚部欠損
77	〃	〃	1.1×1.3	0.17	G—5	No.11	
78	〃	〃	1.3×1.0	0.22	D—5	No.127	
79	〃	〃	1.4×(1.2)	0.20	G—1	No.15	脚部欠損
80	〃	〃	(1.3)×(1.3)	0.23	B—4	No.118	頭部、脚部欠損
81	〃	〃	(1.6)×1.3	0.53	G—5		頭部欠損
82	〃	〃	1.4×1.1	0.27	B—7	No.104	
83	〃	〃	1.7×(1.6)	0.42	D—4	No.4	脚部欠損
84	〃	〃	1.2×0.9	0.15	D—7		
85	〃	〃	(1.5)×(1.2)	0.29	C—6	No.10	頭脚欠損
86	〃	〃	1.5×(1.4)	0.22			脚部欠損
87	〃	〃	(1.8)×1.8	0.60	H—1	No.2	頭部欠損
88	〃	〃	1.9×1.4	0.66	G—4		
89	〃	〃	1.6×1.1	0.29	F—3	No.21	粗製
90	〃	〃	1.6×(1.2)	0.31	F—3	No.42	脚部欠損
91	〃	〃	2.0×(1.6)	0.46	G—4		〃
92	〃	黒曜石	1.4×1.2	0.31	A—6	No.129	丁寧な仕上げ
93	〃	〃	0.8×(1.0)	0.11	B—7	No.109	脚部欠損
94	〃	白色チャート	1.7×1.4	0.38	E—1	No.12	
95	〃	チャート	1.4×1.1	0.39	H—4	No.3	
46－96	凹基無茎（長身）	結晶片石	1.6×1.0	0.36	B—7	No.102	脚部欠損

指図番号	形　状	材　質	長さ×幅(cm) ( )は推計	重　量 (g)	出土地区	取上No	備　考
46－97	凹基無茎 (長身)	結晶片岩	1.8×1.2	0.38	E—6	No.3	
98	〃	〃	1.8×1.2	0.51	G—3	No.7	
99	〃	〃	2.1×1.3	0.52	F—4	No.8	脚部欠損
100	〃	〃	(2.0)×(1.4)	0.67	C—6	No.116	〃
101	〃	〃	2.1×1.4	0.67	B—5		
102	〃	〃	2.5×1.5	1.01	O—7	No.100	丁寧な仕上げ
103	〃	〃	2.2×1.5	1.32	A—5	No.2	頭部、脚部欠損
104	〃	〃	1.6×1.2	0.39	D—7	No.100	脚部欠損
105	〃	〃	1.6×1.1	0.46	O—6	No.108	粗製
106	〃	〃	(1.9)×1.2	0.28	C—6	No.7	頭部欠損
107	〃	〃	(1.8)×1.3	0.52	F—2		〃
108	〃	〃	1.8×(1.2)	0.47	F—5		粗製頭部欠損
109	抉基無茎 (長身)	〃	1.9×1.5	0.55	B—4	No.17	丁寧な仕上げ
110	〃	〃	2.1×1.5	0.69	O—4	No.100	
111	〃	〃	2.5×(1.8)	1.12	B—3		脚部欠損
112	〃	〃	2.2×1.5	0.65	F—4	No.5	丁寧な仕上げ
113	〃	〃	2.0×1.5	0.30	F—3		
114	〃	〃	(2.3)×1.6	0.94	D—4	No.127	頭部欠損
115	〃	〃	2.8×(1.9)	1.65	F—2		脚部欠損
116	〃	〃	2.5×(1.5)	0.82	E—5	No.5	丁寧な仕上げ、脚部欠損
117	〃	〃	2.5×(1.7)	0.78	F—2	No.42	脚部欠損
118	〃	〃	1.9×(1.3)	0.32	E—2	No.2	〃
119	〃	〃	1.9×(1.4)	0.54	I—4		〃
120	〃	〃	2.1×(1.5)	0.67	H—1		〃
121	〃	〃	2.0×(1.3)	0.45	B—5	No.8	〃
122	〃	〃	2.1×(1.6)	0.63	G—5	No.4	〃
123	〃	〃	(1.9)×1.2	0.46	G—3	No.10	頭部欠損
124	〃	〃	1.4×0.8	0.27	C—6	No.122	
125	〃	〃	1.5×1.0	0.31	E—5	No.7	
126	〃	〃	1.7×0.9	0.36	T—7・8間		
127	〃	〃	1.5×(1.0)	0.19	D—6	No.150	脚部欠損
128	〃	〃	2.0×(1.2)	0.35	F—4	No.10	〃

挿図番号	形　状	材　質	長さ×幅 (cm) ( )は推計	重　量 (g)	出土地区	取上No	備　考
46－129	抉基無茎（長身）	結晶片岩	1.5×(1.1)	0.25	H—3	No.3	頭部、脚部欠損
130	〃	〃	(2.3)×(1.7)	0.76	H—1		〃
131	〃	〃	2.3×(1.5)	0.49	H—3		脚部欠損
132	〃	〃	1.7×1.2	0.49	B—7	No.108	粗製
133	〃	チャート	1.7×1.2	0.37	D—7	No.103	
134	〃	結晶片岩	1.7×1.0	0.46	D—5	No.12	
135	〃	〃	(2.3)×(1.3)	0.48	D—6		頭部、脚部欠損
136	〃	〃	2.8×(1.1)	0.29	E—5		脚部欠損
137	〃	〃	2.2×1.6	0.95	F—1	No.22	粗製脚部欠損
138	〃	〃	2.6×(1.7)	1.09	D—1	No.11	脚部欠損、未完成品
139	〃	黒曜石	2.0×1.3	0.49	F—3	No.127	丁寧な仕上げ
140	〃	〃	2.1×1.2	0.42	F—2	No.47	〃
141	〃	〃	1.9×1.4	0.60	A—2	No.3	
142	〃	〃	1.8×(1.2)	0.41	E—4		脚部欠損
143	〃	〃	(2.2)×(1.7)	0.69	D—2	No.33	頭部、脚部欠損
144	〃	〃	1.9×1.2	0.65	D—6	No.113	
145	〃	〃	1.4×1.0	0.32	O—3	No.100	
146	平基無茎	結晶片石	1.6×1.1	0.45	I—5	No.1	丁寧な仕上げ
147	〃	〃	(1.7)×1.3	0.53	G—5		丁寧な仕上げ、頭部欠損
148	〃	〃	1.8×1.2	0.58	G—6	No.115	
149	〃	〃	1.3×1.0	0.21	H—6		
150	〃	〃	1.6×1.3	0.79	F—5	No.6	
151	〃	〃	1.5×1.4	0.67	F—6	No.108	
152	〃	〃	1.5×1.4	0.54	F—2		粗略製
153	〃	〃	1.6×1.3	0.72	G—5		
154	〃	〃	1.7×1.5	0.68	G—5	No.3	
155	〃	〃	1.9×1.5	0.81	G—6	No.1	
156	〃	〃	2.4×1.6	1.22	F—5		
157	〃	〃	1.9×1.3	0.78	C—6	No.8	粗製
158	〃	〃	1.8×1.6	1,02	E—4		〃
159	〃	〃	(2.4)×(1.9)	1.21	D—5	No.143	基部欠損
160	〃	〃	2.2×1.8	2.03	E—2		粗製

挿図番号	形　状	材　質	長さ×幅 (cm) ( )は推計	重　量 (g)	出土地区	取上No	備　考
46－161	有段凹基無茎	結晶片岩	2.4×1.6	0.57	H—2	No.3	
162	〃	〃	2.1×1.3	0.56	H—3		
163	〃	〃	1.7×(1.2)	0.21	E—3		脚部欠損
164	〃	黒曜石	1.8×(1.1)	0.27	G—3	No.10	〃
165	尖基	結晶片岩	3.1×1.0	0.91	D—3	No.20	
166	〃	〃	3.2×0.8	1.02	F—4	No.4	
167	〃	〃	(2.6)×1.2	1.20	F—4	No.9	
168	〃	チャート	2.5×0.9	0.92	F—1	No.25	
169	突基	片麻岩	3.1×1.0	1.96	F—3		
170	〃	結晶片岩	2.1×1.0	0.96	G—3		
171	〃	〃	2.2×1.1	1.62	E—3		茎欠損
172	五角形	〃	1.8×1.2	0.72	E—7	No.100	
173	〃	〃	1.9×1.7	0.56	E—5		
174	〃	〃	2.1×1.5	0.55	E—2	No.100	粗製
175	その他	粘板岩	2.5×2.1	1.82	B—4	No.16	ハート型
176	〃	結晶片岩	1.5×1.7	0.43	G—5	No.2	鍬型鏃
177	〃	〃	(1.9)×1.5	0.82	I—4	No.116	頭部欠損
178	〃	〃	1.3×0.8	0.23	H—6	No.2	粗製
179	〃	〃	2.8×1.6	1.37	H—1		〃
180	〃	流紋岩	1.7×1.4	0.38	H—3		円礫剥片利用か
181	〃	結晶片岩	1.7×(1.5)	0.82	G—4		脚部欠損、未完成品
182	〃	〃	2.3×1.6	0.90	A—6	No.112	未完成品
183	〃	〃	3.2×1.9	2.14	E—2		粗製
184	平基無茎	〃	1.7×1.6	0.77	G—5		
185	抉基無茎（長身）	〃	(2.7)×(1.7)	0.85	G—1		横半欠損
186	凹基無茎（短身）	〃	2.3×(1.6)	0.44	F—2		脚部欠損
187	抉基無茎（短身）	〃	(2.4)×(2.2)	0.54	F—2		横半欠損

挿図番号	図版番号	出土地区	形　状	長さ (cm)	幅 (cm)	重　量 (g)	材　質	備　考
1	17	A-5	短冊形	6.0	4.5	45	玄武岩	両端部欠損、片刀磨研
2	〃	A-5	〃	6.5	4.0	40	〃	刃先
3	〃	B-6	〃	5.0	4.0	55	〃	刃部、長方形型
4	〃	B-5	〃	11.0	5.0	130	〃	上部欠損
5	〃	D-5	〃	10.0	5.5	110	〃	片刃磨研
6	〃	D-5	〃	8.5	5.0	85	〃	
7	〃	E-5	〃	10.0	3.5	75	〃	片刃磨研、長方形型
8	〃	E-5	〃	10.5	4.5	120	〃	
9	〃	F-3	〃	9.5	4.0	105	〃	片刃磨研
10	〃	F-2	〃	9.5	4.5	75	〃	
11	〃	G-2	〃	6.0	4.0	50	〃	片刃磨研、刃部
12	〃	I-3	〃	11.5	4.0	80	〃	
13	〃	I-3	〃	6.0	4.5	55	〃	片刃磨研、刃部
14	〃	A'-6	撥形	8.0	6.0	85	〃	片刃磨研、(分銅型)
15	〃	A-7	〃	10.5	4.0	100	〃	
16	〃	B-8	〃	10.0	4.0	60	〃	
17	〃	B-4	〃	8.5	4.5	55	〃	
18	〃	C-4	〃	11.0	5.5	145	〃	片刃磨研
19	〃	C-3	〃	10.5	4.5	125	〃	
20	〃	D-5	〃	10.5	6.0	115	〃	
21	〃	D-2	〃	9.5	4.4	70	〃	
22	〃	E-5	〃	10.5	5.0	100	〃	
23	〃	E-5	〃	10.0	5.5	125	〃	片刃磨研、刃部欠損
24	〃	E-7	〃	8.0	4.0	55	〃	片刃磨研、刃部欠損
25	〃	F-2	〃	9.0	7.0	195	流紋岩	
26	〃	F-2	〃	10.0	5.0	110	玄武岩	刃部欠損
27	〃	A'-6	石篦形	7.0	5.0	80	〃	片刃磨研先端U字状
28	〃	B-4	〃	9.0	4.5	70	〃	刃部欠損
29	〃	C-7	〃	11.0	5.0	105	〃	片刃磨研
30	〃	E-4	—	7.0	4.5	50	〃	片刃磨研、刃部
31	〃	E-4	〃	11.5	5.0	105	〃	
32	〃	F-1	〃	7.5	3.5	40	〃	刃部欠損

第12表　第Ⅱ調査区出土石斧一覧表

挿図番号	図版番号	出土地区	形　状	長さ (cm)	幅 (cm)	重　量 (g)	材　質	備　考
33	17	G-3	石篦形	7.5	3.5	40	玄武岩	片刃磨研
34	〃	G-4	〃	9.0	5.0	80	〃	片刃磨研、刃部
35	〃	H-2	〃	10.0	4.0	60	〃	片刃磨研、刃部、U字状
36	〃	I-3	—	9.0	4.5	75	〃	
37	〃	A-6	—	7.0	5.5	90	〃	刃先
38	〃	B-6	—	8.0	5.0	70	〃	片刃磨研、上部欠損
39	〃	C-5	—	7.5	4.5	70	片磨岩	片刃磨研
40	〃	D-2	—	6.5	4.5	70	玄武岩	両端部欠損
41	〃	D-5	—	4.5	4.0	40	〃	刃部
42	〃	E-3	—	5.5	3.5	30	〃	刃部
43	〃	E-4	石篦形	9.5	4.5	80	〃	
44	〃	E-4	—	4.5	4.0	30	〃	刃部
45	〃	E-5	—	8.0	4.5	70	〃	片刃磨研、刃部欠損
46	〃	G-2	—	12.5	7.0	180	〃	片刃磨研
47	〃	B-6	短冊形	9.5	4.0	75	〃	上部欠損
48	〃	D-3	—	6.5	5.0	70	〃	片刃磨研、刃部
49	〃	E-2	短冊形	8.0	3.5	50	〃	片刃磨研、上部欠損
50	〃	B-7	—	7.0	5.0	55	〃	片刃磨研、刃部
		A-7	短冊形	6.5	4.0	75	〃	両端部欠損
		B-5	〃	6.5	4.5	50	〃	上部欠損
		C-　4	撥形	9.0	4.5	65	〃	刃の部分欠損
		C-7	短冊形	7.5	3.5	45	〃	
		E-2	撥形	9.0	5.0	65	〃	片刃磨研、刃部欠損
		E-7	短冊形	6.0	4.5	30	〃	刃部欠損
		F-1	〃	9.5	4.5	80	〃	刃部欠損
		F-2	撥形	7.5	5.0	80	〃	両端部欠損
		G-2	短冊形	6.5	4.5	60	〃	刃部欠損
		H-3	撥形	9.0	6.0	70	〃	刃部欠損
		—	短冊形	7.0	5.0	90	〃	両端部欠損
31-4	19	C.D-6土壙	〃	11.0	4.5	110	〃	
33-1	〃	D-5土壙	〃	10.5	4.0	80	〃	
37-10	〃	E-4土壙	撥形	8.5	6.0	60	〃	

第12表　第Ⅱ調査区出土石斧一覧表

挿図番号	図版番号	グリッド	取上No	縦(cm)	横(cm)	形　状	重量(g)	材　質	備　　考
1	18	C－6	No2	10.2	5.9	長方形	254	玄武岩	打欠
2	〃	C－7	No101	9.2	3.9	長方形	142	黒雲母花崗岩	打欠
3	〃	B－5	No152	6.9	3.3	長方形	62	花　崗閃緑岩	切り目
4	〃	B－7	No103	7.3	4.9	その他	168	玄武岩	切り目
5	〃	C－3	No18	6.1	3.8	長方形	82	流紋岩	片方のみ切り目、楕円、未成品
6	〃	B－7	No104	4.5	3.1	長方形	40	花崗岩	楕円、切り目
7	〃	C－7	No109	6.5	4.8	長方形	98	玄武岩	切り目
8	〃	C－7	No106	4.5	3.8	正方形	50	流紋岩	切り目、片側面有溝
9	〃	C－7	No107	3.4	5.4	長方形	33	花崗岩	切り目
10	〃	C－7	No108	4.4	3.8	正方形	34	花崗岩	打欠
11	〃	C－7	No110	4.3	3.6	正方形	34	花　崗閃緑岩	切り目
12	〃	C－7	No111	4.5	3.3	長方形	50	玄武岩	隅丸、切り目
13	〃	E－4	No17	7.9	7.2	正方形	273	玄武岩	打欠
14	〃	F－3	No29	8.7	7.2	台　形	180	石　英閃緑岩	打欠
15	〃	F－3	No11	5.5	4.3	正方形	80	黒雲母花崗岩	打欠
16	〃	H－3	No7	6.2	3.3	長方形	60	玄武岩	楕円、切り目
17	〃	I－1	No101	7.0	7.1	正方形	145	玄武岩	打欠
18	〃	O－6	No110	3.9	4.9	正方形	60	花崗岩	切り目
19	〃	C－7	No115	2.9	2.9	正方形	16	流紋岩	切り目、有溝石錘
20	〃	C－7	No102	5.4	2.7	長方形	22	土　製	切り目、土錘
21	〃	D－6		5.6	3.0	長方形	34	玄武岩	

第13表　第Ⅱ調査区出土石錘一覧表

挿図番号	図版番号	器　種	出土地区	長さ(cm)	幅(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
1	18	石錐	B—5	2.4	2.0	1.88	黒曜石	
2	〃	〃	D—1	3.1	2.5	3.70	頁岩	
3	〃	〃	C—4	3.0	1.2	3.37	結晶片岩	
4	〃	〃	F—4	2.0	0.7	0.60	結晶片岩	
5	〃	削器		2.4	2.9	5.00	玄武岩	
6	〃	線刻礫	H—2	2.7	0.9	1.15	凝灰岩	幅0.7mmの線刻5条を表に施す
7	〃	耳環	B—7	1.3	0.6	0.60	滑石	1/2残存
8	〃	異形石器	A'—5	3.0	2.5	2.50	チャート	X状石器

第14表　第Ⅱ調査区出土石器・土器一覧表

挿図番号	図版番号	器　種	出土地区	長さ(cm)	幅(cm)	重　量(g)	材　質	備　　考
50－11	18	削器		8.7	4.6	68.0	玄武岩	石斧か
12	〃	石箆状石器		5.9	2.7	27.0	流紋岩	
13	〃	石核	G—2	8.5	5.1	116.0	細粒凝灰岩	
18	〃	台石	F—3	16.2	16.4	6kg	花崗岩	
19	〃	〃	F—2	20.0	22.0	4,9kg	黒雲母花崗岩	
9	〃	石核		3.0	2.4	17.5	結晶片岩	
10		〃	A—5	14.8	9.0	1.130	玄武岩	
16	18	磨石、凹石		9.0	8.1	513.0	砂岩	
17	〃	磨石	F—1	8.1	8.0	546.0	黒雲母花崗岩	
24	〃	〃	A'—7	29.8	11.9	35,5kg	花崗閃緑岩	
20	〃	台石	D—4	31.2	12.0	8,1kg	黒雲母花崗岩	
21	〃	〃	F— 3	25.8	19.0	7,5kg	花崗岩	
22	〃	〃	I—4	29.2	31.8	8,6kg	花崗閃緑岩	
23	〃	〃	A'—6	38.2	23.0	11,0kg	玄武岩	
挿図番号	図版番号	器　種	出土地区	口径(cm)	残存高(cm)	形　態	調　整	備　　考
14	18	甕	I—6	15.9	8.7	口縁内傾	ハケ目、ナデ	
15	〃	壺	G—6	22.5	3.2	口縁内傾	ナデ、ケズリ	

第14表　第Ⅱ調査区出土石器・土器一覧表

小結・まとめ

以上記したように本調査区からは多量の石鏃、打製石斧が剥片、細石屑を伴って出土した。遺物の章ではふれなかったが石器の製作にあたっては当然作業用の叩石なり台石が必要となろう、叩石こそみられなかったが本調査区では第23図の全体図にも示すように調査区全体から台石と思われる石が多数出土した。これは本調査区が石鏃、石斧の製作地であった可能性が高いことを裏づけるものといえる。時期としては出土した土器から縄文時代後期後葉と考えられる。なお、石鏃の製作跡が確認された例としては飯石郡頓原町の門遺跡があげられる。

本調査区ではまた8基の土壙を検出することができた。土壙は1基を除いて他は全て円形であり、まとまりがみられる。このうちE-7土壙内ではかなりまとまった有文土器が共伴した。土器は縄文時代後期後半から晩期初頭と思われ、他の土壙から出土した土器についても概ね同時期と考えられる。

第Ⅱ調査区では遺物包含層から軽石も検出された。大きさは2.0cm四方から5.4cm×4.0cmのものまで様々である。三瓶太平山降下火山灰の影響によるものであろうか。

本調査区で一つの課題となるのが石鏃・石斧製作と土壙との関連である。土壙内出土土器と周辺出土の土器（石鏃などと共伴）は形式的に同じであり、石鏃や石斧も土壙の上層から出土している。このことから土壙群が作られた後あるいはあまり遠くない時期にこの場所が石鏃、石斧の製作場所になったと考えることができる。あるいは土壙の中にはその上面が石鏃、石斧の製作場所となっていたものがあるかもしれない。

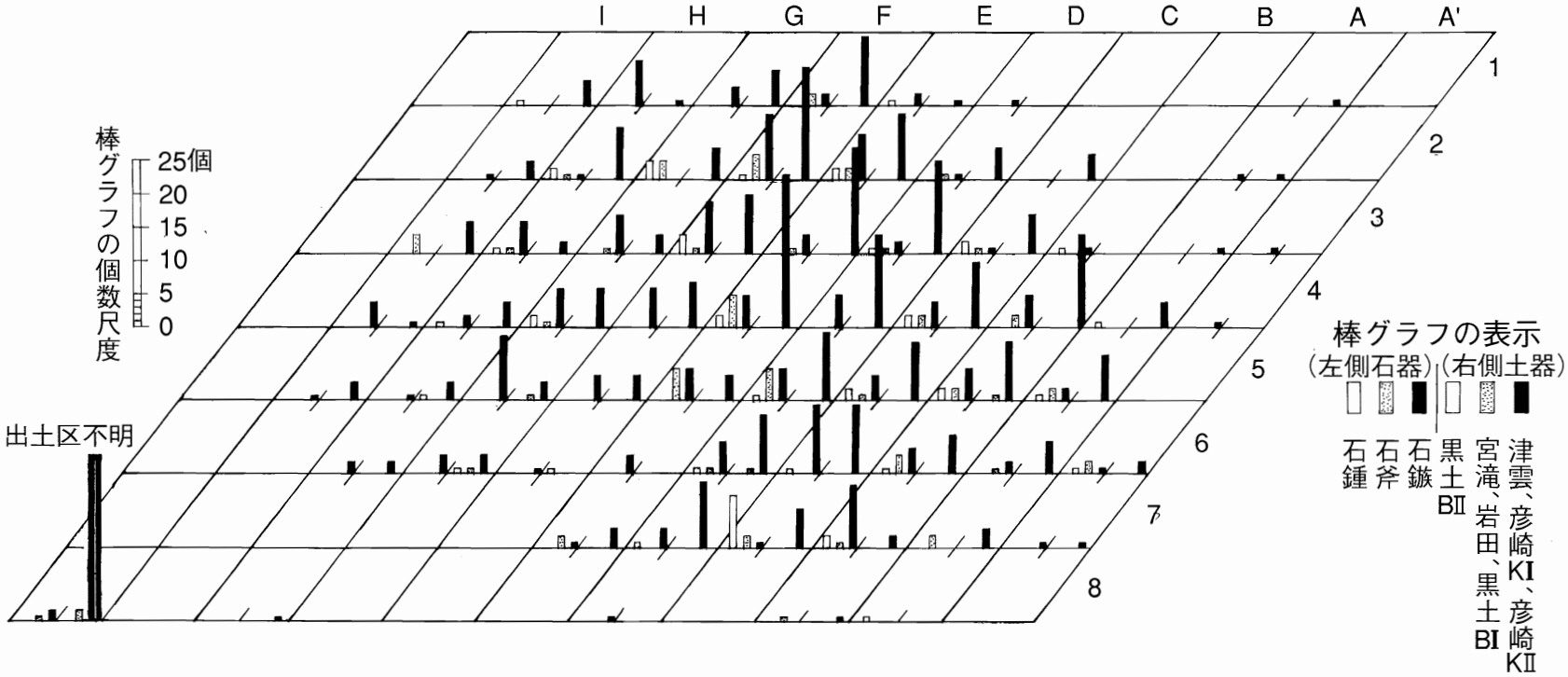
以上平田遺跡第Ⅰ調査区及び第Ⅱ調査区について調査の概要を記してみた。なお、すでに述べたように第Ⅰ調査区の土器の出土状況には注目されるものがあり、埋甕様のものと推定される。また破砕された磨製石斧やベンガラが付着したすり石の出土などは呪術的、祭祀的な儀式が行われたことを思いおこさせるものである。こうした遺構と関連のある遺物が同時に出土した例は珍しい。また、出土した土器には北部九州で行われた鐘ヶ崎式土器や福田貝塚の出土土器と酷似する浅鉢（第13図55～57）も出土している。前述したとおり奥出雲に縄文遺跡が多いことを考えるとこれらの土器も山陽から中国山地を越えて搬入されたことが考えられる。

同様に第Ⅱ調査区についても縄文時代の墓制の一端を知る貴重な資料が出土した。しかし遺物の遺存状態が悪く、十分な究明ができなかった。今後の同類例の報告を待ちたい。

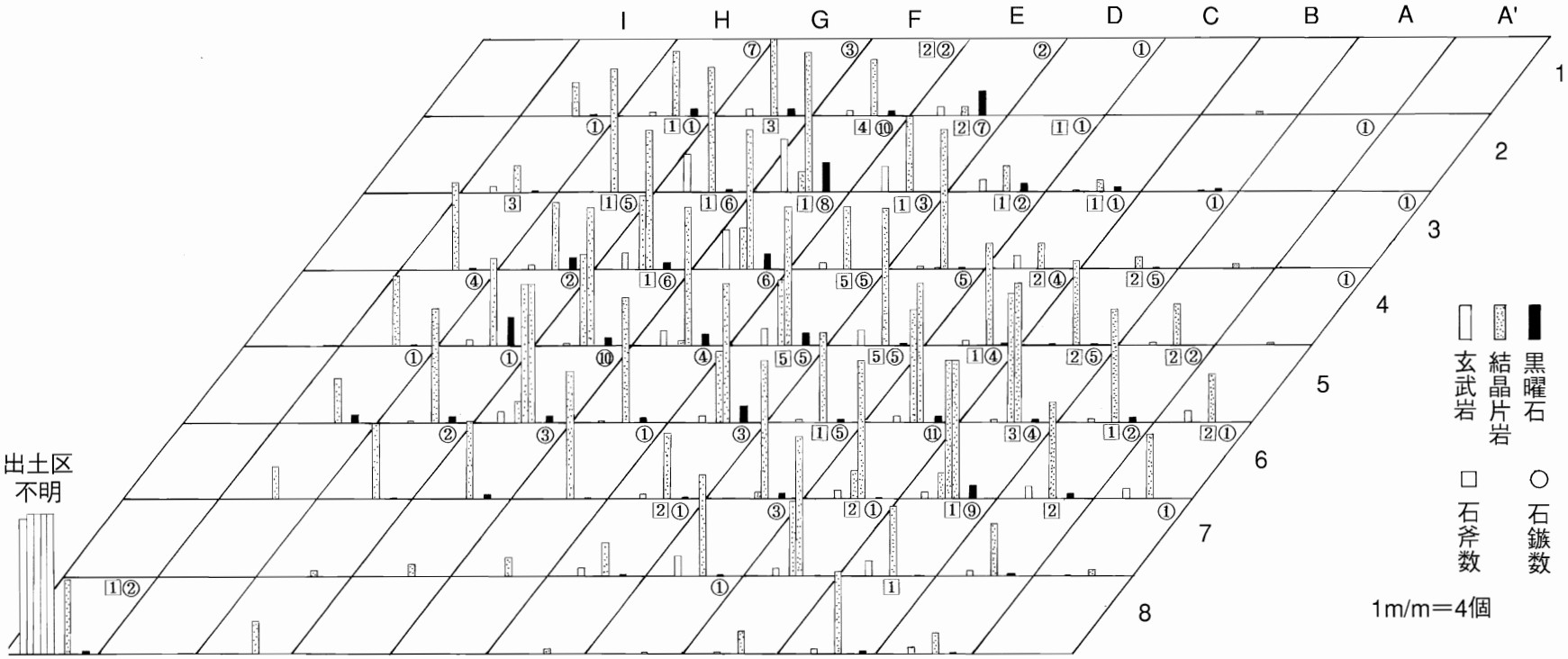
数量は重量を示す。　石錘形状　□＝正方形　○＝長方形　（）＝その他

I	H	G	F	E	D	C	B	A	A'	
	(160)	(95) (105)								0
□75 ○105 (60) (105)	□260 □95 ○50 ○90 ○170	□55 □65 □70 □80 □95 □95 ○60 ○85 ○150 (70) (60) (105) (120) (260)	□50 ○70	○115 (80) (100) (160)						1
	□80 □110 □120 □150 □160 ○120 ○120 ○170	□60 □100 □100 □100 ○100 ○110 ○190 (60)	□60 □70 □80 □85 □90 □140 □140 □165 □195 ○70 ○80 ○250 (65) (120)	□50 □65 ○205 (110)	□50 □60 □60 □85 □90 □170 □210 ○10 ○60 ○85 ○150 (30) (60) (180)	□110 □110 □120 □120 □210 ○75 ○115 ○150 (75) (100)	□80 □210 ○60 ○65 ○70			2
□75 □195 ○75	○110		□50 □75 ○110 (60) (95)		○95 ○115	□70 □85 □120	○90 ○95 ○100			3
					□150	○240	□60 □80			4
									□75 ○130	5
					□90 □130 (165)	□80 □180 □525 (80)				6
不明 □35 □70 □75 □95 ○40 ○100 ○160 ○215 (70) (180)					□169 ○155	□80 □80 □80 □80 □70 □70 □110 ○80 ○90 ○100 (80) (100) (100)				7

第15表　第Ⅰ調査区石錘出土分布表



第16表　第Ⅱ調査区出土遺物分布表



第17表　第Ⅱ調査区出土石鏃・石斧数及び細石刃岩質表

平田遺跡出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

Ⅰ. はじめに

木次町平田遺跡の各ピットから、微細骨片化した人骨が若干検出された。

Ⅱ. 鑑定結果

各ピットから検出された人骨は、骨の遺残性はきわめて不良で、微細骨片化して骨名とその部位を特定しえないものが、大半を占めた。表1にその概要を示す。

Ⅲ. 考　　察

1. 被葬者数

各ピットの骨名を見ると（表l)、各ピットとも頭骨が検出されており各ピットの構造からして、被葬者が1体ずつ埋葬された可能性が高い。

2. 埋葬時の体位

各ピットの構造は､外径､深さとも1m以内であり､伸展葬はありえず､屈葬の可能性が高い。

3. 抱　　石

各ピットとも、かなり大きな石が検出されていることから、抱石の可能性も思量される。今後、同時代、同地方の事例を考慮して、検討課題としたい。

4. 被葬者の性別、年齢、身長

各ピットから検出した人骨は、風化が著しく、微細骨片化して、骨の部位の特徴を有していないので、性別、年齢（成人、小児の別)、身長は不詳である。

Ⅳ. ま と め

木次町平田遺跡の各ピットから、微細骨片化した人骨が、若干ずつ検出された。

1. C･D−6：頭骨片
2. D−5：頭骨片と長管骨片
3. D−6：頭骨片と長管骨片
4. D−7：頭骨片と長管骨片
5. E−4：頭骨片と長管骨片
6. 各ピットは、被葬者1体ずつが埋葬され、本遺跡では被葬者5体が確認された。しかし、他のピットからは、人骨が検出されていないことから、風化消失（小児骨を含めて）した可能性もある。
7. 各ピットの構造からして、埋葬体位は屈葬の可能性が高い。
8. 各ピットからの検出人骨は、微細骨片化しているので、性別、年齢と身長の推定は不詳である。

ピット名	採　取　位　置	骨片の大きさ (mm)		骨片数	骨　名	被葬者数
C・D−6	川砂の直上	微細骨片	3×5	1	頭骨	1
	底付近	〃	4×5	2	頭骨(？)	
D−5	石の上方	〃	2×2〜3×5	3	不詳	1
	〃　（砂1）	〃	1×1〜4×5	30	不詳	
	〃　（砂2）	〃	1×1〜3×6	6	長管骨	
	〃　（砂3）	〃	1×1〜3×5	24	長管骨	
	〃　（中層）	〃	1×1〜3×3	4	頭骨(？)	
	石の横	小骨片	1×2〜14×25	12	上腕骨(？)	
	石の上、下	微細骨片	1×2	2	不詳	
	石の直下	〃	3×3	1	不詳	
D−6	上方	〃	2×2〜5×7	12	長管骨	1
	石の横	小骨片	1×1〜10×10	7	頭骨(？)	
	石の下方	微細骨片	1×1〜2×3	4	不詳	
	石の下層	〃	2×2〜5×8	10	前腕骨(？)	
	底付近	〃	2×3〜7×8	11	長管骨	
E−7	下層	〃	2×4	2	頭骨(？)	1
	土中	〃	2×2	6	頭骨(？)	
E−4	石上層	小骨片	2×3〜3×16	15	前腕骨(？)	1
	〃　（砂1）	微細骨片	1×2〜4×7	33	長管骨	
	〃　（砂2）	〃	1×2〜6×8	32	長管骨	
	石付近（砂）	〃	1×1〜4×6	21	長管骨	
	石の下層（No.1.2.3）	小骨片	1×2〜5×15	5	上肢骨(？)	
	〃　（No.4.6）	微細骨片	2×2	1	不詳	
	〃　（No.7）	小骨片	1×2〜7×16	3	下肢骨(？)	
	〃　（No.8）	〃	5×12	1	下肢骨(？)	
	〃　（外周）	微細骨片	1×2〜3×3	7	頭骨(？)	
	〃　（側壁）	〃	1×1〜3×7	4	長管骨	
	〃　（底付近）	小骨片	2×20	1	腓骨	

第1表　平田遺跡各ピット出土人骨一覧

平田遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壌分析結果報告書

1997年2月28日

島根大学生物資源科学部土壌圏生態光学研究室
若　月　利　之、Md. Moro Buri

1. 目　　的

1996年10月2日、木次町教育委員会より以頼された以下の土壌資料で、(1) に関しては遺体埋設の可能性の有無、(2) と (3) については当時の生活面の位置の推定、等について土壌の理化学分析の結果を推定すること。

(1) A1-A29の埋設穴採取土壌

(2) B1-B5の70-150cm深度の土壌断面採取土壌

(3) C1-C10の80-130cm深度の土壌断面採取土壌

同じく11月19日、同教育委員会より依頼された木次縄文遺跡出土の壺の中の以下の土壌資料及び同土壌資料中に混入していた壺小片、木炭片、骨片、石灰等と推定される礫の理化学分析等により行うことにより、壺の用途等を推定すること。

(4) G2No8-Control, 1-8土壌

(5) 同上土壌中混入の壺小片、木炭、小骨片

2. 方　　法

炭素（C）と窒素（N）は住友化学NCアナライザーで測定した。その他無機元素は土壌を0.1規程塩酸溶液（土壌：溶液＝5g：30ml）で2時間抽出を3回反復後、100mlとして、抽出液を島津製のICP2000（高周波プラズマ発光分析装置）で分析した。

3. 結果と考察

上記の(1)－(3)に対応する分析結果を表1に示した。各元素の濃度は風乾土壌の重量ベースで示した。

(1) A1-A29の分析結果はA5-A9,A24-A26付近に、他の土壌サンプルに比べ3-4倍もの高濃度のリンが抽出された。又、A4,A11,A23,A26のような異常に小さいC/N比土壌の存在も認められた。その他の成分には一定の傾向を示す顕著な差異は認められなかった。リンや窒素の異常富化は、それらのサンプル付近に遺体が埋設されていた可能性があることを示すものと考えられる。

(2) Bの土壌断面ではB1とB2の間で有機炭素やリンの増加等が認められ、B2がかつての生活面であった可能性を示す。その他は連続的な変化であり一定の傾向は認められない。

(3) Cの土壌断面で見られる特徴としては有機炭素はC1からC10まで連続的に減少し、この傾向は交換性カルシウム、マグネシウム、抽出態イオウ等も共通である。従って、このデータからはC1-C10の間に埋没されたかつての生活面（旧表層土壌）を見い出す

ことは困難である。ただし、詳細に見ると、C4とC5の間及びC6とC7間の変化は急激であり、何らかの不連続面の存在を示唆する。

(4) 平田遺跡第2調査区出土の壺の土壌及びそれに混入していた小片の分析結果は表2に示した。

表2の土壌の分析結果で明瞭なことは壺の中の土壌は明らかに周辺の土壌に比べ交換性カリウムとナトリウムの濃度が高いことである。抽出されるマンガン、亜鉛銅等がNo.8-8からNo.8-1まで連続的に減少している。又No8-2の土壌間観察サンプルの窒素濃度が他と比べ少し高くなっている。

これらを土壌に混入した小片（壺のかけら、木炭片、骨片、その他と考えられる）を0.1規程の希塩酸で処理したときの観察結果は以下のとおりであった。

1.壺の小片、木炭片、骨片他各種：骨片と思われる灰色小片は溶解した。

2.G2No8-1混入物：灰色の小片は肉眼的に変化なし

3.G2No8-2混入物：同上

4.G2No8-3混入物：赤褐色と灰色の混入物は溶解した

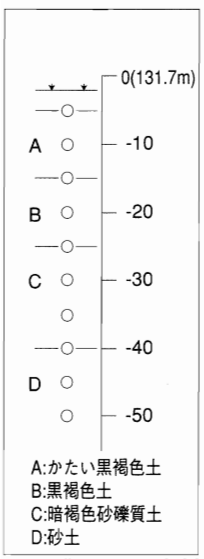
5.G2No8-4混入物：灰色の混入物は完全に溶解した

6.G2No8-5混入物：同上

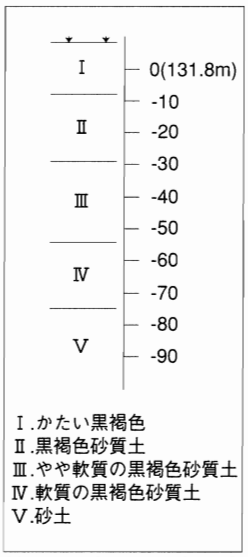
7.G2No8-6混入物：肉眼的変化なし

表2に示したこれら小片溶解物の化学分析結果より、この壺には炭化した木片以外に骨と思われる小片（G2No8-4）、主として石灰と思われる小片（G2No8-5）等も含まれることが分かる。

しかし、これらの小片の周辺土壌への影響はほとんど認められないことからすると、これらの小片はわずかの量しか壺に入れられていなかったのではないかと思われる。壺土壌中のカリウム相対的な富化はシイ、クルミ、ドングリ等の保存の結果を示すのかも知れない。



A5グリッド土壌
分析試料採取位置図



第Ⅱ調査区両壁面土壌
分析試料採取位置図

表1　平田遺跡土壌サンプル（1996年10月20日受入れ）

HIRATA ANCENT SAMPLE - LABORATORY ANALYTICAL RESULTS - SET

Sample	water	TC	TN	C/N	Ca	Mg	K	Na	S	Mn	Mo	Zn	Cu	P
Label	(%)	(%)	(%)	ratio	(meq/100g)				(ppm)					
Hirata-A1	0.32	0.524	0.0194	27.01	2.53	0.48	0.04	0.06	6.6	4.2	4.6	1.8	1.0	31.2
Hrata-A2	0.24	0.4944	0.0322	15.35	2.31	0.43	0.03	0.08	6.4	3.6	4.0	1.8	0.8	34.8
Hirata-A3	0.32	0.582	0.047	18.35	2.51	0.45	0.04	0.05	7.2	5.6	5.2	2.0	0.8	66.0
Hirata-A4	0.22	0.5908	0.185	18.12	2.91	0.51	0.03	0.05	6.6	5.6	4.8	2.2	0.8	53.0
Hirata-A5	0.26	0.445	0.038	3.19	1.94	0.35	0.02	0.04	7.2	5.4	5.2	1.8	0.6	90.4
Hirata-A6	0.31	0.4061	0.033	11.7	1.49	0.31	0.02	0.04	9.4	6.8	5.2	2.0	0.6	106.8
Hirata-A7	0.44	0.5023	0.0425	12.31	1.63	0.32	0.02	0.05	9.0	6.2	5.6	1.8	0.8	108.2
Hirata-A8	0.29	0.5288	0.0588	11.82	1.70	0.33	0.02	0.05	8.2	5.8	5.4	2.0	0.8	105.6
Hirata-A9	0.28	0.5652	0.0638	8.99	1.91	0.34	0.02	0.05	9.6	7.0	6.4	2.4	0.8	115.4
Hirata-A10	0.38	0.5831	0.0326	8.86	2.02	0.36	0.02	0.07	7.6	4.6	5.6	2.0	1.0	48.0
Hirata-A11	0.24	0746	0.1707	17.89	2.07	0.34	0.02	0.07	7.4	4.4	5.6	1.8	0.8	32.0
Hirata-A12	0.51	0.6954	0.0299	4.37	1.87	0.33	0.03	0.04	6.0	5.6	4.8	2.0	0.8	29.0
Hirata-A13	0.53	0.9631	0.0698	23.26	2.75	0.51	0.03	0.07	7.0	7.4	5.4	2.4	1.6	36.4
Hirata-A14	0.29	0.789	0.0783	13.80	1.73	0.31	0.03	0.06	6.2	3.8	4.8	1.8	0.8	33.4
Hirata-A15	0.33	0.6685	0.0932	7.17	1.60	0.29	0.03	0.07	6.0	3.6	4.6	1.8	0.8	34.4
Hirata-A16	0.37	0.6848	0.0556	12.32	1.75	0.32	0.03	0.04	6.4	4.2	5.2	2.0	0.8	35.6
Hirata-A17	0.49	0.6457	0.0176	36.69	1.89	0.35	0.03	0.06	5.6	3.2	5.0	2.2	1.2	24.2
Hirata-A18	0.29	0.5768	0.0333	17.32	1.59	0.27	0.02	0.06	6.4	4.2	4.8	1.8	0.8	33.0
Hirata-A19	0.36	0.271	0.0174	15.57	1.51	0.31	0.03	0.11	5.6	7.0	3.4	1.8	0.6	21.6
Hirata-A20	0.15	0.0243	0.0027	9.00	1.63	0.36	0.03	0.06	4.8	4.4	3.2	1.8	0.6	19.4
Hirata-A21	0.32	0.2697	0.0199	13.55	1.74	0.40	0.03	0.06	4.6	15.6	3.4	1.8	0.6	17.6
Hirata-A22	0.26	0.3059	0.027	11.33	1.66	0.36	0.03	0.07	6.4	6.2	4.2	1.8	0.6	74.4
Hirata-A23	0.36	0.2967	0.0516	5.75	2.22	0.51	0.04	0.07	5.8	5.0	4.4	1.8	0.6	65.6
Hirata-A24	0.36	0.558	0.0115	48.52	2.17	0.36	0.03	0.05	6.0	8.2	4.6	1.8	0.8	108.0
Hirata-A25	0.69	0.5648	0.0223	25.33	1.95	0.34	0.02	0.05	8.4	7.8	5.6	1.8	0.8	127.8
Hirata-A26	0.31	0.6192	0.102	6.07	1.80	0.27	0.02	0.06	8.2	7.6	5.4	1.8	2.6	127.8
Hirata-A27	0.58	0.7692	0.0953	8.07	1.79	0.27	0.02	0.06	8.0	13.4	5.0	2.0	1.0	67.6
Hirata-A28	0.38	0.6247	0.0331	18.87	1.40	0.21	0.02	0.04	6.2	5.2	4.4	1.8	0.6	40.8
Hirata-A29	0.48	0.778	0.0352	22.39	1.89	0.36	0.03	0.06	8.8	11.8	6.8	2.2	0.8	48.0
Hirata-B1	0.27	1.413	0.0875	16.15	3.44	1.16	0.03	0.24	8.0	35.8	5.0	2.2	2.0	17.8
Hirata-B2	0.31	1.7638	0.0993	17.76	2.43	0.51	0.02	0.17	10.4	12.8	5.6	2.6	1.0	34.4
Hirata-B3	0.27	1.2859	0.0806	15.95	1.77	0.32	0.02	0.12	12.0	7.4	4.6	2.4	0.6	25.6

Sample	water	TC	TN	C/N	Ca	Mg	K	Na	S	Mn	Mo	Zn	Cu	P
Label	(%)	(%)	(%)	ratio	(meq/100g)				(ppm)					
Hirata-B4	0.28	0.851	0.0441	19.30	1.34	0.25	0.02	0.18	14.6	5.0	4.0	2.0	0.6	24.8
Hirata-B5	0.21	0.4254	0.0106	40.13	1.07	0.23	0.02	0.21	13.2	6.8	3.2	2.0	0.8	38.2
Hirata-C1	0.29	1.8358	0.0855	21.47	4.02	0.70	0.02	0.15	7.8	6.2	7.0	2.6	0.6	31.2
Hirata-C2	0.88	1.8639	0.0313	59.55	3.54	0.59	0.02	0.08	6.4	3.4	6.4	2.4	0.6	25.4
Hirata-C3	0.35	1.5262	0.0739	20.65	3.39	0.64	0.03	0.17	7.6	8.4	8.0	2.4	0.8	42.0
Hirata-C4	0.36	1.2695	0.0466	27.24	2.84	0.63	0.02	0.19	7.6	6.8	6.8	2.4	0.8	41.2
Hirata-C5	0.35	0.8356	0.0453	18.44	2.05	0.53	0.02	0.18	6.4	7.8	5.6	2.4	1.0	46.8
Hirata-C6	0.21	0.7245	0.0387	18.72	1.77	0.46	0.02	0.15	6.8	6.8	5.2	2.2	1.0	59.2
Hirata-C7	0.18	0.4534	0.015	30.23	1.36	0.39	0.02	0.07	4.4	5.4	3.4	2.2	0.8	40.8
Hirata-C8	0.15	0.2933	0.0557	5.27	1.06	0.31	0.02	0.08	3.8	5.0	2,4	2.0	0.8	37.2
Hirta-C9	0.17	0.1924	0.0177	10.87	0.95	0.25	0.02	0.05	3.0	4.2	1.8	1.6	0.6	34.0
Hirata-C10	0.16	0.1456	0.0135	10.79	1.o2	0.28	0.02	0.08	3.6	6.0	2.0	1.8	0.4	44.2

表2　平田遺跡（木次縄文遺跡）出土壺の土壌およびその混入物の分析結果

Sample	water	TC	TN	C/N	Ca	Mg	K	Na	S	Mn	Mo	Zn	Cu	P
Label	(%)	(%)	(%)	ratio	(meq/100g)				(ppm)					
G2No.8 Control	0.62	3.6584	0.1255	29.15	4.86	0.53	0.07	0.12	12.2	6.0	10.0	0.8	trace	19.2
G2No.8-1	0.40	2.8899	0.1245	23.21	3.36	0.40	0.48	0.34	7.6	14.6	5.8	0.4	trace	11.0
G2No.8-2	0.52	2.9936	0.2001	14.96	3.72	0.44	0.52	0.35	7.6	15.0	7.2	0.6	0.2	17.2
G2No.8-3	1.62	3.0534	0.1195	25.55	4.08	0.48	0.53	0.36	8.4	17.0	7.6	0.8	0.4	18.6
G2No.8-4	0.50	3.5182	0.1139	30.88	4.31	0.49	0.53	0.34	9.0	18.6	7.4	1.0	0.6	19.0
G2No.8-5	0.54	3.4023	0.0965	35.25	4.84	0.56	0.52	0.37	10.0	22.4	7.8	1.2	0.8	17.8
G2No.8-6	0.58	3.5419	0.0972	36.44	4.63	0.54	0.52	0.30	9.8	23.4	7.6	1.2	0.6	16.0
G2No.8-7	0.55	3.5301	0.1425	24.77	5.03	0.63	0.54	0.32	11.0	28.6	8.4	1.4	0.8	17.2
G2No.8-8	0.60	3.6638	0.0981	37.34	4.68	0.58	0.47	0.24	10.0	32.4	8.4	1.4	0.8	16.2
※ツボの小片、木炭片、骨片	—	—	—	—	9.59	1.34	0.63	0.49	30.7	32.3	10.0	0.7	0.2	37.4
※G2No.8-1 (>20.0)cm	—	—	—	—	0.94	0.06	0.27	0.47	24.8	53.8	trace	trace	trace	29.0
※G2No.8-2 (17.0～20.0)cm	—	—	—	—	4.13	1.09	0.71	1.33	30.5	77.6	2.5	5.1	1.3	151.3
※G2No.8-3 (15.0～17.5)cm	—	—	—	—	7.44	2.06	1.20	0.84	27.0	81.9	8.6	10.2	1.2	30.7
※G2No.8-4 (12.5～15.0)cm	—	—	—	—	41.23	6.42	7.58	30.89	1468.9	1412.9	106.5	8641.7	57.9	4044.2
※G2No.8-5 (10.0～12.5)cm	—	—	—	—	48.01	4.58	2.16	2.32	103.8	226.4	28.3	9.4	9.4	132.1
※G2No.8-6 (7.0～10.0)cm	—	—	—	—	3.28	0.86	0.48	0.38	20.8	92.7	1.6	1.6	trace	65.5

※　土壌混入小片

木次町平田遺跡堆積層中の アカホヤ火山灰層降灰層準の推定

島根大学情報科学理工学部
中　村　唯　史

はじめに

1995年度に行なわれた木次町温泉小学校前の平田遺跡の発掘調査では、河川堆積層が重なる河岸段丘上の黒色土壌化した堆積層から縄文時代後期の遺物が出土した。そこで、この遺跡の古環境を復元する資料として、縄文時代の広域示準火山灰であるアカホヤ火山灰の降灰層準について検討を行なった。

アカホヤ火山灰について

アカホヤ火山灰は九州の南の海中にる鬼界火山の噴火によって降灰した火山灰で、西日本を中心に広い範囲で確認されている。降灰時期は6,300y.B.Pと推定されており、縄文時代早期末を示す火山灰層として、遺跡調査において有効な鍵層である。島根県東部では完新世の内湾あるいは湖成堆積層に層厚2cm以下の地層としてみいだされるが、陸成の堆積層中にみいだされることはまれである。しかし、火山ガラスの形態および色調が特徴的であることから、地層としてみいだされなくても、火山ガラスの顕微鏡観察によって降灰層準の決定は可能である。

平田遺跡堆積層の概略

平田遺跡は木次町の斐伊川とその支流の合流点近くに位置する。合流点付近は平坦な河岸段丘が形成されており、平田遺跡は段丘上に立地する。調査区内の層序は、淘汰の良い細粒砂層が南から北へ低くなる傾斜地形を校正し、このうえに黒色土壌化の進んだ堆積層が重なる。この堆積層の上部のもっとも黒色化が進んだ層準に縄文時代後期の遺物が含まれる。調査区内北側では黒色土壌化層の上位に淘汰の良い細粒砂層が重なる。このうえに近年の水田耕作土が重なり、調査区内南側では黒色土壌化層の上位に直接水田耕作土が重なる。遺物包含層を挟んで上下にある細粒砂層は、おもに花崗岩に由来する砂から構成され、不明瞭であるが、平行葉理またはきわめて低角の斜交葉理が認められる。これらの砂層は河川の洪水堆積層とみられる。

試料の採取と処理

試料は調査区北壁（地点A）および中央サブトレンチそばに柱状に残された区画（地点B）から、黒色土壌化層を鉛直方向に10cmおきに厚さ2cmの試料を、それぞれ6試料と7試料の計13試料採取した。

約20gの試料に過酸化水素水を加え有機分を分解した後、250メッシュのふるいで水洗し、

超音波洗浄で砂粒に付着した粘土分を取りのぞいた。乾燥後、60メッシュのふるいで粗粒分を取りのぞいた60-250メッシュ間の粒子をバルサムでスライドグラスに封入し、検鏡用試料とした。試料は顕微鏡下で全粒子の数が400個を越えるまで計算し、その中に含まれる火山ガラスの量を求めた。

火山ガラスの量

火山ガラスの量は地点A,地点Bのいずれの層準においても2%以下である（別図）。ピークは地点Bの上部で、黒色土壌化が進み、縄文時代後期の遺物を含む層準である。これより下位の層準ではとくに目立った変化は認められない。

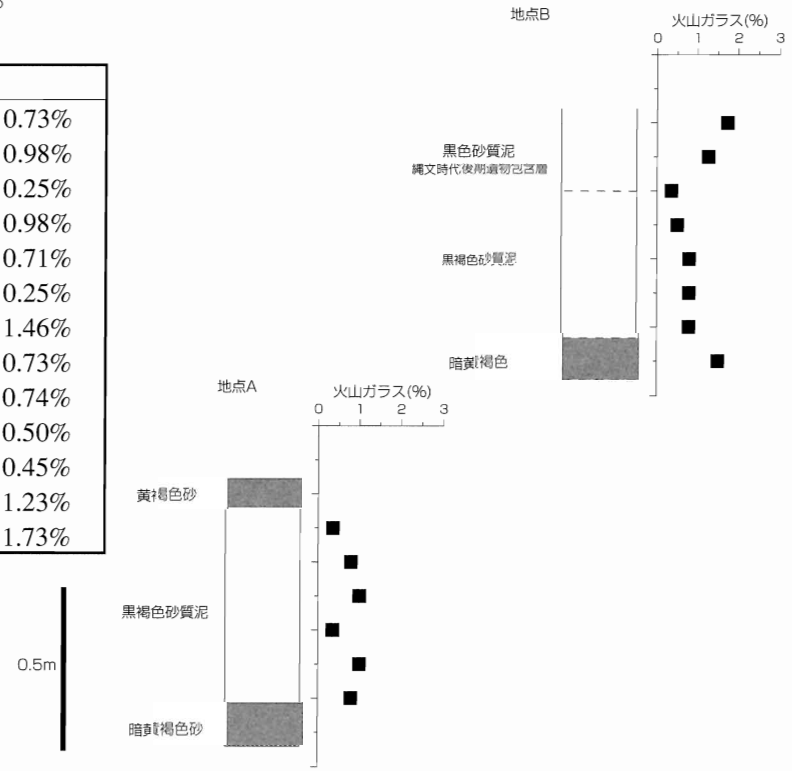
アカホヤ火山灰降灰層準

地点A、地点Bの両地点とも火山ガラスの量が特徴的に多くなる層準は認められず、試料を採取した層準にはアカホヤ火山灰の降灰層準は存在しないと考えられる。地点Bの上部で他の層準より火山ガラス量が多いのは、この層準は土壌化がすすんでいることから、他の層準に比べ堆積速度が遅く、火山ガラスが濃集したためと考えられる。

まとめ

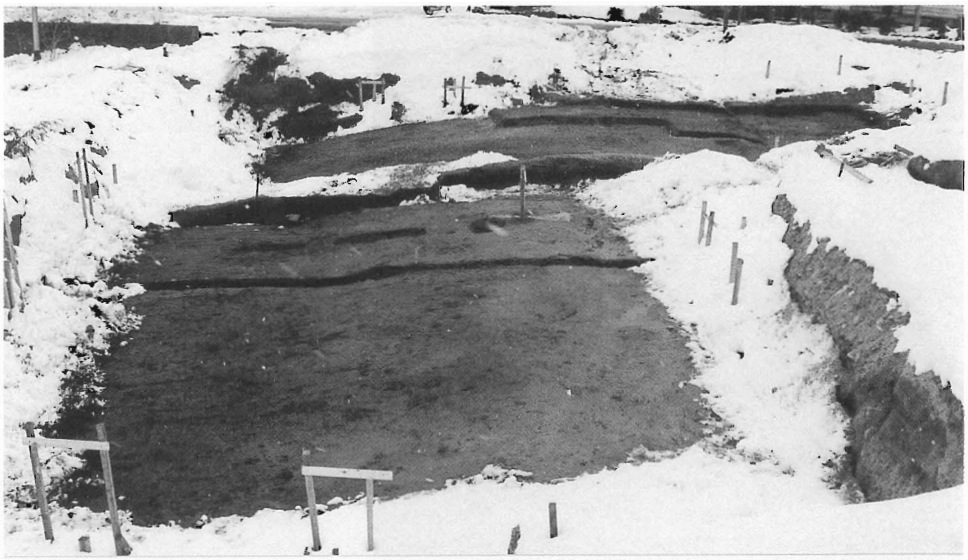
平田遺跡の調査区内の堆積層中には、アカホヤ火山灰の降灰層準が存在しないと考えられる。このことは平田遺跡で検出された縄文時代後期の生活面は、アカホヤ火山灰降灰以降に形成された地形面であると考えられる。遺跡および周辺の河岸段丘の形成時期を検討するうえで興味深い結果と思われる。

Sample	Grain	Grass	
A1	409	3	0.73%
A2	408	4	0.98%
A3	405	1	0.25%
A4	409	4	0.98%
A5	425	3	0.71%
A6	407	1	0.25%
B1	411	6	1.46%
B2	410	3	0.73%
B3	406	3	0.74%
B4	403	2	0.50%
B5	446	2	0.45%
B6	406	5	1.23%
B7	404	7	1.73%



木次町平田遺跡堆積層中の火山ガラス量

図　　版



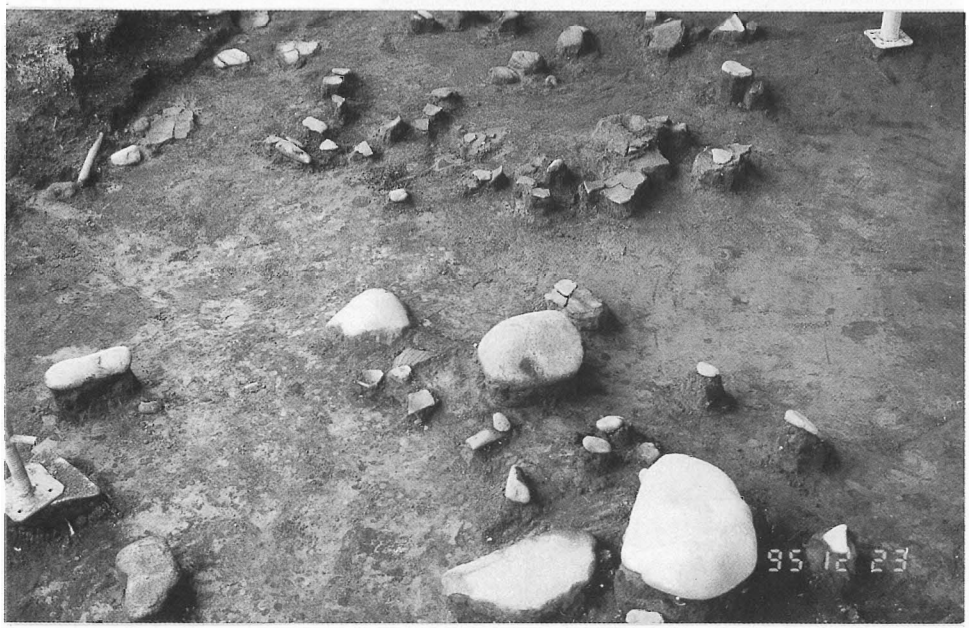
調査区全景（完掘状況）

F～Iライン遺物出土状況
（初期、西より）

F～Jライン遺物出土状況
（東より）

第Ⅰ調査区遺物出土状況等（1）

集石周辺の土器出土状況
（北より）



焼土周辺遺物出土状況
（南より）

D−2グリッド遺物出土状況
（東より）

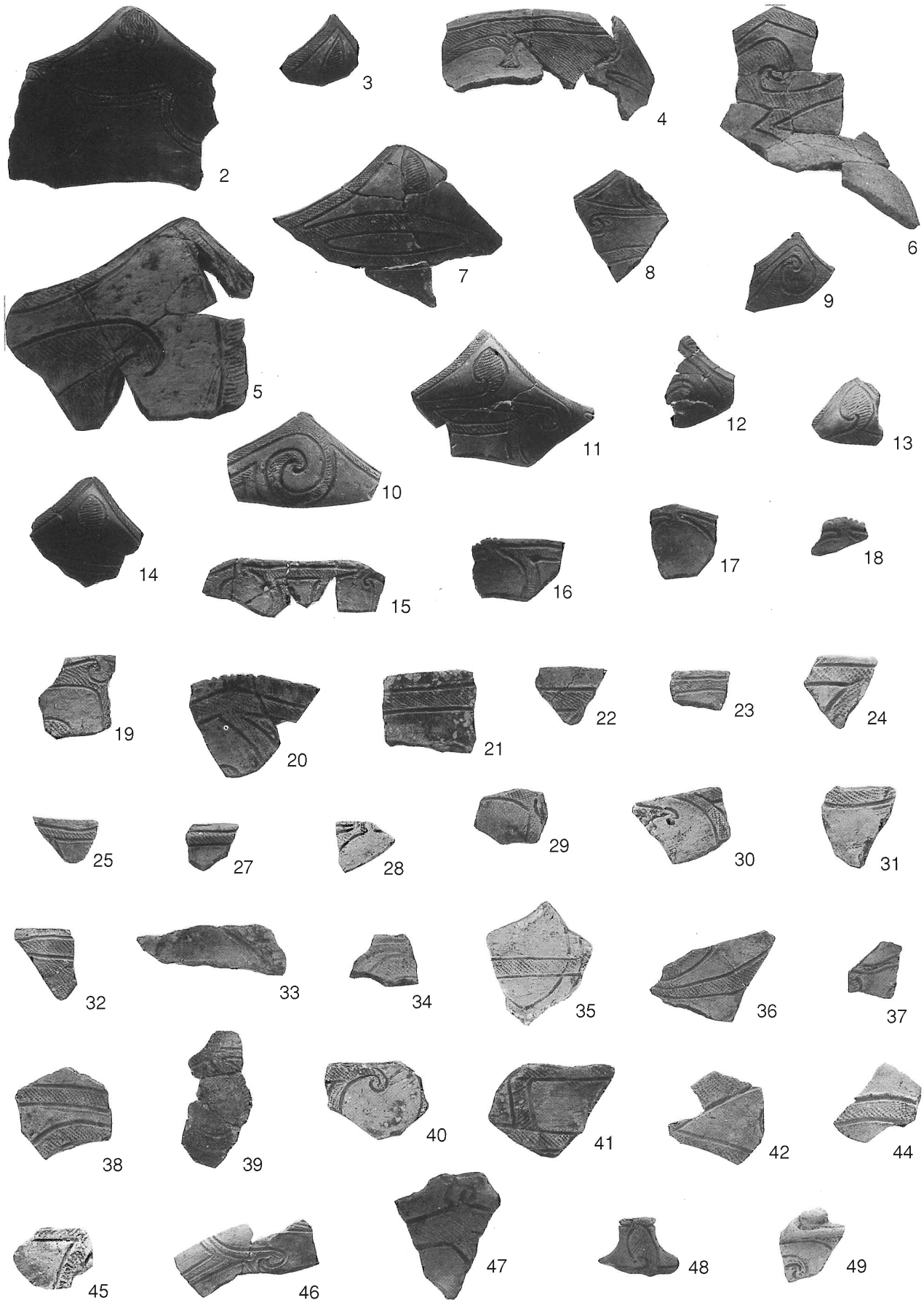
第Ⅰ調査区遺物出土状況等（2）

集石、粗製土器底部出土状況
（西より）

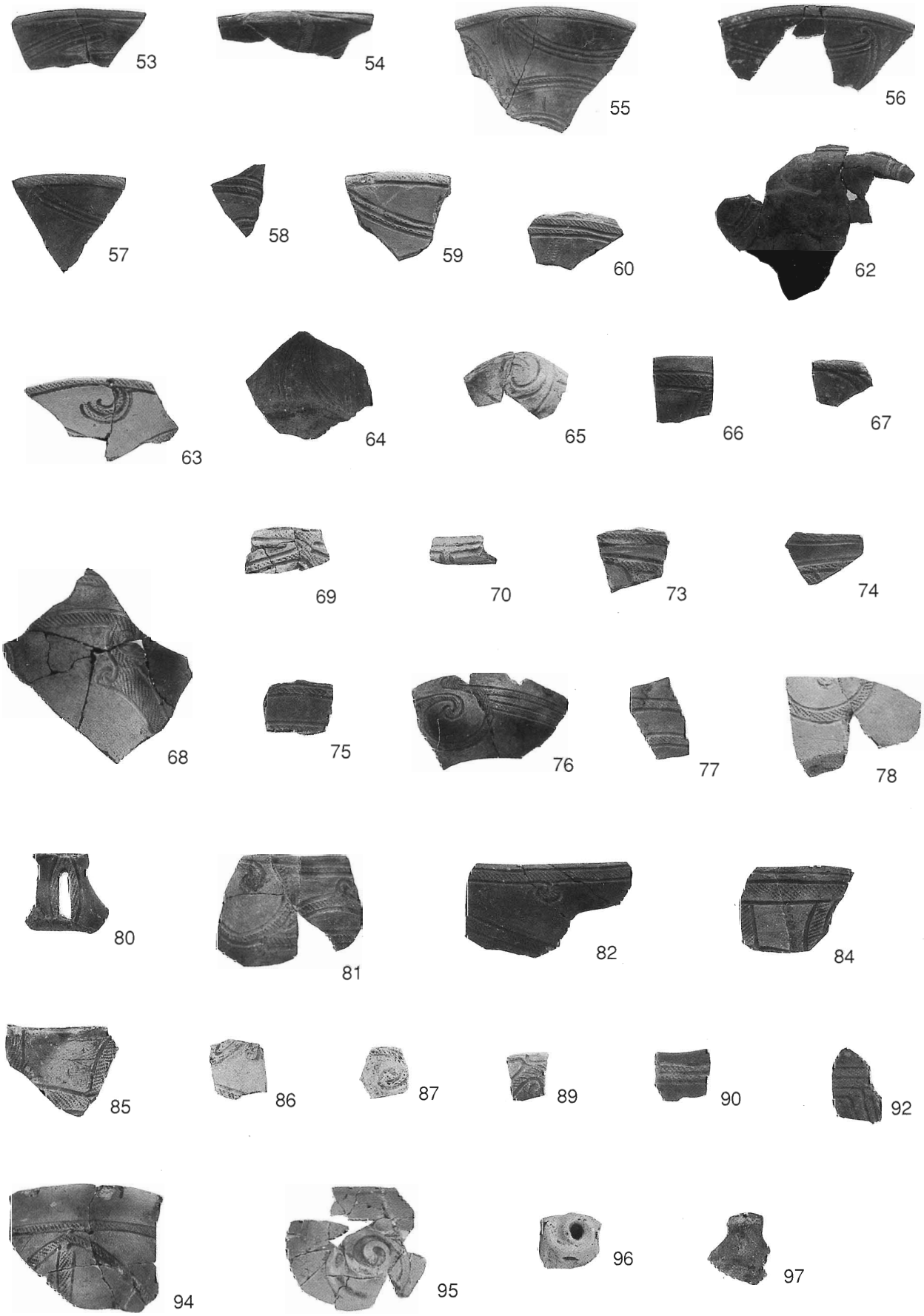
精製有文土器出土状況
（西より）

倒立土器周辺遺物出土状況
（西より）

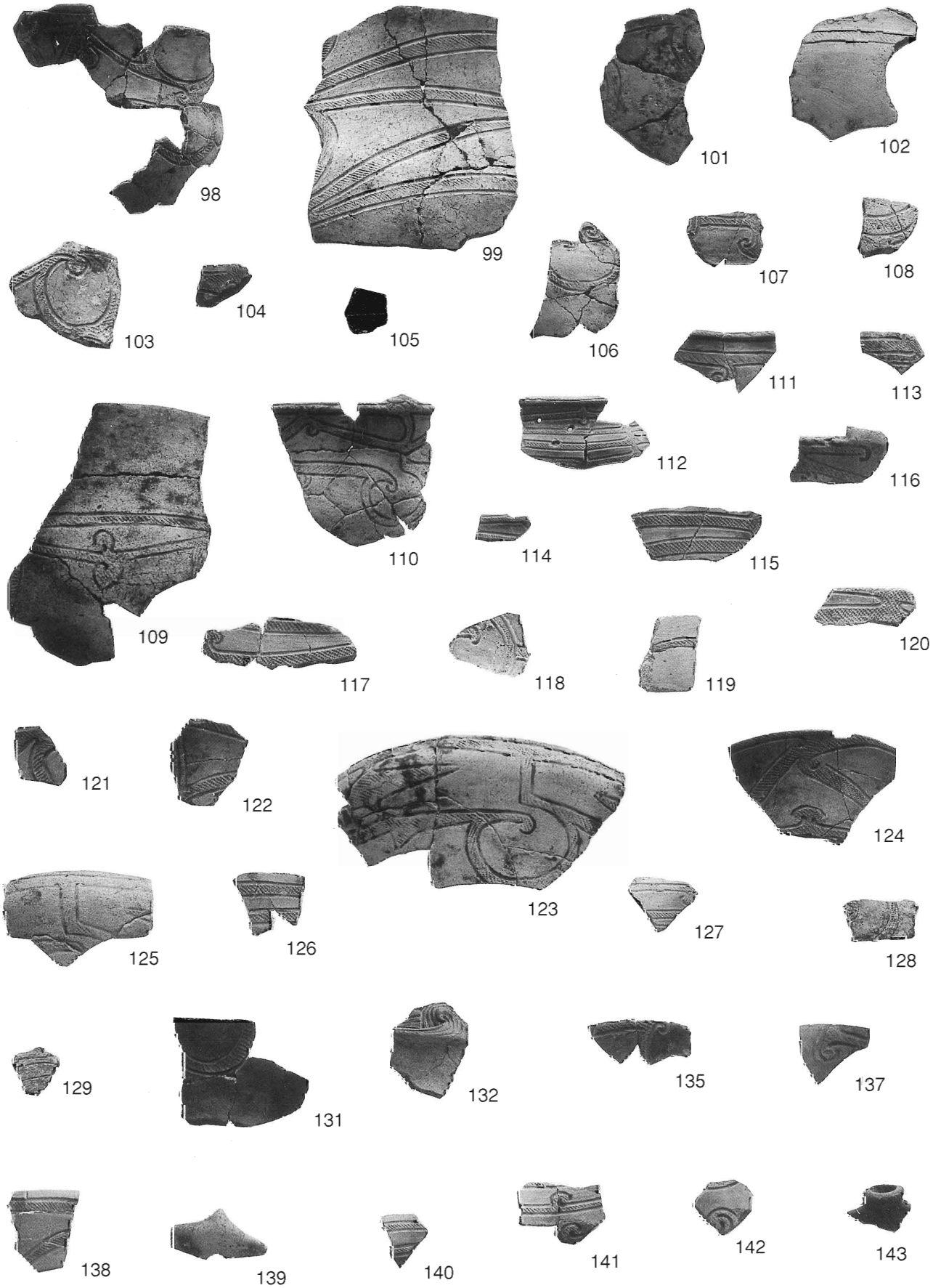
第Ⅰ調査区遺物出土状況等（3）



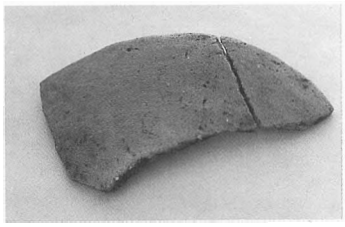
第Ⅰ調査区出土磨消縄文土器（1）



第Ⅰ調査区出土磨消縄文土器（2）

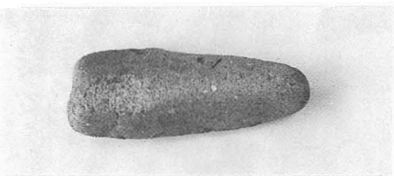
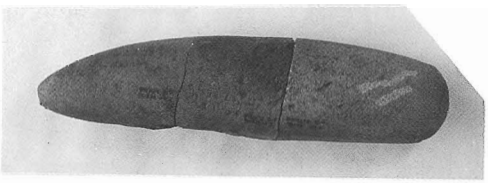
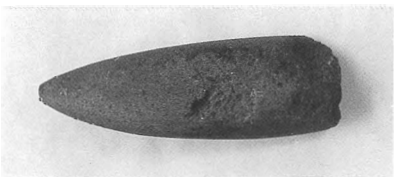


第Ⅰ調査区出土磨消縄文土器（3）



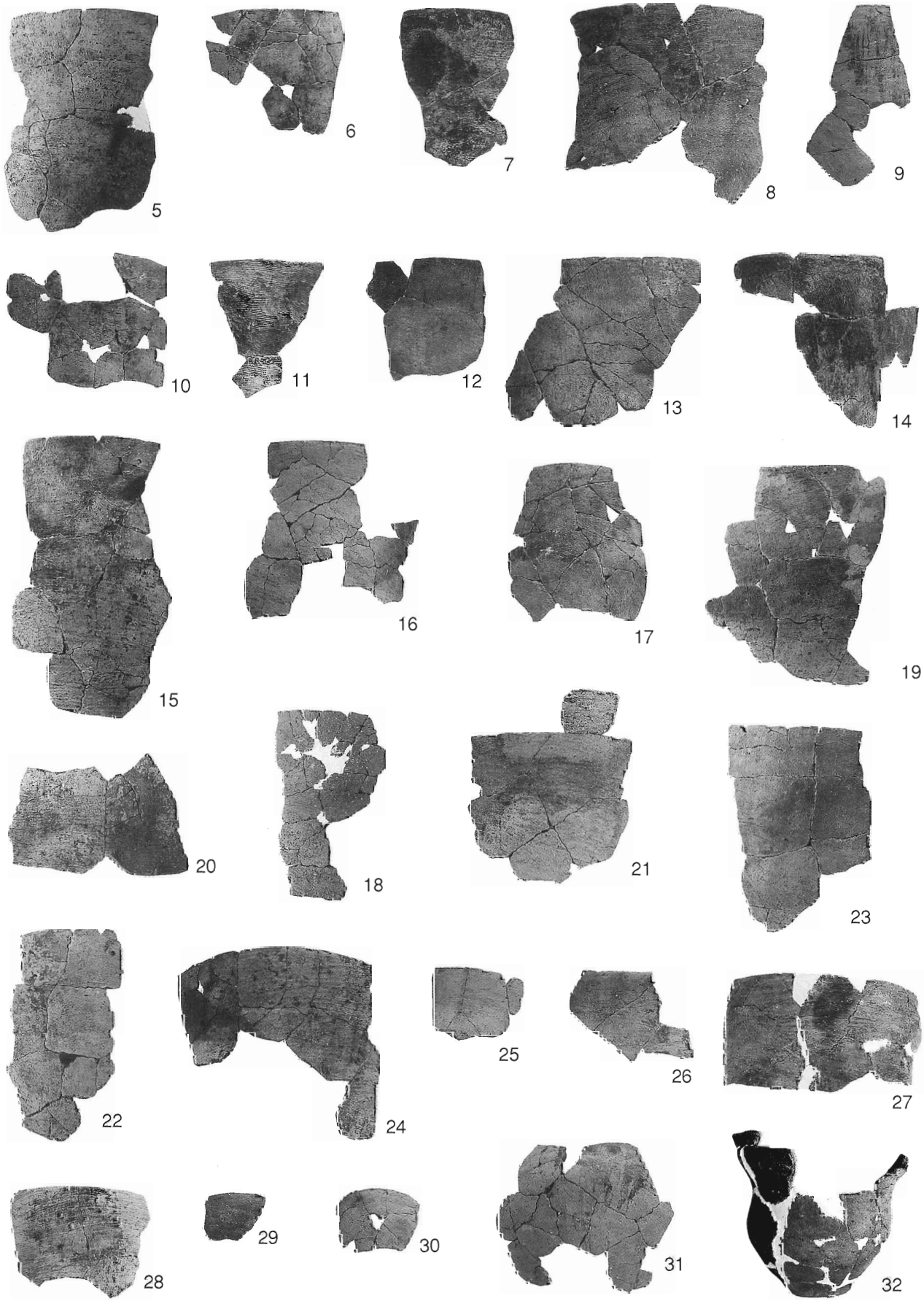
	1		4
5	6	7	

第Ⅰ調査区出土精製縄文土器（浅鉢）

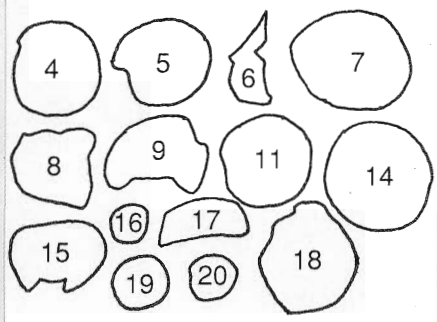




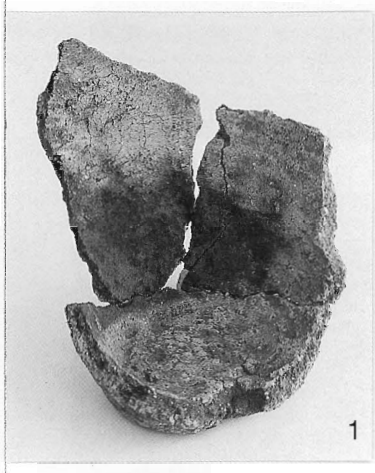
2	3			
1	6	7	4	5

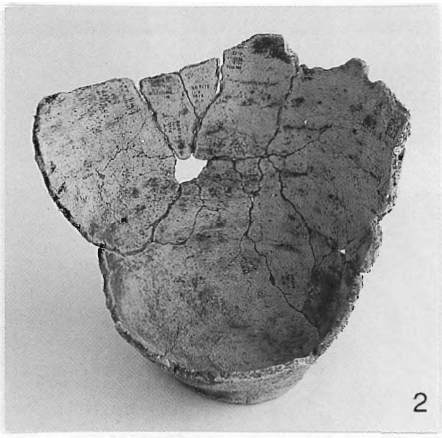
第Ⅰ調査区焼土周辺と出土遺物

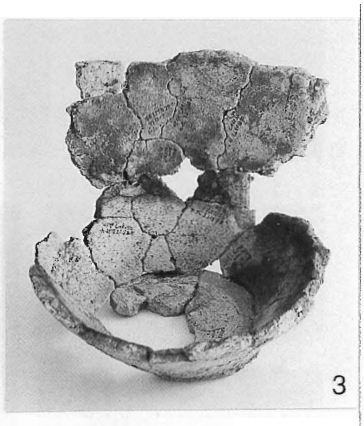


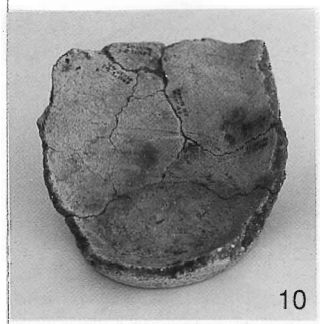
第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器

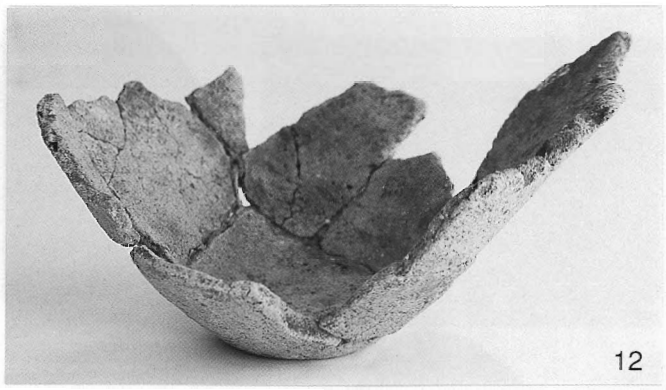


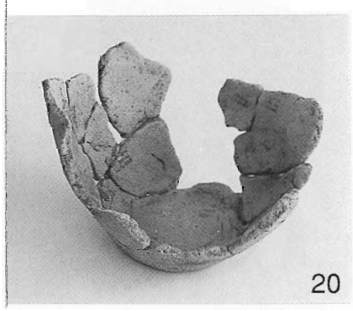












第Ⅰ調査区出土粗製縄文土器（底部）

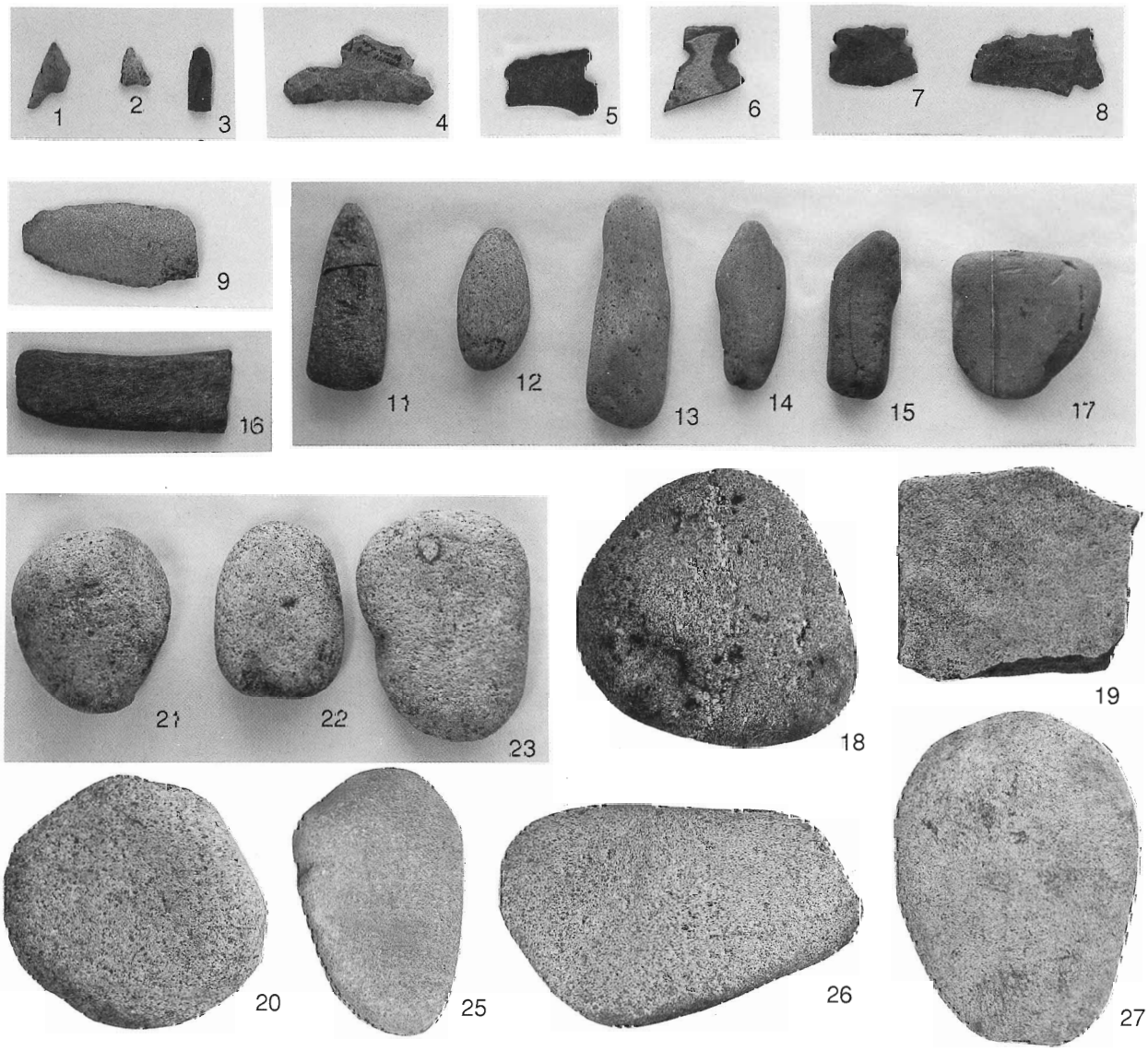
1～7

8～15

16～22

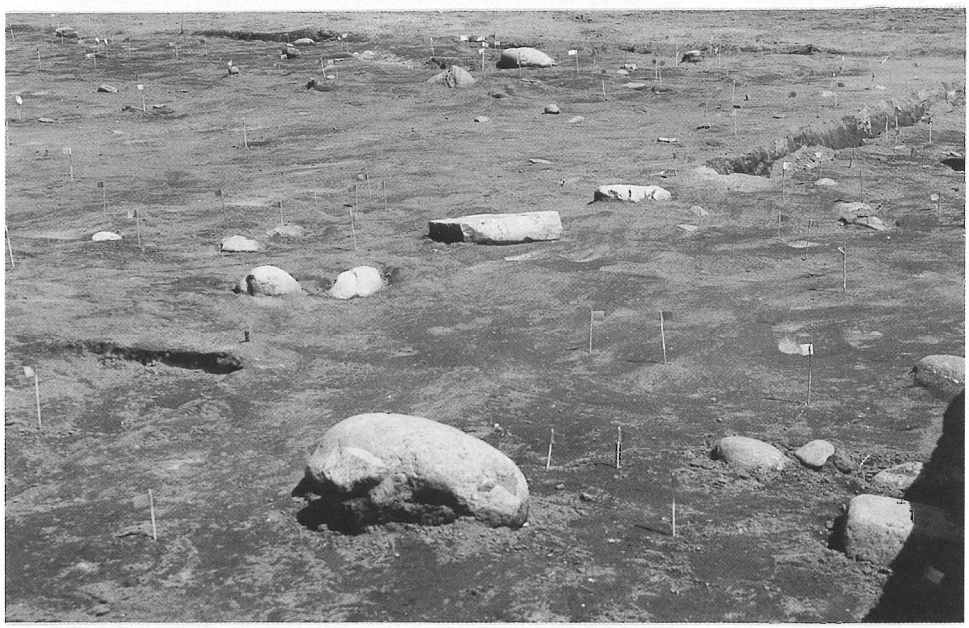
23～28

第Ⅰ調査区出土石錘

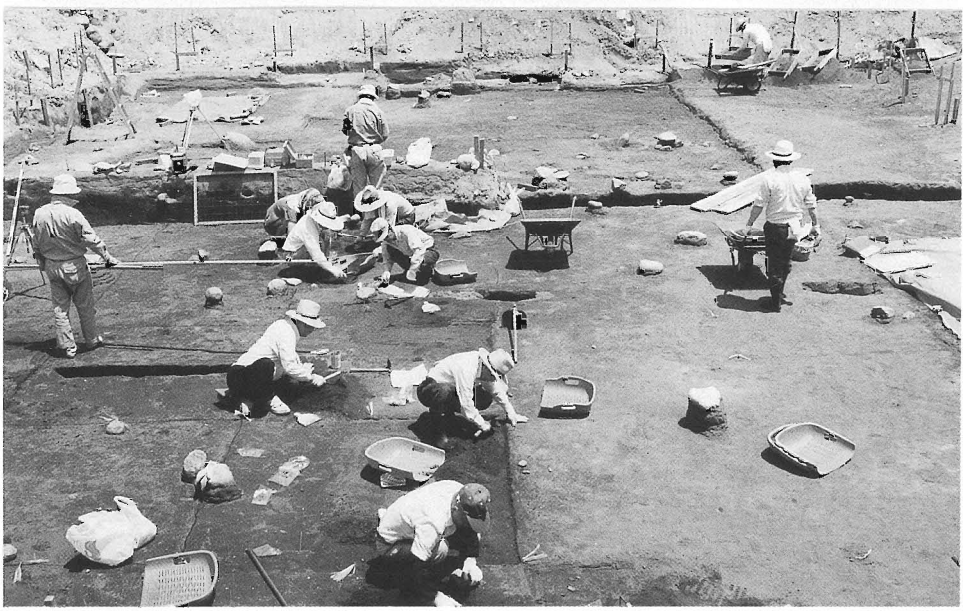


第Ⅰ調査区出土石器類

調査区全景
（完堀状況、北より）



石鏃、剥片出土状況
（標識位置北より）



発掘作業風景
（西より）

第Ⅱ調査区遺講、遺物出土状況等（1）

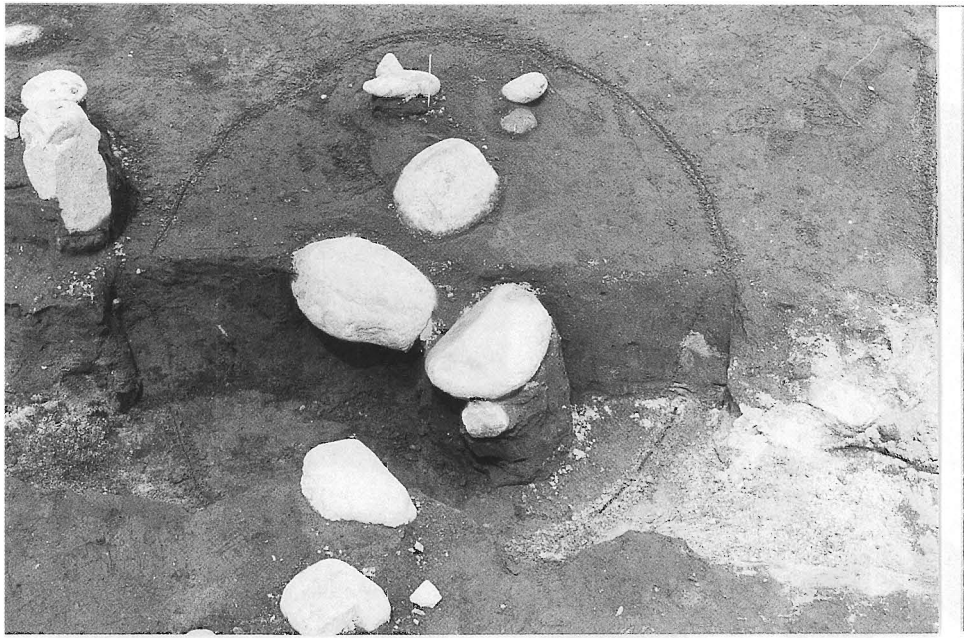
▲C・D－6土壙遺物（土器石斧）出土状況（北より）

▼D－5土壙骨片出土状況（中央やや左）

▲A－2土壙（南より）

▼A－6土壙（西より）

第Ⅱ調査区遺講、遺物出土状況等（2）

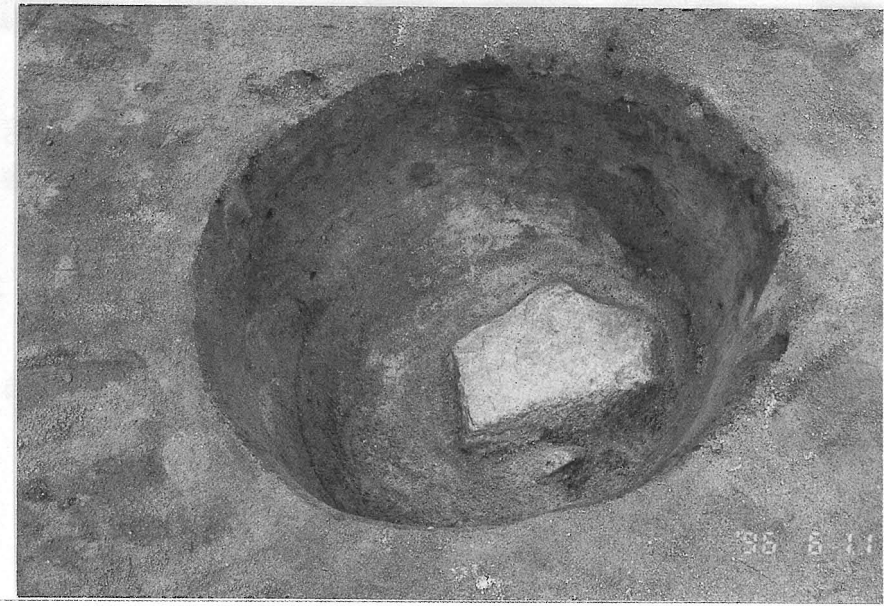


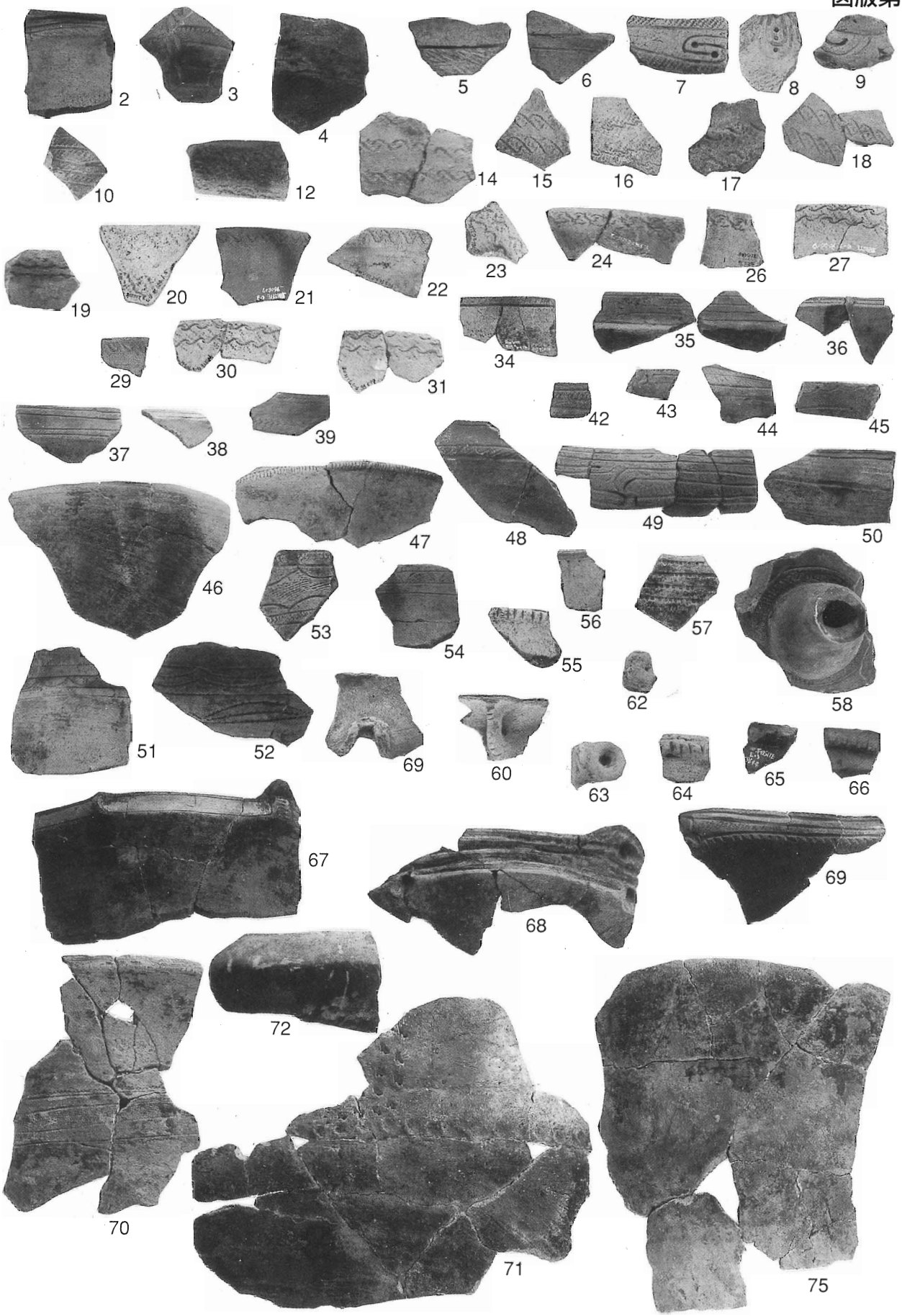
▲D－6土壙（西より）

▲E－7土壙（北より）

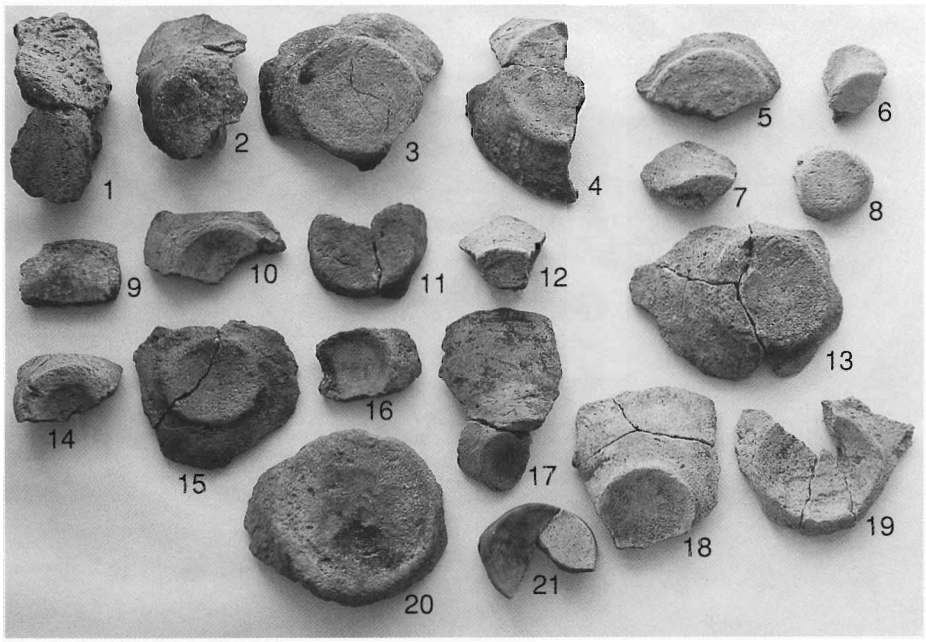
▼E－4土壙骨片出土状況（竹くしの位置、南より）

▼G－5凹穴（西より）



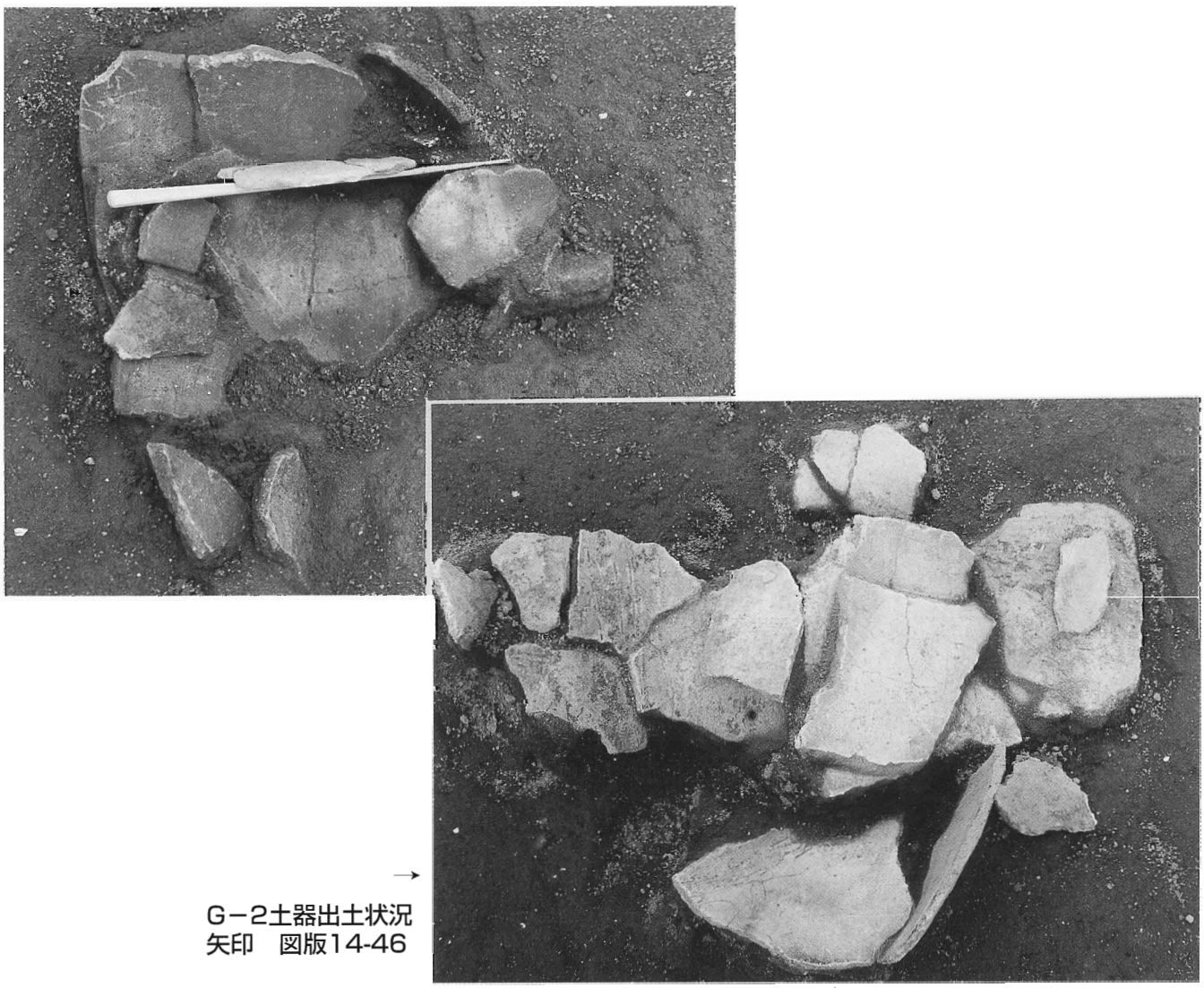


第Ⅱ調査区出土縄文土器



底　部

D－3土器出土状況
図版第14－75

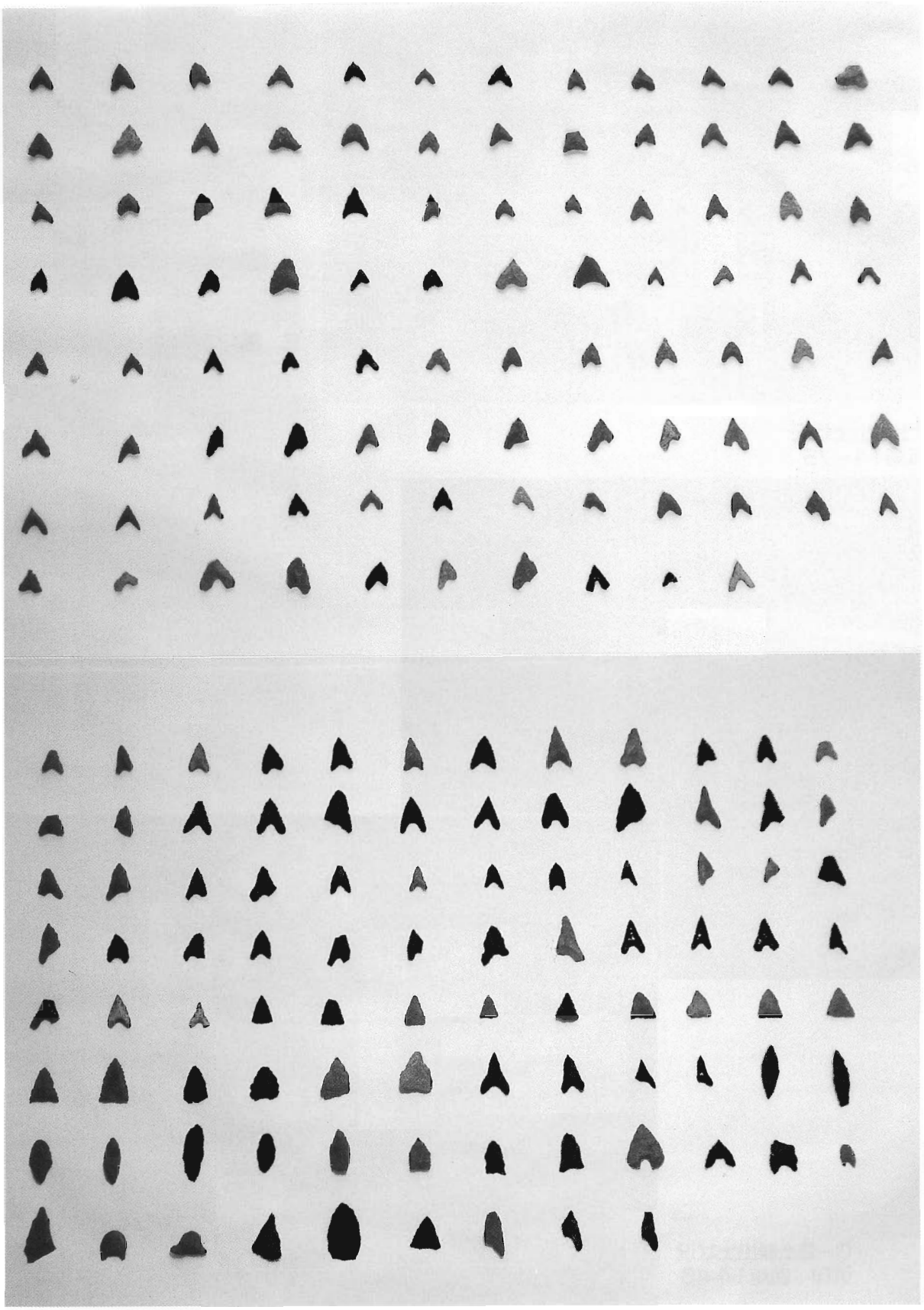


→

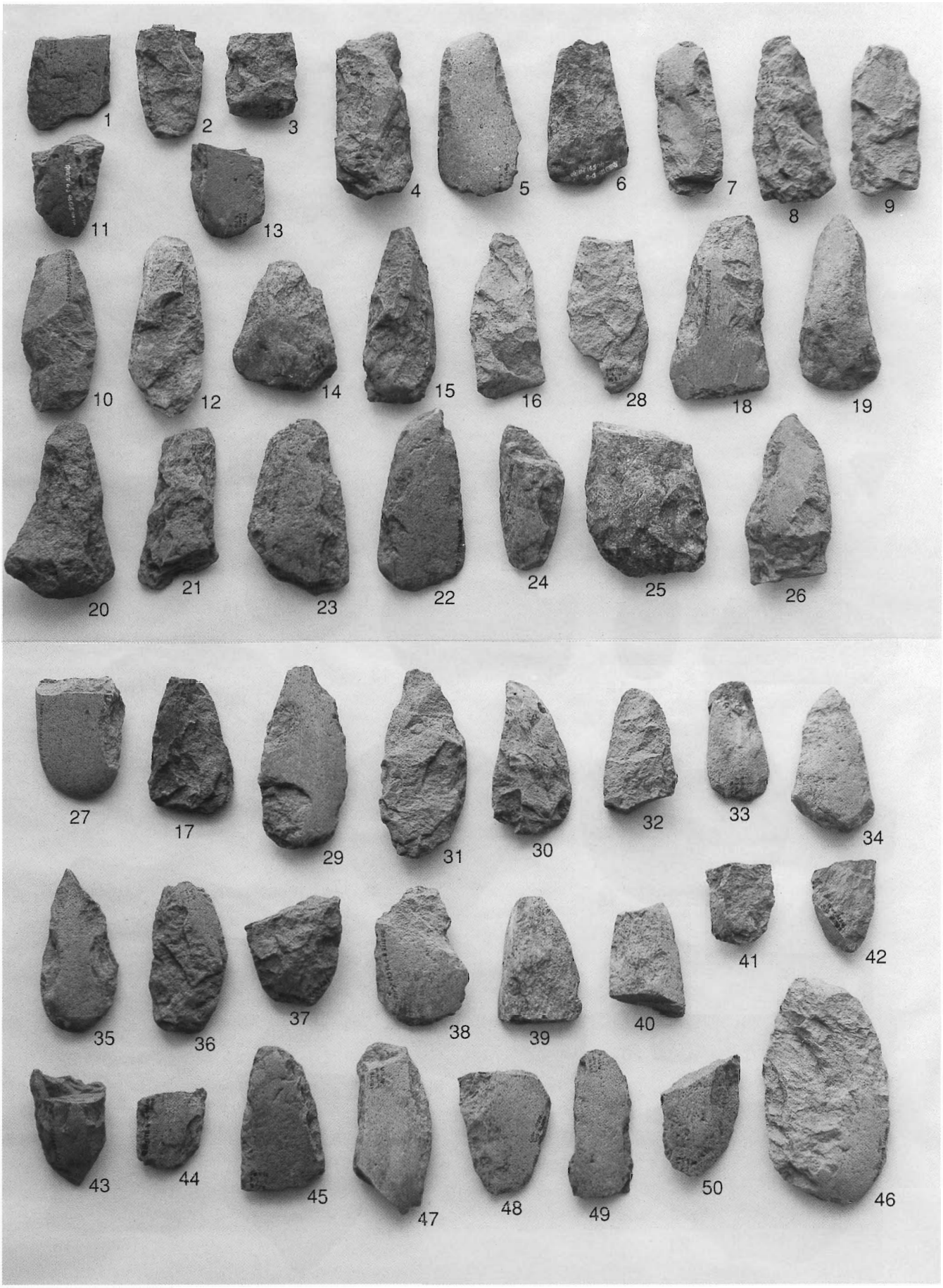
G－2土器出土状況
矢印　図版14-46

第Ⅱ調査区出土縄文土器

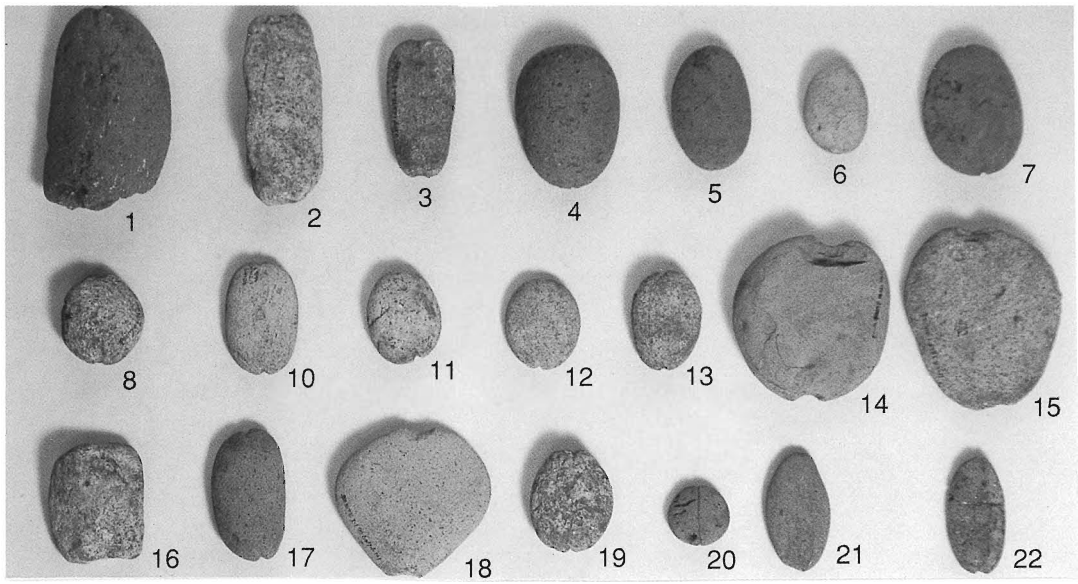
↑

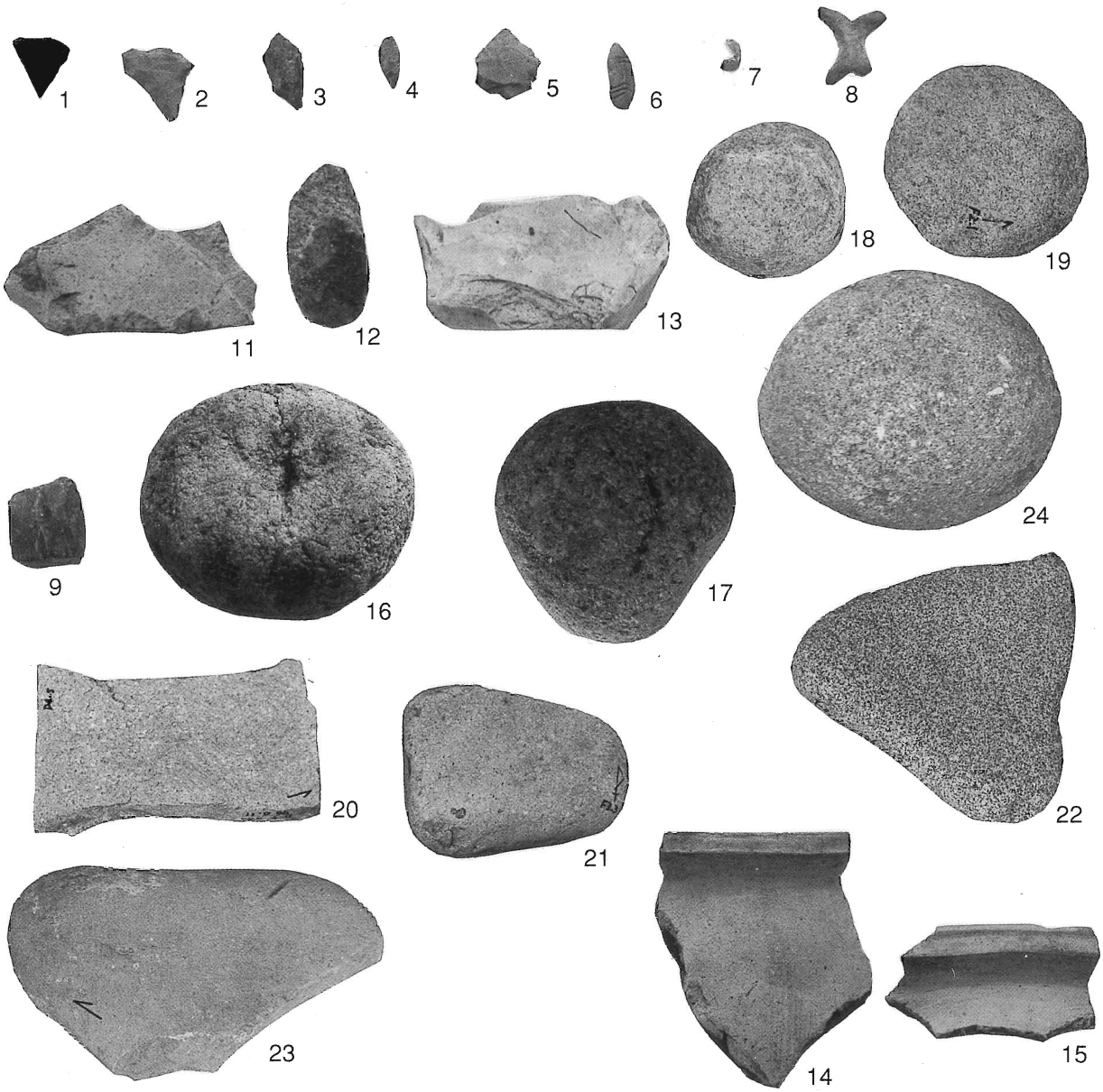

1～12
13～24
25～36
37～48
49～60
61～72
73～84
85～94
95～106
107～118
119～130
131～142
143～154
155～166
167～178
179～187

第Ⅱ調査区出土石鏃


1
2
3
4
5
6
7
8
9
11
13
10
12
14
15
16
28
18
19
20
21
23
22
24
25
26
27
17
29
31
30
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
47
48
49
50
46

第Ⅱ調査区出土石斧





第Ⅱ調査区出土石錘その他石器、弥生土器

C・D−6土壙

1

2

3

4

D−5土壙

2

1

3

E−7土壙

1

2

3

6

5

7

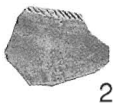
D−6土壙

1

2

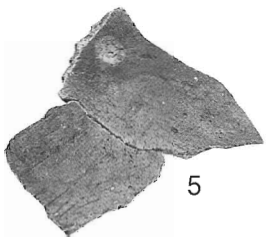
E−4土壙

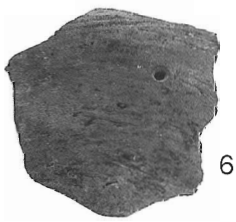
1

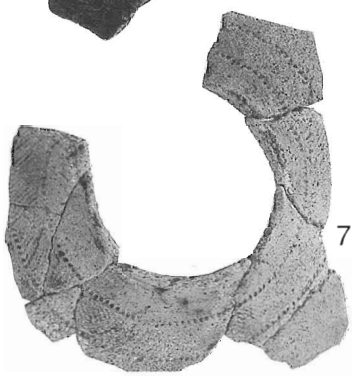

2

3

4


5


6


7

10

8

第Ⅱ調査区土壙内出土遺物

1997年　3月15日　初版
2004年10月15日　改訂

平　田　遺　跡

木次町文化財調査報告書第4集

編集・発行
木次町教育委員会
〒699—13　島根県大原郡木次町1013—1
TEL(0854)42—1925

印刷・製本
松栄印刷有限会社